

平成 28～令和 2 年度科学研究費助成事業（基盤研究 C）

研究成果報告書（課題番号：16K03179）

6世紀の埴輪生産からみた「部民制」の実証的研究

2021 年 3 月

研究代表者 廣瀬 覚

（独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 主任研究員）

奈良文化財研究所

平成 28～令和 2 年度科学研究費助成事業（基盤研究 C）

研究成果報告書（課題番号：16K03179）

6世紀の埴輪生産からみた「部民制」の実証的研究

2021 年 3 月

研究代表者 廣瀬 覚

（独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 主任研究員）

奈良文化財研究所

例　　言

1. 本書は科学研究費（学術研究助成基金助成金（基盤研究C））の交付を受けて実施した「6世紀の埴輪生産からみた「部民制」の実証的研究－奈良盆地を中心に－」（課題番号：16K03179）に関する研究成果報告書である。

2. 研究経費

平成28年度	直接経費	1700千円	間接経費	510千円
平成29年度	直接経費	500千円	間接経費	150千円
平成30年度	直接経費	500千円	間接経費	150千円
令和元年度	直接経費	900千円	間接経費	270千円
令和2年度		(補助事業期間延長)		
合　　計		3600千円		1080千円

3. 研究体制

研究代表者：廣瀬 覚　　独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所　主任研究員
研究分担者：大澤 正吾　独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所　研究員

4. 主な研究成果

- 廣瀬 覚2017「明石川流域における埴輪の展開とその背景」「播磨の埴輪」第17回播磨考古学研究集会実行委員会
- 廣瀬 覚2018「津門稻荷町遺跡と西摂地域の埴輪」「新発見・西宮の地下に眠る古代遺跡」大手前大学史学研究所・西宮市教育委員会
- 廣瀬 覚2018「書評と紹介 離川賢・大川原竜一・鈴木正信編著「国造制・部民制の研究」「日本歴史」第845号
- 大澤正吾2018「ウワナベ古墳造出周辺採集の埴輪」「奈良文化財研究所紀要2018」
- 廣瀬 覚2019「柴山江流域における円筒埴輪の展開過程」「国立歴史民俗博物館研究報告」第217集
- 廣瀬 覚2019「埴輪の生産流通からみた古墳時代の権力生成」「考古学研究」第66巻第3号
- 廣瀬 覚2021「昼飯大塚古墳の埴輪生産体制再考」「昼飯の丘に集う—中井正幸さん還暉記念論集—」
および本書

5. 本研究に関する三次元モデルは、Agisoft社のMetashape Professionalを使用して作成した。デジタル画像の取得には、Sony製カメラ a7 II およびRX100Vを使用し、モデル画像の出力には、Geomagic Verify Viewerを用いた。

6. 本研究遂行にあたっては、下記の方々および関係機関から多大なるご支援・協力を賜った。

有馬 伸、池峯龍彦、石田大輔、泉 淳奈、伊藤聖浩、犬木 努、今西康宏、梅木謙一、内田真雄、

柿沼菜穂、加藤一郎、鐘方正樹、北中恭裕、北山大熙、木村 理、下大迫幹洋、杉山拓己、清喜裕二、土屋隆史、露口真広、鶴見泰寿、徳田誠志、農島直博、中居和志、中島和彦、中島皆夫、丹羽恵二、橋本輝彦、廣瀬智子、細川康晴、水野敏典、松井一晃、村瀬 隆、山内英樹、山下隆次、横田真吾、吉澤則男、香芝市教育委員会、橿原市教育委員会、京都府立山城郷土資料館、宮内庁書陵部陵墓課、堺市博物館、堺市文化財課、桜井市教育委員会、天理市教育委員会、長岡京市埋蔵文化財センター、奈良県立橿原考古学研究所、奈良市埋蔵文化財調査センター、羽曳野市教育委員会、藤井寺市教育委員会、松山市考古館、大和高田市教育委員会（敬称略、五十音順）。

7. 本書中の筆者撮影写真、三次元モデル画像の掲載に関して、香芝市教育委員会、橿原市教育委員会、宮内庁書陵部陵墓課、堺市文化財課、天理市教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、奈良市教育委員会、羽曳野市教育委員会、藤井寺市教育委員会、大和高田市教育委員会よりご快諾を賜った。

6世紀の埴輪生産からみた「部民制」の実証的研究

目 次

I 本研究の目的	1
II 後期円筒埴輪の再検討	3
III 奈良盆地における後期の埴輪生産と系統	18
IV 王権・地域間における後期埴輪の展開と系統 ..	49
V 結 語	56
付論 I 三次元計測による埴輪の生産・流通状況の検証 —菅原東窯産埴輪の流通をめぐって—	60
付論 II 三次元計測による香芝市狐井城山古墳出土埴輪の再検討 ..	66
引用・参考文献	70
古墳・遺跡参考文献	73
挿図出典	78

I 本研究の目的

部民制は、律令国家成立以前における全国的な支配体制のひとつで、技術者を含む様々な職掌集団を「部」として掌握した上で、王権への労役や生産物の貢納を課す制度とされる。従来は主に文献史学から研究が進められてきたが、当該期の史料的な限界もあり、その実像については不明な点も多い。本研究では、近年、飛躍的に深化している埴輪の生産・流通体制の復元研究に基づいて、考古学から部民制の実態を明らかにすることを目的とする。

古墳に樹立・配列される埴輪は、元来、飲食物供献や辟邪といった古墳の葬送観念を具現化する象徴物である。一方で埴輪は、その製作に一定の技術を要し、かつ大量に生産・消費されることから、古墳時代の手工業生産の実態解明において恰好の資料とされてきた。研究代表者である筆者はこれまで、こうした特性を有する埴輪の研究を積み重ね、王権の膝下で始まった埴輪生産が徐々に発達を遂げ、日本列島各地へと伝播、定着していく過程を実証的に跡づけてきた。また、同工品・生産組織分析の手法も用いながら、王権中枢部の埴輪生産体制の復元にも取り組んできた（廣瀬2015）。

これまでの研究により、前・中期の王権を構成する奈良盆地・大阪平野の大型古墳群間では、①活発な工人移動を背景に、大きくは一つの様式として埴輪生産が展開したこと、②その上で、遅くとも4世紀中頃（前期後葉）には、特定の生産地から複数の消費地へと埴輪が一元的に供給される集約的な生産体制が出現すること、③そこでは、型式的に類似度の高い製品を安定的に大量生産するために、個々の製作者を数人一組で小グループに編成した上で、それらをいくつも束ねて全体の統制が図られていること、④5世紀代（中期前葉以降）の王陵周辺の埴輪生産でも、そうした重層的な工人編成システムが機能し続けたこと、などを明らかにしてきた。5世紀代の王陵周辺では、一度に数千、数万にもおよぶ埴輪が必要とされたにも関わらず、製品の細部にまで統制や管理が行き届いているが、その背景には、上記のような集約的な埴輪生産体制が存在したと考えられる。

これに対して、6世紀代（後期）の埴輪生産に関しては、筆者自身の研究はもとより、先行研究においても、その実態が十分解明されているとはい難い状況にある。古墳時代後期の「畿内」では、羅刹大王擁立に象徴される王統の混乱、埴輪樹立古墳の増加を受けた需要の拡大、拠点的生産地の並立などを反映して、埴輪生産は複雑な様相を呈するに至る。当該期の「畿内」の埴輪生産については、系統の識別や生産・供給関係の解明など、基礎的な部分においても課題が多く積み残されているのが現状といえる。

一方で文献史学では、中央や各地の豪族を介して各種技術者や職務分担者が「部」として掌握され、王権への労役の提供や生産物の貢納が課される部民制が、まさに6世紀に成立したとされる。6世紀の王権中枢部における複雑な埴輪の様相は、この部民制を何らかの形で反映した結果であることが予想される。部民制に関する研究は、従来、文献史学を中心に進められてきたが、「記」「紀」や金石文の断片的な記述からその具体像を追究するには自ずと限界もある。これに対して、近年、埴輪の同工品論や生産組織の復元研究は飛躍的に深化しており、この手法を通じて当該期の労働編成のあり方を実証的

I 本研究の目的

に追究できる埴輪研究は、考古学から部民制の実像に迫り得る唯一の研究分野と言っても過言ではない。

埴輪研究から部民制の実態にアプローチする方向性自体は決して目新しいものではない。石母田正が早くに唯物史観にもとづいてその先鞭をつけ（石母田1955）、その後の埴輪研究の進展のなかでも絶えずその関係性が追究されてきた。とりわけ関東地方の埴輪研究では、埴輪生産に関する豊富な研究蓄積をもとに部民制の構造との整合化が図られ、有益な議論が展開されてきている（車崎2004）。しかしながら、6世紀代の「畿内」の埴輪研究は、系統識別自体が容易ではないこともあり、生産・流通体制を論じるための基本的枠組みすら未確立な状態にあるといえる。

本研究ではそうした研究の現状を踏まえ、まず、後期の円筒埴輪、すなわちV群円筒埴輪の内容をその成立過程にまでさかのぼって再検討し、中期から後期へ至る生産体制の変化、およびそれに付随する系統分化のあり方を奈良盆地の状況にもとづいて詳しく述べる。さらには古墳の建造状況や隣接地域との関係も踏まえながら、生産・供給体制や製品流通の実態、工人の労働編成や移動形態を追究することで、王権中枢部における後期の埴輪生産体制の特質を明らかにしたいと考える。

部民制は、王権やその周辺のみならず、地方の豪族やその傘下の集団をも巻き込んだ全国的な職務分掌組織とされるが、埴輪生産からその実像にアプローチする上で、当初から広範な地域を対象とすると、議論が浅薄となることが憂慮される。むしろ本研究では、6世紀代の王権の中枢域であった奈良盆地とその周辺地域にフィールドを絞って議論することで、埴輪生産における部民制の構造の一端を詳しく掘り下げる目標とする。

II 後期円筒埴輪の再検討

1 後期円筒埴輪の検討課題

川西宏幸による円筒埴輪の大別Ⅰ～V群（期）は、その後の研究の進展の中で各群の内容が再定義されながらも、大きはその枠組みが踏襲され今日に至っている。このうち本研究が対象とする古墳時代後期の円筒埴輪はV群に該当し、主として①円形透孔を1段に2孔、段間では直交する向きに配置する、②窓窓焼成、③外面調整は一次調整のタテ・ナナメハケで、二次調整のヨコハケは省略する、④突帯は扁平化し突出度が低い、⑤底部調整を施す、といった諸属性から定義される。このうち、①はⅢ期、②はⅣ期において整う属性であり、③～⑤がV期に固有のものといえる。ただし、③は比率を問わなければ各群にまたがって通時に存在する調整手法であり、強いて言えばV期のそれは器面に対して工具の主軸が大きく傾くナナメハケが主体となる。

むしろ④や⑤こそがV期を規定する製作技法として注目されることになる。とりわけ④の扁平化した突帯は、断続的にユビでナデつける貼付技法に本質がある。川西がV期の中でも新相に出現するとした最下段突帯における「断続ナデ技法」は、最下段に限って貼付後のヨコナデ調整が省略されることで現れるいわゆる無調整突帯であることが1990年代に解明された（中島1992、高橋1995）。その後、Ⅳ期の新相にみられる最下段突帯の「押圧技法」も突帯成形時に普遍的に用いられる板押圧の痕跡であり、無調整突帯の一種であることが明らかにされている（藤井2003、藤沢2003）。ヨコナデ調整の有無に限らず、断続ナデによる突帯製作こそをV群円筒埴輪を規定する属性とみる評価（鍾方1992）が定着し、今日に至っている。

一方、底部調整技法については、「畿内」では倒立状態で最下段外面下半を中心には板オサエする手法が基本であり、断続ナデによる突帯成形の出現とはほぼ同時期に出現することが知られる。ただし、一般的な器面調整とは別に最下段下半を限定的に調整する行為は、やはり比率を問わなければ円筒埴輪出現当初から存在する。こうしたV期開始以前の最下段下半の調整行為を「底部の調整」呼んで、底部調整とは区別する意見もある（上田1997）。たしかに底部調整が高い比率で施されるようになるのはV期開始時からであるが、Ⅳ期以前の「底部の調整」と技術的内容に本質的な差が存在するかどうかについては、実態を十分見極める必要があると考える。

いずれにしても、断続ナデ技法による突帯製作と底部調整の盛行は、V期の円筒埴輪のメルクマールとなる点は確かである。しかしながら、Ⅳ期とV期の円筒埴輪を整然と識別することは容易ではなく、とりわけ古い技法が遅くまで残存する傾向がある大型品ではその見極めが困難な場合が多い。そうした可能性を考慮して、相対的に型式変化の速度が速い小型品に着目してみても、Ⅳ期新相段階には既にV期的な製作技法の萌芽が認められる反面、Ⅲ・Ⅳ期に特徴的な外面B種ヨコハケ調整はV期の古相段階においてもかなりの高比率で残存する事実があり、Ⅳ期からV期への移行は極めて漸移的、連続的であった状況が明確になってきている。

そこで以下では、今一度、IV期からV期への移行過程を実態に即して理解すべく、突帯製作、底部調整のそれについて、技法の出現過程や細部の変化について詳しく跡付けてみることにしよう。

2 V期開始前後における突帯製作技法の再検討

IV・V群の突帯製作技法については、2003年に提示された藤井幸司による整理が基本的な枠組みとなっている（藤井2003）。藤井は中・後期の円筒埴輪の差に概ね対応する突帯製作技法の相違を大きくI・II群に大別した。その内容を文章化すると

突帯I群 **割付**四線→**貼付**ユビオサエ→**整形**板オサエ→**調整**ヨコナデ

突帯II群 **割付**省略→**貼付**ナデ付け →**整形**省 略 →**調整**ヨコナデ

となる。突帯II群はいわゆる断続ナデ技法Aによる突帯に該当し（中島1992）、前述のようにV群円筒埴輪の最も重要なメルクマールとなる。ユビオサエによる貼付や板オサエ整形は断片的にはIII期の円筒埴輪において既に認められるので、上記I・II群はそれぞれ中期突帯、後期突帯と呼び分けることもできる。

しかしながら、実際には前者から後者への移行はそれほど単純ではない。前述のように両者にはそれぞれ無調整突帯が存在することに加えて、前者から後者への移行期であるTK23・47型式期には双方の特徴が入り混じった突帯が散見される。藤井はそれらを

I bA ii 類 **割付**四線→**貼付**ユビオサエ→**整形**省 略

I bB i 類 **割付**四線→**貼付**ナデ付け →**整形**板オサエ

II B i 類 **割付**省略→**貼付**ナデ付け →**整形**板オサエ

の3類型に整理し、まとめて折衷群と呼称した。

藤井が説くように、こうしたI・II群の特徴が混在する突帯の存在は、双方が全くの別系統にあるのではなく、系譜的な連続性をもちつつI群からII群へと緩やかに移行したことを裏付けている。問題を難しくしているのは、先行する痕跡を消すように最終調整のヨコナデが丁寧に加えられた突帯では、その製作手順を正確に把握することが困難な点である。組合せ上は様々な手順の存在が予想されるものの、その相違にもとづいて細やかな系統関係を追う作業は現実的ではない。

本研究では以上のことを前提としつつ、新出資料の実見も踏まえて検討を進めた結果、V期古・中相段階（TK23・47型式期）には、藤井分類のI bB i 類、II B i 類に該当する断続ナデによる貼付後に板オサエ整形をおこなう突帯がかなり普遍的に存在するとの感触を得た（Fig 1-1・2）。V期開始時には、断続ナデによる突帯貼り付けが出現するのと同時に急激に突帯の扁平化が進行し、当該期の突帯はむしろV期新相段階より突出が低い印象を受けるが、この点は当該期の突帯製作において板オサエ整形が普遍的になされている可能性を示唆する。加えて、II群の無調整突帯（断続ナデ技法B）のとりわけ初期の事例では、上下のナデ付け単位に挟まれた中央の棱が板オサエにより平坦に整形されたものが頻繁に確認されることも、そのことを傍証する（Fig 1-3～6）。このようにみてくると、出現当初の断続ナデ技法では、板オサエ整形をともなう手順こそが本来のあり方なのであり、これを折衷系と評価するのは妥当ではないということになる。割付の凹線技法が突帯II群においてもしばしば用いられることとあわせて

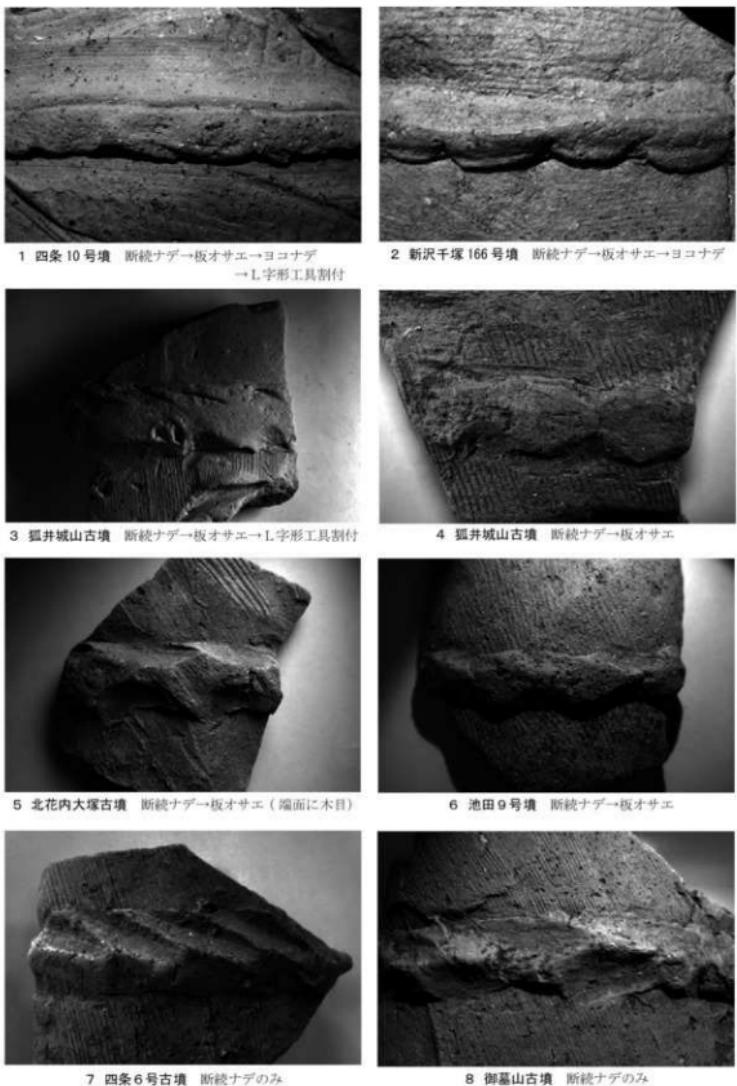


Fig. 1 突帯 II群 (断続ナゲ技法) の新旧

II 後期円筒埴輪の再検討

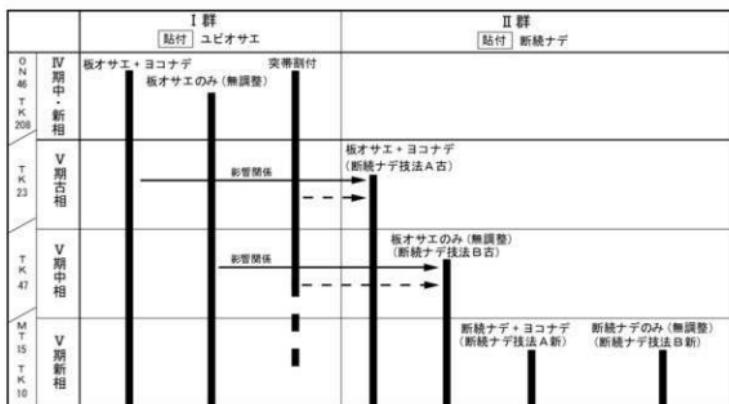


Fig. 2 V群円筒埴輪突帯変遷概念図

(Fig. 1-1・3), 突帯I群から突帯II群への移行が極めて漸移的であったことがあらためて認識される。

加えて、**貼付**ユビオサエ→**整形**板オサエによる中期的な突帯は、V期開始以降も大型品を中心に相当数残存する状況が決定的となってきている点にも注意を要する。今城塚古墳の円筒埴輪の様相が判明したことにより、同古墳では**貼付**ユビオサエ→**整形**板オサエ→**調整**省略の、すなわち無調整の中期突帯が大型品において保守的に残存する状況が明確となったのである（今西編2013）。V期古相の突帯II群が断続ナデ技法を用いつつ、併行して存続する中期突帯の割付技法や板オサエ整形を手順の中に取り込でいくのは、むしろ自然のなりゆきであったことが了解されよう。いわゆる無調整突帯に関しても、I群のそれがIV期新相に顕在化した後、V期を通じて存続する図式が描けるようになったことで、その影響を受けてV期中相以降に突帯II群でも無調整突帯が出現していくという系譜的なつながりが描けるようになってきた。

このように、突帯I・II群の関係はかつての想定よりも断絶性に乏しく、両者は極めて親密な関係のもとに前者から後者へと漸移的に変遷していったのが実態といえる。むしろその両者の系譜的な関係性に着目することで、やや概念的ながら、その変遷過程をFig. 2のように整理することできる。すなわち、従来はII群無調整突帯（断続ナデ技法B・Fig. 1-7・8）の出現がV期を二分する指標として重視されてきたが、板オサエ整形を施すII群無調整突帯（Fig. 1-3～6）の存在を介在させることにより、突帯II群の製作技法の省略化、すなわち断続ナデ技法AからBへの変遷過程は3段階に区分できることになる。とはいっても、古い特徴は完全に消え去るのではなく保守的に残存する場合があるため、少量の資料での位置づけには注意を要することはいうまでもない。

3 底部調整技法の再検討

V群円筒埴輪を特徴づけるもうひとつの重要なメルクマールである底部調整については、山内英樹の

批判があるように（山内2003・2018）、「円筒埴輪論」以降、目覚ましい研究の進展がなく、とりわけ「畿内」では研究が大きく立ち遅れている。ここでは、Ⅳ期以前の状況にも目を配りながら、底部調整の技術的内容や出現過程について再検討する。

底部調整技法の本質

まず、底部調整の工程上の概要を再確認しておこう。「円筒埴輪論」によれば、第V期には「小工程を反復せずに基部のうえから口縁部まで一気に巻き上げを行うようになる」ため、「軟弱な状態の底部に急激に自重が加わり」変形が生じるようになる。この変形した部分を「製作工程の最終段階において」倒立して調整する行為が底部調整である（川西1978）。この定義に関して、まず問題になるのは、V期における小工程の消失という理解である。すなわち、円筒埴輪の粘土紐積み上げ単位の変化を追究した藤井幸司の研究により、今日ではV群円筒埴輪においても川西のいう小工程（粘土紐巻き上げ→内外面調整→突帯製作）を複数回繰り返す類型が普遍的に存在することが明らかになっている（藤井2003）。したがって、「小工程」の消失が底部調整出現の直接の要因とは考え難い。筆者は、底部調整の出現は小工程の消失に起因するのではなく、単純に製作時間の短縮化によって自重による底部の変形率が増加したことによる要因があると考える。この点は、尾張型埴輪における倒立技法採用の要因が1本あたりの製作時間の短縮に求められている（浅田2004）ことと同様である。

実際には遺物の観察から製作時間の短縮を読み取ることは困難であるが、底部調整が顕在化していく時期において同技法を用いない個体では、底面が押し潰されたり、基部下端が内外に迫り出すように変



Fig. 3 自重で変形した底部（四条7号墳）



円筒埴輪全形（陵南赤山古墳 IV群古相）

左の個体の口縁端部
口縁屈曲部作出前の器壁上端に作業台の木目痕が残る

Fig. 4 口縁端部に残る倒立痕跡

形した事例が多数確認できる (Fig. 3)。こうした状態が底部調整によって補正すべき直接の対象であつたこと、さらにはそうした変形が頻繁に生じるほど急ピッチでの作業が求められていた状況を推察できる。逆にいえば、底部調整が顕在化する以前の製作では、底部の変形が生じないよう、あるいは生じた場合はその都度、それを補正できるような、十分な製作時間が確保されていたものと理解できる。上田のいう「底部の調整」は、まさにそうした団らずとも生じた底部の変形にその都度、丁寧に対処した姿を捉えたものであり、技法として普遍化した状況が見出せないのはそのためと考えられる。

なお、「底部の調整」については、V群における底部調整との弁別を強調するあまり、正立状態で施された簡易な調整行為とみる向きもあるが、少なくともケズリ調整に関しては底面に接するように内外面の下端を調整しており、倒立状態でなければ施工は困難と考えられる。堺市陵南赤山古墳出土埴輪のなかには、口縁端部（実際には口縁端部の屈曲部分を作出する直前の器壁の上端部分）に作業台の木目が付着したものがあり、製作工程の途中ないしは終盤に埴輪を倒立する工程があつたことがみてとれる (Fig. 4)。その目的は、必ずしも底部調整のためだけではなく、重力に即して底面付近に移動する水分を乾燥させ、予め自重による変形を抑止することにあつたことも十分考えられる。そうした配慮にも関わらず変形してしまった底部に対して、手厚く調整を加えたのが「底部の調整」の実態とみられる。このように底部調整は、円筒埴輪の製作工程に本質的に内在する倒立・乾燥工程をも含む底部の変形への対処にその本質があり、痕跡としては十分可視化されないものの、その作業自体はIV群以前の円筒埴輪の製作工程に

も本来的に組み込まれていたものと考えられる。現象として把握されるいわゆる底部調整の出現は、製作時間の短縮化にともない製作工程全体が粗雑化することにより、「底部の変形への対処」がより目視可能な技法痕跡として顕在化した状況をとらえたものと理解できる。

出現期の底部調整 底部調整が技法痕跡として明確化、顕在化してくるのはV期に先立つIV期新相、須恵器編年ではTK208型式期のことであり、外面調整ではB種ヨコハケが未だ高い施工率を維持し、断続ナデによる突帯製作（突帯II群）の出現よりもやや先行する時期に相当する。出現期の底部調整には、後に「畿内」で通有となる板状工具による外面のオサエ調整のほかに、ユビないしは柔軟性をもった何らかの工具によるオサエないしはナデ、さらには内外面の端部や底面を不定方向にケズリ取る、などの各種手法が用いられる（Fig. 5）。ケズリは内外面下端に迫り出した粘土の除去、および底面の乱れを修正する目的で施されたとみて間違いない。これに対してオサエは、自重により内溝した器壁をユビ単独ないしはユビと工具ではさみ込み外方へ圧力をかけることで、器壁を当初の直立状態へと戻すことを意図した作業痕跡として理解できる。重要なのは、各種手法が同一個体中において、しばしば複合的に用いられている点である。最も一般的なのは板・ユビオサエとケズリの複合であり、前者を外面、後者を内面で使い分ける場合や、同一面において両者を重複させる場合などがある。

底部調整の研究を精力的に進めてきた山内英樹（山内は「基底部調整」と呼ぶ）は、倒立状態で施される底部調整について、I工程：外面板オサエ・タタキ、内面ユビオサエ等、II工程：I工程により波打つた表面をハケやナデ整える、III工程：端面のカット、ないしはケズリによる内外面の面取り、の3工程に弁別するが（山内2003b・2018）、技法に複合化が認められる「畿内」における出現期の底部調整の手順は、必ずしもそうした順序に沿っていない。

そもそも上記の山内の整理は、山内や大谷晃二による山陰地域の底部調整の工程復元にもとづいている（大谷2003、山内2003a）。山陰地域の底部調整は、I工程のタタキ調整に円・角柱状の当具を使用する点や、III工程の底面の倒立カット調整が時間の経過に沿って省略化されていくなど、地域的個性が強い。一方、「畿内」の出現期の底部調整の場合、ケズリは底面の「カット」のみならず、内外面の下端にも施される場合が多い。底面付近の粘土の乱れを簡便に修正し得る方法であり、単独で施される場合に加えて、板・ユビオサエに先行して工程上の初期に施されたと判断できる事例も多い。板状工具やユビによるオサエが重複することによりケズリによる砂粒の動きを視認することが困難な場合が多いが、板オサエの単位とは別に器壁が極端に薄くなり尖底状を呈する事例については、かすかに砂粒の動きを観察できることがあることからも、先行してケズリ調整が加えられている場合が多いものと推測される。

このようにケズリ調整が工程の初期に端部付近に限定的に施されるのに対して、板オサエは、それのみでは改善し得なかつた自重による器壁の変形を直立形状に戻す目的で施されたものとみられる。山内は板オサエとタタキを「（倒立状態で）工具によって表面に力を加える」調整行為として同質に捉えた上で、タタキの方が「遠心力が応用でき、粘土に大きく力を伝えることが出来るので、より広く長い範囲に、強く調整を施すことが可能」とする（山内2003b）。しかしながら、板オサエ調整の主目的は、タタキのように外面からの圧力に主体を置いて器形を変形させるのでなく、むしろ外面にあてがわれた板状工具を支持具とし、内面からユビで器壁を折り返すように圧力をかけて、内側に折れた器形を本来的な形状に戻そうとすることにあったものと考えられる。



1 内面ケズリ (四条7号墳)



2 外面板才サエ (1の外面)



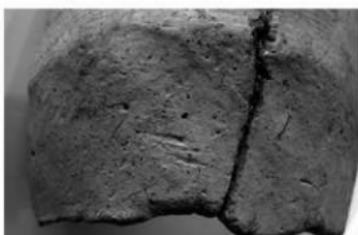
3 内面ケズリ (四条7号墳)



4 外面部ユビオサエ (3の外面)



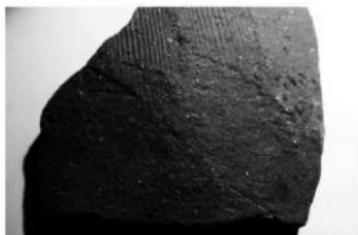
5 底面ケズリ (3の底面)



6 外面部ケズリユビオサエ (四条7号墳)



7 丸みのある工具による外面板才サエ (四条10号墳)



8 外面部ケズリ板才サエ (10号墳)

Fig. 5 出現期の底部調整

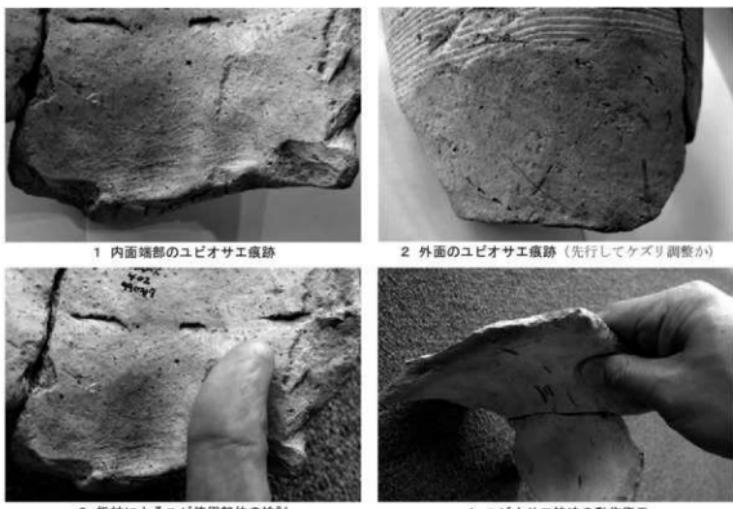


Fig. 6 底部調整ユビオサエ技法の復元（四条7号墳）

これについては川西宏幸が「円筒埴輪論」において、「畿内の一般的な底部調整技法」を解説するなかで当初からその本質を鋭く指摘している点があらためて注目される。すなわち、川西は「底部付近の内面に拇指をあて、残る指を外面において、内外両面からはさむようにして底部付近に押圧を加える。そのさい、外面の押圧は指で直接行わずに、板状の工具を用いる」とし、いわゆる板オサエ調整の主眼が内外面をユビではさんで器壁を変形させることにあることを的確に指摘している。タタキでは、内面にも道具を用い外面から強く叩打することで、乾燥が進んだ器面を変形できる。しかしながら、「畿内」に通有の板オサエではタタキに対応するような内面の支持具痕跡は認められず、ユビオサエの痕跡は下端付近にのみ集中して残る。仮に外面の板オサエ痕跡が一定の叩打作業によるものであった場合、打力の強弱に関わらず内面下端のユビオサエのみでは外面からの圧力を支持することは困難である。やはり板オサエ調整の主眼は内面側からユビで器壁を外側に折り返すことにあり、板状工具の方がその支持具的な役割を果たした蓋然性が高いといえる。出現期の底部調整では板を介さずに直接ユビで内外面を掴んで器形を変形させているとみられる事例が散見できる点は、そうした理解を傍証する (Fig. 6)。外面に板をあてがうのは、外表面にユビの形状を残さず広範囲に一定の圧力を加えるためであろう。

ただしそのような技法復元に対しては、底部付近の乾燥状態が問題となる。乾燥が進行し硬化した器面に対しては、ユビによる押圧のみでは形状を変化させることは不可能と考えられる。この点は從来ほとんど議論されてきていないが、「畿内」の通有の埴輪では、それを回避するために倒立時に湿った布を被せ、一旦乾いた底部に適度な水分を与えることで、変形を可能とする工夫がなされているものと理解できる。内面のユビオサエ部分には目の細かい織物の痕跡が頻繁に確認できる点がその証左であり、

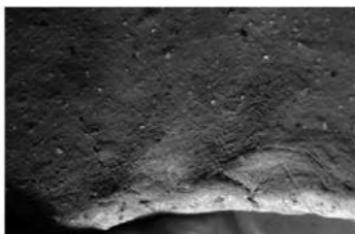
湿った布を被せた上からユビオサエが加えられる場合があったことがみてとれる。また、時折、外面の板状工具の圧痕付近に集中して散見される粒状の凹凸も布目の圧痕とみられ、底部の広範囲に布が被せられた状態で板オサエ調整がなされた様子がうかがえる (Fig. 7)。布目の圧痕が底端部付近ではほとんど散見できないのは、器面が一旦乾燥し硬化した後に布が被せられたためであり、布目が付着するのは押圧により器面に強く押し付けられた部分のみと考えられる。布目の圧痕は常に観認できるわけではないため、布を取り外した段階で底部調整が加えられる場合もあったとみられるが、いずれにしても「畿内」の通有の円筒埴輪では、底部調整に際して倒立状態で布を被せて乾燥した器壁に再度水分を与える工程が存在したとみて間違いない。

底部調整の時間的変化 底部調整は、V期開始の重要なメルクマールとして、今後も重視されるべき指標であるが、前述のように、実際にはB種ヨコハケが高い施工率を維持する段階において顕在化してきている。川西も「円筒埴輪総論」のなかで、「底部調整を行うこともまた、V期を画する重要な特徴である」としつつ、「もし外面に二次調整があっても、底部調整がみられるばあいには、これをV期にあてたい」と底部調整の方を指標として重視する姿勢を示した。V期 (V群) の定義については、外面調整よりも底部調整のあり方を優先すべきとの意見は同感であるが、前述した突帯製作のあり方や底部高・突帯間隔、共伴する形象埴輪の内容も踏まえて、総合的に把握すべきと考える。

奈良盆地における底部調整出現期の資料としては、橿原市四条7号墳が標識的な存在である。B種ヨ



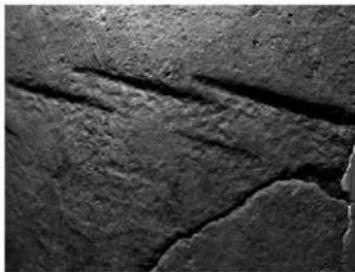
1 外面板オサエに沿って残る布目痕跡（四条7号墳）



2 内面ユビオサエに対応して残る布目痕跡（1の内面）



3 外面板オサエに沿って残る布目痕跡（茶山遺跡）



4 工具沈下部分に明瞭に残る布目痕跡（3の拡大部）

Fig. 7 底部調整にともなう布目痕跡

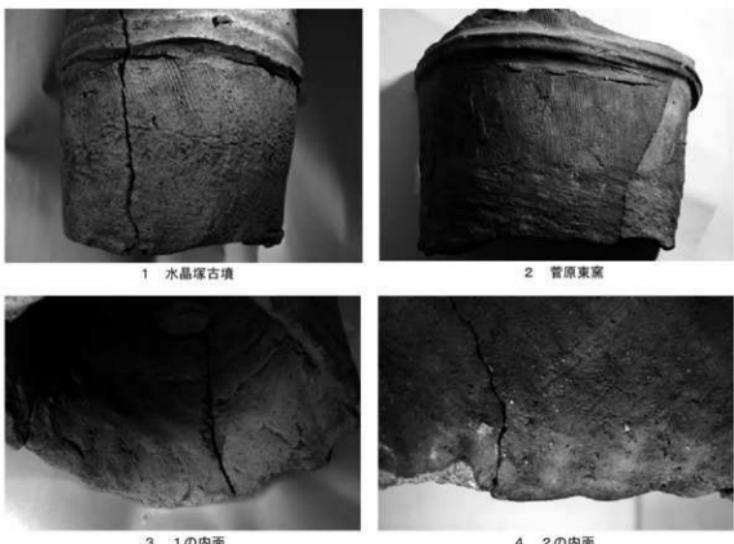


Fig. 8 後期新相段階の底部板オサエ調整

コハケの施工率は9割以上と高く、突帯は大部分が断続ナデによる貼付技法を用いない突帯Ⅰ群である。10cm前後の底部高・突帯間隔、I類3b式の叢形埴輪（和田2012）などの特徴から、IV期新相に位置づけるのが妥当である。共伴須恵器もTK208～23型式とされ、V期古相の四条2号墳や8号墳よりも相対的に古く位置づけられる（鈴木編2010）。

前述のように、出現期の底部調整は定式化以降のそれよりも手数をかけて丁寧に施される。奈良盆地の場合、従来、初期の底部調整として内面のケズリ調整のみが強調されてきたが（坂2007、村瀬2018a）、実際には出現期の底部調整では、板オサエやナデと複合することで、視認が困難な各面のケズリ調整も一定量存在するものと推測される。従来、強調されてきた内面のケズリ調整は、各種底部調整技法のなかで最も簡単な手法に過ぎない。後述のように、奈良盆地ではV期中・新相段階でも内面ケズリが一定量残存するが、それらは生産が恒常化し系統分化が進むなかで、底部調整技法の複合化が解消し、当初は各種技法中の一手法であった内面ケズリ技法がそれ単独で施されるようになった姿を捉えたものと理解できる。ケズリ調整の存在が稀薄とされる古市古墳群でも、藤井寺市林10・13号墳では、不明瞭ながら板オサエやナデと重複して底部下端や底面にケズリの痕跡が散見できる（Fig. 5-8）。技法が複合化している点は奈良盆地と同様であり、出現時期も両者で大差ないものとみられる。

その時期は上述のように四条7号墳がIV期新相（TK208型式期）であり、古市古墳群では同様にB種ヨコハケの施工率が高く、突帯もⅠ群である林10号墳がこれに併行する。この段階では、変形が加えられながらも底面が当初の水平面をとどめる例が多いが、続くV期古・中相（TK23・47型式期）では全体

的に調整が粗雑化することで底面の原形が失われ、かろうじて外傾する面としてその存在をとどめる事例が増加する。同時に技法の複合化が解消にむかい、板オサエ単独、板オサエ+内面ケズリ、内面ケズリ単独といったかたちで、それぞれの調整方式が手順として確立していく。V期新相(MT15・TK10型式期)では、さらに調整の粗雑化と手法の淘汰が進行し、板オサエ単独での調整が主体となる。底面が完全に潰されて大きく波打ち、断面は完全な尖底を呈するものが増加する(Fig. 8)。ただし奈良盆地では、生産拠点の林立により、底部調整の方式には細部で系統差も認められるが、この点は後に詳述する。

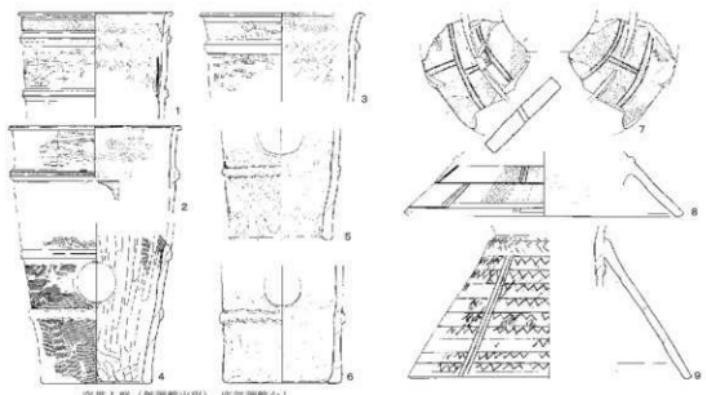
4 V群円筒埴輪の成立過程

以上のような突帯製作、底部調整双方あり方からあらためてV群円筒埴輪の出現を見定めると、突帯は断続ナデによる貼付けと板オサエ整形による突帯II群を基本とし、底部調整は施工頻度が高まり、その手順も確立してくる段階、頃須器編年ではTK23型式期にその時期を求めることができる。ただしこの段階では、B種ヨコハケが高い施工率を維持するとともに、突帯割付の凹線技法が一定量残存するなど、IV群の特色が色濃く残っている。なによりも、上記のような特徴は4条5段以下の小型品を中心とする変化であり、当該期の中・大型品は小型品以上にIV群の特徴が濃厚に残存するものと推測される。すなわち、埴輪製作の粗雑化は小型品が若干先行し、その内容がやや遅れて大型品に反映されていく流れであると予想される。その経過をIV期段階にさかのぼって辿ってみよう。

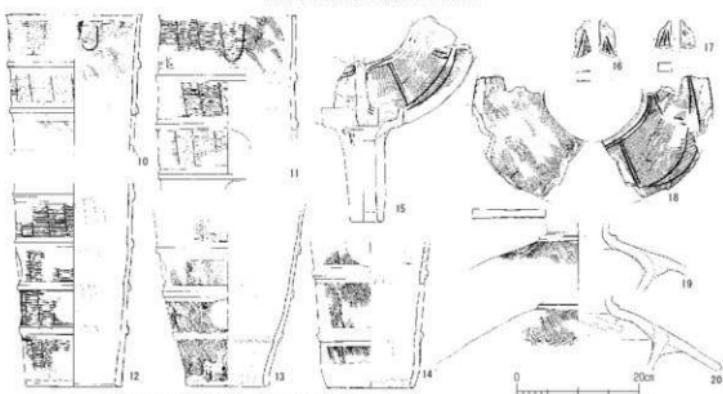
着目するのは、藤井寺市西清水2号墳である(Fig. 9-1~9)。IV期段階の古市古墳群では埴丘規模に応じて大・中・小の規格の作り分けがあり、ヨコハケの盛行頻度など、それぞれの技術的内容にも差異がある可能性が早くから指摘されてきた(天野・松村1992)。しかしながら、大小の古墳が密集する古市古墳群内では、埋没古墳からまとまった資料が出土しているものの、周溝出土資料の規格の組合せに対しては常に混入の可能性を考慮せざるを得ないこともあり、規格の異なる埴輪間の具体的な関係については定見が得られていないのが実情である。

西清水2号墳もその例に漏れず、周溝とされるSD01から大量の埴輪が出土しているが、このうち胴部径が30cmを超える中型品(報告書No18~21)、覆輪を有する三角板革縫短甲を表現した甲冑形埴輪(報告書No93~98)、蓋形埴輪の肋木片(報告書No77)は、胎土の素地が褐色で混和剤に金雲母・石英が目立つ点、黒斑を有する点が他の主要な埴輪群と異なっており、残存率も低いことから混入品の可能性が高い。円筒埴輪の主要なものは、底部径18cm前後、口縁部径27cm前後の小型品で、最下段突帯はユビオサエで貼付ける突帯I群で、板押圧の後のヨコナデを省略する無調整突帯が高頻度で含まれる。木村理により同工品分析が実施されており、上記のような特徴をもつ円筒埴輪と朝顔形埴輪や蓋形埴輪、草摺形埴輪との間で同工品が確認されている(木村2017)。ちなみに、先に混入の可能性を指摘した中型品の円筒埴輪・形象埴輪との間には同工品や同ハケ関係は認められていない。

この西清水2号墳の年代的位置づけであるが、I群無調整突帯を大量に含むことから新しい印象を抱くが、底部高は12cm前後、突帯間隔は9cm前後で、突帯間隔はやや狭いものの、底部高が突帯間隔を3cmほど上回る点、IV期古相の菅田御廟山古墳やアリ山古墳、百舌鳥御廟山古墳にみられるような口縁部高が著しく短いタイプ(5cm前後)が含まれる点は、古い様相といえる。さらに木村が主要な円筒埴輪



突帯 I 群（無調整出現） 底部調整なし
藤井寺市西清水2号墳 IV期中相



突帯 I 群（無調整含む） 底部調整出現
藤井寺市市林10号墳 IV期新相



突帯 II 群 底部調整有
藤井寺市市林13号墳 V期古相（V群円筒埴輪成立）

Fig. 9 小型品にみるV群円筒埴輪の成立過程 1:8

との間に同工品を見出した蓋形埴輪や草摺形埴輪は混入の可能性を完全に否定できる資料であるが、蓋形埴輪は笠部の布貼を2本沈線で表現する中期の典型的な型式であり、笠部が無文のもが増加するIV期新相まで下らせるのは困難である。草摺形埴輪も間帯を挟まずに鋸歯文を全面に充填する特徴は、七觀古墳や弁天山D3・4号墳などIV期でも相対的に古い古墳に類例が求められる。以上を総合的に評価するならば、IV期中相に位置づけるのが妥当であろう。

大・中・小の規格の異なる円筒埴輪については、従来、無批判に底部高・突帯間隔の値もって併行関係が模索されてきたが、器財埴輪の編年観も加味して位置づけた西清水2号墳のIV期中相という評価は、結果的に底部高については大山古墳などIV期中相の大型品の値と共通することになる。ただし、9cm前後の突帯間隔については同時期の大型品よりはやや狭いため、突帯間隔のみで併行関係を検討することの困難さが露呈することとなる。さらに注意を要するのは、上述のように西清水2号墳では最下段突帯に板押圧整形による無調整突帯が多数含まれる点である。IV期中相段階の大型品では、ごく少量ながら最下段突帯のヨコナデが粗雑化するものが出現し、端面を中心に板押圧の痕跡が散見されるようになるものの、完全にヨコナデ調整を省略するものは姿を現しておらず、土師ニサンサイ古墳、前の山古墳、市野山古墳など、IV期新相段階に至って顕在化し始める。このように、西清水2号墳の位置づけの検討結果からは、突帯製作の粗雑化は小型品が先行し、大型品では、一段階程度遅れてその内容が波及するという関係を導き出すことができる。

そしてこの西清水2号墳に後出するIV期新相段階の小型品の標識的な資料が前述の林10号墳ということになる。突帯は同様にI群で板押圧後のヨコナデを省くものが一定量含まれるが、底部高は9cm前後、突帯間隔は8cm前後と西清水2号墳よりも規格が縮小し、口縁部高は突帯間隔と一致せず、長く伸長する例が増加する。それとともに、ケズリ・板オサエ・ナデ等が複合化した初期の底部調整の採用が確認できるのである(Fig.9-10~20)。その時期は前述のようにIV期新相(TK208型式期)に位置づけられる。この時期、大型品では、底部高・突帯間隔の値は9cm前後となり、板押圧整形の無調整突帯が一定量含まれるようになる点で小型品との相違が解消したかにみえるが、底部調整の導入には至っていない。底部調整も大型品が先行して小型品において顕在化していく流れが追える。

さらに古市古墳群では、林13号墳(Fig.9-21~25)や羽曳野市茶山遺跡平成6年度調査出土の小型品がこれに後続する。断継ナデで貼付ける突帯II群が新たに出現し、底部調整の頻度が上昇し、その手順も安定化していく。突帯II群、底部調整というV群を特徴づける指標が出そろうこの段階をもって、V群円筒埴輪の成立を捉えることができよう。IV期新相の林10号墳とV期古相の林13号墳のB種ヨコハケの施工率を比較すると、前者が6割程度、後者が3割弱である。V期古相の段階ではB種ヨコハケが一定の施工率を維持しているものの、時間の経過に沿って徐々に低下していく方向性がうかがえる。

以上のV群円筒埴輪の成立過程については、後述のように奈良盆地においてもほぼ同じ歩みを辿ったものと理解できる。注意を要するのは、繰り返し述べるように、ここで確認したIV群からV群円筒埴輪の成立過程は小型品の変化を跡付けたに過ぎず、同時期の大型品では、小型品の変化を追うように新たな技術が受容されていく一方で、一部ではIV群の製作技術が長期にわたって維持されていく点である。埴輪生産の終焉に至るまで、大型品と小型品の製作時の距離は完全には解消していない可能性が高く、この点の実態解明にむけてさらに検討を深める必要がある。

従来、V期の開始をめぐっては、その背景としての生産体制の再編成が強調され、「断続ナデ技法」に象徴される技術的画期性が評価されてきた（鍊方1992）。しかしながら、仮に小型品に論点を絞ったとしても、IV群からV群への移行は、前述したようにこれまでの認識以上に極めて漸移的であり、その間に技術上の断絶を見出すことはできない。IV群からV群への変化の本質は、大量生産に起因する製作時間の短縮化と技法の粗雑化にあるとみて間違いない。V期開始時にはIV群の製作技術が色濃く残存し、生産地ごとの技術的相違もさほど顕著ではないことからも、断続ナデ技法のような特定の技法の出現やその分布上の差異に過度の政治性を見出すべきではなかろう。

ただし、佐紀古墳群や馬見古墳群のような階層構成型古墳群の造営停止、それと表裏一体での各所への拠点的生産地の設置がV期の開始に呼応するとする見方（鍊方1992）には異論がない。後述のように、V期を通じた各所での生産の継続が緩やかながら系統差を生み出していくことになる。

5 V群円筒埴輪の変遷

本章の総括にかえてV群円筒埴輪（小型品）の変遷観を簡潔に整理しておく。従来、筆者はV期を古相・新相の2小期に区分してきたが（廣瀬2011）、やや理念的な観点では古・中・新相の3小期に細分する案を提示したい。

V期古相 突帯は断続ナデで貼り付けるII群が出現するが、IV期以来の突帯I群も引き続き残存しており、四線技法や板オサエ整形といった突帯I群の製作技法をそのまま継承する突帯II群が普遍的に存在する。底部調整は、外面板オサエを基本としつつ、IV期新相以来の内外面下端や底面のケズリ調整、およびそれらの各手法を複合的に用いる事例が存続する。外側調整は、2段目以上の上位の段を中心にB種ヨコハケ調整が未だ高い頻度で残存する。須恵器編年ではTK23型式期に相当する。

V期中相 突帯製作はV期古相のあり方を継承しつつも、最下段突帯では断続ナデによる貼付→板オサエ整形→無調整の突帯II群が出現する。底部調整は、底面の原形が失われ、かろうじて外傾する面としてその存在をとどめる事例が増加する。それとともに技法の複合化が解消にむかい、板オサエ単独、板オサエ+内面ケズリ、内面ケズリ単独といったかたちで、それぞれの調整方式が手順として確立する。外側調整はB種ヨコハケの施工率が著しく低下するが、口縁部などに限定的に施される例も残る。須恵器編年ではTK47～MT15型式期に相当する。

V期新相 突帯II群では、板オサエ整形の省略化が進み、最下段突帯では断続ナデによる貼付→無調整の典型的な断続ナデ技法Bが出現する。底部調整は手法の粗雑化と淘汰が進行し、板オサエ単独での調整が主体となる。底面が完全に潰されて大きく波打ち、断面は完全な尖底を呈するものが増加する。外側調整は一次のタテ・ナナメハケのみで、B種ヨコハケの施工がみられなくなる。須恵器編年ではMT15～TK10型式期に相当する。

以上は、V群円筒埴輪の小型品における変遷の全体像を示したもので、実際には無調整突帯を採用しない系統も存在するなど、細部の位置づけには十分対応していない部分もある。この点については、次章での各系統の解説で補足することにする。

III 奈良盆地における後期の埴輪生産と系統

1 奈良盆地における後期埴輪の諸系統

前述したようにV期の開始は、各所での拠点的生産地の確立に対応しており、それぞれでの継続的な生産が各種の系統差を生み出す契機となっていく。V期開始期には未だ系統上の相違は一部を除いて不明瞭であり、その差が顕著になるのはV期新相（MT15型式期以降）においてである。以下ではそうしたV期新相以降の状況を念頭に置きながら、奈良盆地の後期円筒埴輪をA～D類に4大別し、A類についてはさらに生産地や細部の特徴の相違にもとづいて4類に細別する案を提示する。

(1) A類

ここでいうA類は、V群円筒埴輪として包括される後期の「畿内」に通有の円筒埴輪をさす。奈良盆地ではこれまで、V群円筒埴輪を「大和A類」として一括した上で、MT15型式期以降に出現する断続ナデ技法Bの採用・非採用を主な指標として、V群円筒埴輪（鍾方分類の大和A類）の系統上の細別が模索されてきた経緯がある（鍾方1992、2003、鍾方ほか1995）。以下では、その後の新資料および新知見を踏まえ、V群円筒埴輪をAa～Ad類に細分する。

Aa類 V期新相（MT15型式期）以降にⅡ群無調整突帯、いわゆる断続ナデ技法Bを採用する一群。前述のとおり、断続ナデ技法Bは一条目突帯に限って最終調整のヨコナデを省くために、整形時のナデ付

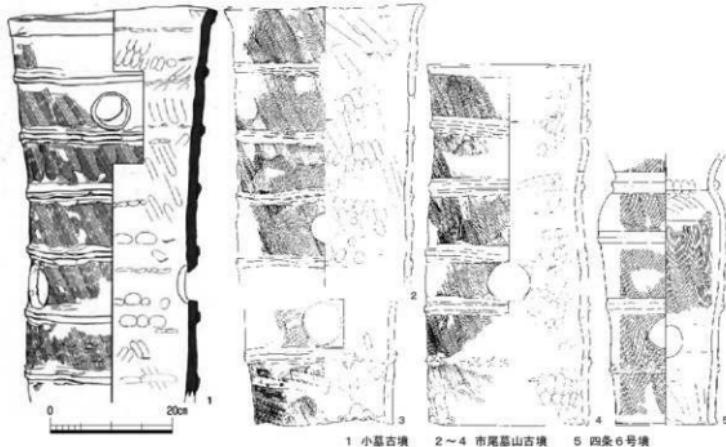


Fig. 10 Aa類の埴輪 1:8

け痕跡がそのまま露呈する無調整突帯の一類であり、一古墳においても全個体で採用されるものでもないため、絶対的な指標とはなり得ないが、三宅町石見遺跡例をはじめ盆地南部の例ではかなりの比率で採用されており、破片資料でも一定量の出土をみればその存在が認識できる場合が多い。前章で詳述したように、Ⅱ群無調整突帯はナデ付けのみの典型的な断続ナデ技法Bに先立ち、V期中相（TK47～MT15型式期）に板オサエ整形を工程上に含んだ状態でヨコナデの省略が開始される。いわば古式の断続ナデ技法Bと評価できるものであり、この種の突帯が確認できれば、V期中相段階においてもAa類として認定することが可能である。

外面調整は、一次調整のナナメハケ、内面調整はナデ・ハケ調整である。内面のハケ調整は省略傾向にあり、施される場合でも最上段（口縁部）内面に限定的に施される場合が多い。2条目以上の突帯製作は断続ナデ技法Aで、しばしばヨコナデの上下にナデ付けの痕跡がはみ出す。ナデ付けの凹凸に起因して突帯は波形を呈し、突出度も低く扁平である。底部調整は外面板オサエが基本で、底面が原形を留めないほど強く押圧されるものが多いが、内外面端部のケズリ技法も少量存在する。また、北花内大塚古墳や鳥屋ミサンザイ古墳など盆地南部の大型品では、製作工程上の比較的早い段階に内面端部に集中的にユビオサエを加えて内面側への粘土の迫り出しを修正する手法が散見される。

形態上の特徴は、外面のナナメハケ調整に起因して上方にやや聞くプロポーションが基本で、円形透孔を1段2孔配置し、段間では向きを直交させる。3条4段構成の場合は2・3段目に連続して配置するが、4条5段構成以上の場合には連続する段には透孔を穿たず、一段置きに配置する（以下、一段置きの透孔配置を隔段穿孔と呼ぶ）。口縁部形態は、直立ないしは器形に沿って外方に聞くものが一般的である。端部は強いヨコナデによりU字形に湾曲し、外側の稜が小さく摘み出されるものが多い。また、大型品を中心に採用される貼付口縁は、粘土帶上に貼付け時のユビオサエの凹凸を残さず平坦に仕上げ、ヨコハケ調整を加えるものもある。

Ab類 基本的な特徴はAa類と大差がないが、Aa類が断続ナデ技法Bを採用するV期新相（MT15型式期以降）になっても同技法を用いることがない一群。奈良市菅原東窯産の埴輪が標識となるが、同窯の製品の厳密な同定作業はまだ十分進んでおらず、同窯の製品と同様の特徴をもつ未知の窯が他に存在する可能性も残る。

外面調整は、一次調整のナナメハケ、内面調整はナデ・ハケ調整である。内面のハケ調整は省略傾向にあるが、Aa類よりもその傾向はより顕著で、最上段内面もナデで調整を終えるものが多い。突帯製作は断続ナデ技法Aで、しばしばヨコナデの上下にナデ付けの痕跡がはみ出す。ナデ付けの凹凸に起因して突帯は波形を呈し、突出度も低く扁平である。底部調整は外面板オサエで、底面が原形を留めないほど強く押圧されるものが多い。

プロポーションは、外面のナナメハケ調整に起因して上方にやや聞く形状が多い。透孔は円形透孔を1段2孔配置し、段間では向きを直交させる。3条4段構成の場合は2・3段目に連続して配置するが、4条5段構成以上の場合には隔段穿孔となる。口縁部形態は、直立ないしは器形に沿って外方に聞くものが多い。端部は強いヨコナデによりU字形に湾曲し、外側の稜が小さく摘み出されるものが多い。大型品を中心に採用される貼付口縁は、粘土帶上に貼付け時のユビオサエの凹凸を残さず平坦に仕上げる。

Ac類 Aa、Ab類との最大の相違は、透孔の配置にある。すなわち、円形透孔を1段2孔、段間では

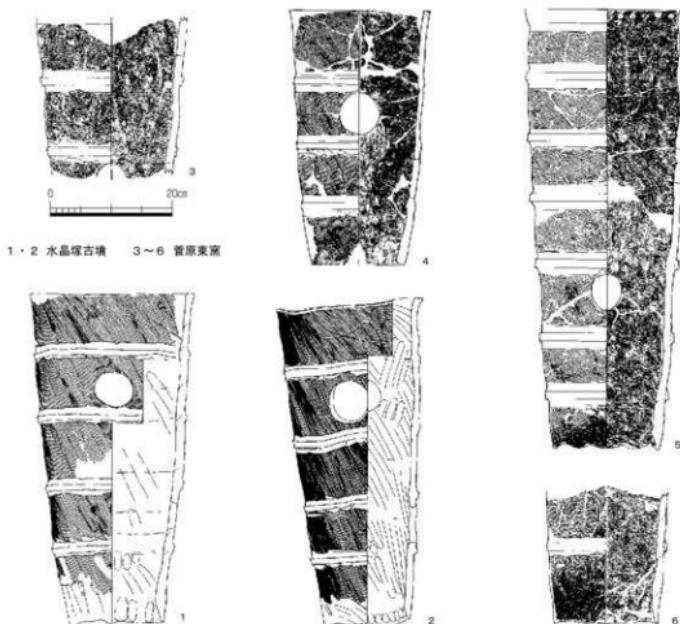


Fig. 11 Ab類の埴輪 1:8

向きを直交させて配置する点は同じであるが、4条5段構成以上の場合、胴部の各段に透孔を配置する（以下、連段穿孔と呼ぶ）点が、他のA類と決定的に異なる。プロポーションも上方への開きが相対的に緩やかで、直立状のものが多い。また、いわゆる貼付口縁は、Aa・Ab類ではナデで平坦に仕上げるのに対し、Ac類に共伴するものはいずれも粘土帶上に貼付け時のユビオサエの凹凸を明瞭に残す。高橋克壽が貼付押圧口縁と呼んだものがこれに相当する（高橋1995）。

外面調整は一次調整のナナメハケであるが、そのほかのA類に比べて工具の傾きが弱く、タテハケに近いものが多い。内面調整はナデ・ハケ調整で、ナデ調整の場合でも口縁部付近に関してはハケ調整を省略せずに施すものが多い。突帯製作は断続ナデ技法Aであるが、扁平なものが少なくして突出度が高い。底部調整は外面板オサエや、稀にケズリ調整が散見されるが、底部調整自体の施効率はさほど高くなく、板オサエが施される場合でも器形の変形はさほど顕著でない。

またAc類に伴う石見型、盾形、大刀形等の形象埴輪の底部は、円筒埴輪の貼付押圧口縁と同様、外面下端にユビオサエ痕跡を明瞭に残すかたちで粘土帶を貼り付ける。鎌方正樹は石見型埴輪の底部外面の突帯をa：底面よりも上に突帯がめぐるもの、b：底面と同じ位置で突帯がめぐるもの、の2者に分類し（鎌方1992）、東影悠也鎌方の分類を踏襲しつつ、底部突帯の製作技法から鎌方分類a = ナデ調整突帯、鎌方分類b = 押付突帯と呼び分ける（東影2010）。従来、認識してきたこの底部突帯の相違のうち、

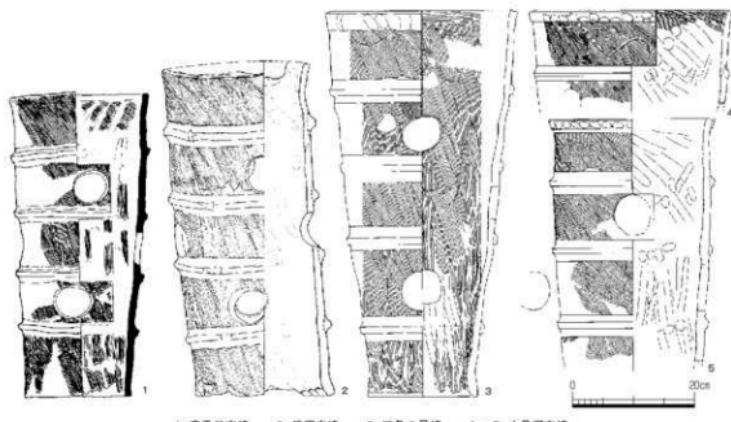


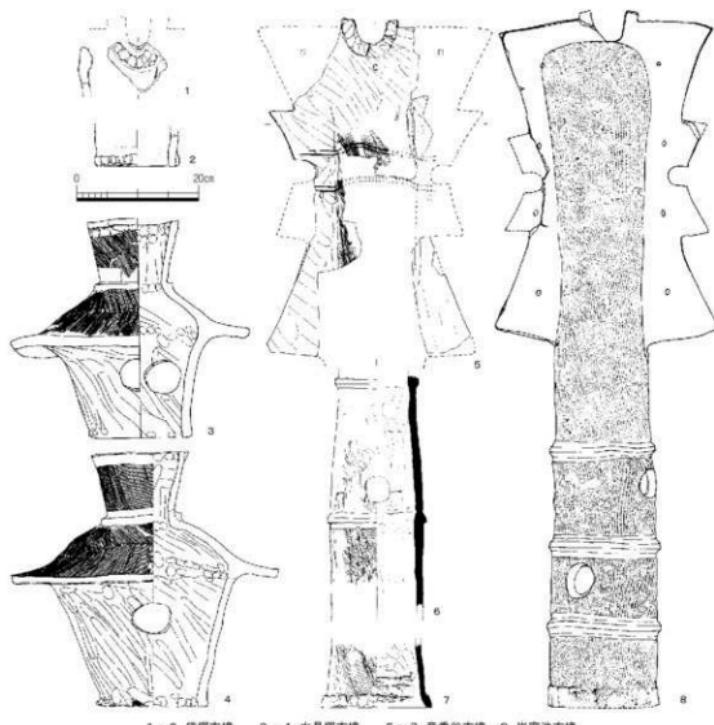
Fig. 12 Ac類の埴輪 1-8

後者についてはAc類に特有のものとして再評価できる。本来、倒立技法を用いる形象埴輪の基底部は、円筒埴輪として製作されたものを反転して用いたものであり、Ac類の貼付口縁とそれに共伴する形象埴輪の底部突帯が対応するのは至極当然のことである。天理岩室池古墳や長岡京市塚本古墳 (Fig. 13-8) にみる鐘方分類 b = 押付突帯の石見型埴輪では、円筒部分が連段穿孔となっていることも両者の対応関係を傍証するものといえよう。

これに関して高橋克壽は、早くに岩室池古墳や塚本古墳に加えて、米原市山津照神社古墳やたつの市西宮山古墳などの石見型埴輪の基底部が自身のいう貼付押圧口縁と製作技法を同じくする点に着目していた。しかしながら、石見型埴輪の基底部に「押圧突帯があつても、円筒埴輪にはそれが全く認められない場合がむしろ普通である」として、両者の対応関係を積極的に評価するには至らなかった (高橋 1995)。しかしながら本書では、連段穿孔で直交式となる透孔配置がこれら一連の資料を貫く共通の属性となることを突き止めることができた。これにより、底部下端の突帯にユビオサエ痕跡を残す一群の形象埴輪も含めて、全体をAc類として括して把握することが可能になったといえる (Fig. 13)。

なお、Ac類に伴う石見型埴輪では、形象部上辺を粘土帶で加飾する例が多いが、同部分にも貼付け時のユビオサエ痕跡が明瞭に残る (Fig. 13-1・5, Fig. 29-9・10・12)。この点も、貼付押圧口縁との対応関係を示す属性として捉えることができよう。この観点からすれば、大和郡山市水晶塚古墳 (Fig. 13-3・4) や田原本町黒田大塚古墳、天理市小墓古墳出土の軸受端部および笠端部の粘土帶にユビオサエ痕を明瞭に残す蓋形埴輪も、Ac類と系統を同じくする可能性が浮上する。

なお、Ac類の標識的な存在である木津川市音乗谷古墳では、円筒埴輪のみならず形象埴輪も含めて胎土素地が全般的に際立った白色を呈する。音乗谷古墳の馬形埴輪は、頭部側面の粘土板の垂下が頬よりも額部分でさらに下方へ拡張するが、これと同じ特徴をもつ奈良市ヤイ古墳の馬形埴輪も胎土は白色である。Ac類およびそれに伴う形象埴輪のうち、そうした白色基調の胎土のものは、昔原東窓とは異



1・2 袋塚古墳 3・4 水晶塚古墳 5~7 吉乗谷古墳 8 岩室池古墳

Fig. 13 Ac類にとまなう形象埴輪 1:8

なる平城山周辺の未知の窯で生産された可能性が考えられる。さらに付言するならば、Ac類に伴う家形埴輪は壁体やそれに続く下屋根の平面形が隅丸方形ないしは梢円形となる傾向が認められ、とりわけ入母屋造においてその特徴が顕著である点を指摘できる。

Ad類 基本的な特徴はAa、Ab類と共に通るが、底部調整は外面板オサエを用いず、内面ケズリに特化した一群。プロポーションは、上方への開きが大きく、顕著な逆台形状を呈するものが多い。また、口縁部形態は、端部付近の湾曲が認められず直立状を呈するものが多い。突帯製作は断続ナデ技法Aで、しばしばヨコナデの上下にナデ付痕跡がはみ出す。

川西町佐々木塚古墳や大和郡山市開古墳がこの系統の代表的な事例であるが、桜井市勝山東古墳や大和郡山市水晶塚古墳の一部にも底部調整に内面ケズリを施すものがあり、Ad類に属する可能性がある。また、田原本町小阪里中古墳例は、同様に底部内面をケズリ調整するが、外側調整にB種ヨコハケを多用しており、この系統の初源例として位置づけ得る。これらは盆地中央部に分布域があり、とりわけ

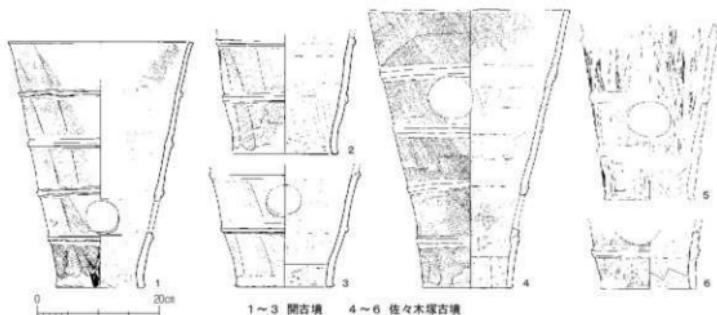


Fig. 14 Ad類の埴輪 1-8

佐々木塚古墳や開古墳の胎土は大粒の白色風化礫を大量に含む点で共通する。盆地中央部の消費を満たすための未知の生産地が存在する蓋然性が高い。

(2) B類（大和南部型）

底部高が他の段に比べて著しく高く、外面調整に回転性的ヨコハケを用いる特徴的な一群の円筒埴輪をさす。学史的にはまず、河内一浩が和歌山県域で通有のV群円筒埴輪との対比からその存在を見出しこれに「紀伊型」なる名称を与えた（河内1988）。須恵器編年のMT15・TK10型式期に併行する資料でありながら、外面二次調整のヨコハケが施される点に最大の特徴が見出され、あわせて内面にもハケ調整がなされる点、口縁端部をヨコナデで肥厚させる点などが指標として抽出された。

その後、鍾方正樹は「紀伊型」と同じ特徴をもつ埴輪が奈良盆地南部にも集中的に分布することを明らかにし、これを「大和B類」と呼んだ。鍾方は、河内が抽出した特徴に加えて、突帯貼付に断続ナデ技法を用いないこと、最下段が他の段よりも高いこと、口縁部の肥厚は内側に顕著である点、底部調整に板による押圧やヨコナデが多用されること、口縁部外面に波形のヘラ描きがあること、などを指摘し、同種の埴輪が滋賀県野洲川流域にもみられることからも、「紀伊型」の名称および紀伊独自の埴輪生産について否定的な見解を示した（鍾方1992）。

その後、河内は「紀伊型」の特徴を再整理し、逆台形のプロポーション、扁平なM字の突帯、二次調整のヨコハケはストロークが長い点、口縁部の波状ヘラ記号などをその指標に付加した。さらに「紀伊型」の高い底部高は、器高全体を大きく2分割する位置に一条目突帯を貼付けることに起因するとの理解を提示した（河内2004）。

なお「紀伊型」の名称をめぐっては、奈良盆地南部を核とする分布傾向を踏まえて、「環畿内南部型」なる名称が一時に登場したが（河内2003、鍾方2003）、あまりにも概念的すぎる呼称であったこともあり、近年では「紀伊・大和南部型」（辻川2010）や「大和南部型」（内藤2020）が用いられるようになってきている。ここでは他の系統呼称との対比からB類と仮称するが、後述のようにその出現・中心地は奈良盆地南部である蓋然性が高く、個別名称を用いる場合は「大和南部型」とするのが妥当と考える。

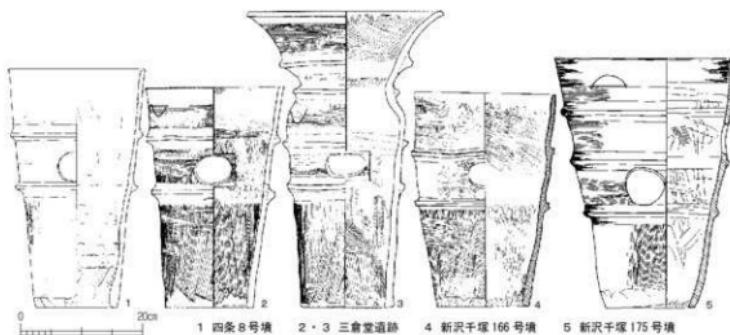


Fig. 15 B類の埴輪 1-8

製作技法 B類は、近年、製作技法も踏まえて研究が深化してきており、とりわけ内藤元太は、「外面一次調整のタテハケと内面調整のタテハケの傾きが相反する」原則が厳密に共有されている点、焼成は軟質で野焼き焼成された可能性のあるものが含まれる点、底部調整は外面下端に回転ケズリを加えるものが古く、板オサエ調整が後出するなど、重要な指摘を行っている（内藤2018、2020）。また、東影悠は主に、回転ヨコハケ、回転ケズリ、口縁部の肥厚に須恵器の製作技術との共通性を見出し、本稿B類（『大和南部型』）を須恵器系埴輪として積極的に評価する（東影2019）。

前述のようにB類は、V群に比べて突帯の突出度が高く、断続ナデによる貼付けを採用しない点に特徴がある。また突帯の割付に沈線を用いており、これにより底部高は突帯間隔のおよそ2倍に割り付けられる。従来、B類は、IV群の突帯製作技法との親縁性から、IV群系の範疇で理解する方向性が強調されてきたが（雄方2003）、内藤や東影が指摘するように、その他の特徴は通常のIV群円筒埴輪からの飛躍が大きい。たしかに割付技法には、IV群の凹線技法からの一定の影響が見出されるが、IV群では工具に一定の幅があり「凹線」になること、また二重凹線（沈線）になるものが多いのに対し、B類では「凹線」ではなく一本の細い「沈線」となる例が目立つ点で細部に相違がある（Fig. 16-4）。

また、焼成については、内藤が指摘するように野焼きの可能性が高い。器面の摩滅が著しいものが多く、焼成温度がさほど高くなかったことが推測されることに加え、断片的に黒斑が確認できることがその根拠である。ただし黒斑は、覆い接触黒斑、接地面黒斑が対称の位置に広く付着するⅢ期以前の黒斑とは異なり、口縁・底部の外端付近や突帯上面などに小さく付着する例が多い（Fig. 16-7・8）。これらはその付着状況から設置面黒斑である可能性が高く、そのため残存率の低い個体では黒斑を確認できない場合が多い。明確な覆い接触黒斑が確認できないことに加えて、総じて小型の製品が多いことからも、重ね焼きを多用した野焼き焼成であったことが推測される。いずれにしても、窯窓で硬質焼成されるIV群とは焼成技術に根本的な相違があったことは確かであろう。

さらに底部調整については、当初は外面下端に倒立状態で回転ケズリを加えることを原則とするが（Fig. 16-5）、新相では板オサエが主体となる（Fig. 16-6）。内藤は、この差を積極的に時期差として捉え、自身の幅年の指標として重視するが、共伴須恵器でみるとB類出現期であるTK23・47型式期の中で両



Fig. 16 B類の製作技法

者は併存する関係にある。回転ケズリが単独で存在する時間幅はごくわずかであり、大きく遅れることなく板オサエが出現したのが実態とみられる。後述のように、外面下端の回転ケズリは輶轆状の回転台を使用した製作工程と密接な関係がある。板オサエ調整の採用は、内藤が指摘するようにV群円筒埴輪における底部板オサエ調整の影響がおよんだ結果とみられるが、手順としては板オサエの前に先行して回転ケズリが施されている可能性も視野に置く必要があろう。

回転台と作業姿勢の復元 B類は軟質焼成で表面の遺存状態の良好なものが乏しいこともあり、特徴的な形態属性に比べて、製作技法の検討は十分深められていない。そのなかにあって、上述のように内藤によって見出された「外面一次調整のタテハケと内面調整のタテハケの傾きが相反する」原則は、B類の技術系譜上の評価において極めて重要なポイントとなる。内藤の表現はやや抽象的であるが、具体的にはB類の外面一次調整のタテハケは、とりわけ最下段付近においてやや主軸が右に傾く(Fig.16-3)点に特徴がある(高橋2007・2012)。埴輪の製作者は大部分が右利きであるという経験則からも、B類のタテハケがほぼ例外なく主軸を右に傾ける事実は、製作者の利き手ではなく、回転台の使用方法に要因があると推測される。

一般的なV群の円筒埴輪では、左上がりにタテ・ナナメハケが施されるが、これは圧倒的多数を占める右利き人が埴輪のやや右に位置し、右手で工具を下から上に引き上げて調整をおこなった結果である。予め述べておくと、筆者は須恵器系でない通有の埴輪であっても、その製作には簡易な回転台の利用が不可欠だったと考えている。「畿内」通有の円筒埴輪の外面調整は、一次・二次を問わず調整単位は埴輪に正対する位置の観察(実測図の向き)で向かって左方向に重複していく。したがって回転台は左回転(反時計回り)となる。内面調整もおなじく主軸が左に傾き、単位も左方向に重複していくが、外周と内周で円弧の向きが反転するため、回転台の進行は右回転(時計回り)となる。つまり、「畿内」の通有の埴輪製作では、それぞれの作業姿勢に応じて合理的に埴輪を左右双方に回転させていた状況が復元できる。この点は、左利き工人の製品では、調整単位の重複および工具の進行方向が右利き工人とは完全に反転することからも裏付けられる。

これに対して、主軸が右に傾くB類の外面調整の場合、タテハケの重複は向かって右方向であり、回転台は通有の外面調整とは異なり右回転となる。B類のタテハケがほぼ例外なく主軸を右に傾ける事実は、製作者が埴輪の背後に立って上から見下ろすような姿勢で埴輪を右回転させながらタテハケを施した結果と理解できる。タテハケの主軸の傾きは、低位ほど大きく、上方にむかうにつれて垂直に変化するが、この点は上記のような作業姿勢のもと右利きの人が右肘を起点に円弧を描くように工具を引き上げることに起因するであろう。これに対して、B類の内面調整は、外面調整と相反して左上がりである。単位の重複順序からも回転台は右回転であることが確認できる。すなわち、B類では、外面・内面ともに右回転で調整されたことが判明する。

一方、ヨコハケ調整時の回転は、器面の状態が良好なものが少なく判然としないが、外面下端の回転ケズリでは、原則、正位置で向かって左方向に砂粒が動く(Fig.16-5)。見かけ上は埴輪が左回転しているかのように見えるが、外面下端の回転ケズリは倒立状態で施されるため、やはり右回転での施工となる。

さらに、大和高田市三倉堂遺跡出土例のように器面の遺存状態の良好な資料では、突帯の下面にヨコ

ナデ以前の断続的なナデ付け痕跡が明瞭に残るが、このナデ付け痕跡も砂粒の動きから指は向かって右上がりに動いており、単位も右方向に重複していくのが確認できる個体がある（Fig. 16-2）。右回転する埴輪に対して右利き工人がおそらく親指を左から右へと動かして突帯をナデ付けていった状況が復元できる。

このように、通有の埴輪製作が作業内容に応じて回転台を左右双方に回していたのとは異なり、B類では回転台は一貫して右回転であり、回転台の構造やその使用方法が通有の埴輪製作とは異なっていたものと考えられる。従来、B類のヨコハケは、「尾張型」などの典型的な須恵器系埴輪に比べて回転力に劣る感が強く、焼成の不良さも相まって、「静止痕をとどめないヨコハケ」や「ストロークの長いヨコハケ」といった、典型的なC種ヨコハケとは異なる評価が与えられてきた。しかしながら、底部外面下端の回転ケズりが激しく砂粒を引きずって施工されている状況からも、通有の円筒埴輪より強い回転力が用いられたことは間違いない。一定の回転力を備え、かつ回転方向が一方向に規制される状況からは、蹴轆轤状の構造をもつ回転台の使用が想定される。通有の埴輪製作では、利き手でないもう一方の手で回転台ないしは埴輪を回転させるのに対し、B類では上述の作業姿勢上、両手は常に埴輪に接触し得る状態であったとみられることから、あるいは、足で回転台を右回転させながら製作していた可能性も考えられよう。以上のような回転台の使用方法は、広義の須恵器系埴輪にも通底する特徴といえるかも知れない。

輪台技法の可能性 輪轤状の回転台で製作される円筒埴輪の諸例については、しばしば回転台から離脱させるための技法痕跡が見出される。辻川哲朗は、乾燥期間をはさむことが不可避の円筒埴輪の製作において、須恵器工人が回転台を利用しつつ離脱する場合、複数個体の製作を同時に進行させるためには、製作中の個体を回転台からいったん離脱させて乾燥場所に移し、空いた回転台で別個体を製作する方法がとられたものと推測する。その際、「乾燥工程のたびに回転台から製作途上の個体を器体に歪みを生じさせることなく安全に離脱させる」ために回転台離脱技法が必要とされたとし、その具体的な方法として輪台技法（いわゆる淡輪技法）やヘラ切り技法が用いられたとする（辻川2007）。

B類の場合、明確な輪台技法やヘラ切り技法に相当する痕跡は見出せないが、底面は不自然なまでに平滑な状態を呈するものが多い。東影悠は、底面が平滑な状態を呈する要因について、「回転力を有する台上での遠心力に耐える必要性から」通有の円筒埴輪のような棒状あるいは蔓状のものを下に敷くことなく、「平滑な台上に粘土を強く密着させて置いたため」と理解する（東影2019）。加えて、B類で多用される外面下端の回転ケズリは「回転台に密着するために厚くなった粘土を回転台からの離脱時に削り取った痕跡」と理解する。

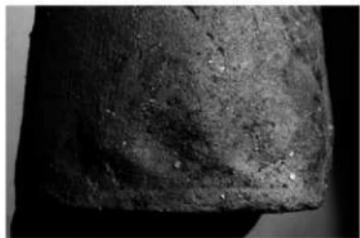
筆者もB類、とりわけ出現期のそれが鉄鋤なままで外面下端に回転ケズリを加える点は、回転台による製作工程と密接な関係があると推測する。ただしその目的は、単に厚くなった粘土をケズリ調整したというのではなく、ケズリによって消し去らなければならない何らかの製作痕跡がその範囲に付着していた可能性を考える。それを示唆するのが、外面下端にケズリが十分およんでいない個体において観察される同部分への連続的な強いユビオサエ痕跡である。橿原市新沢千塚166号墳出土埴輪において数多く確認でき（Fig. 17-4）、内藤元太はこれを底部調整として捉えるが（内藤2020）、166号墳例は摩訶が著しくタテハケ調整との先後関係は判然としない。これに対して、橿原市高所寺池遺跡出土例では、器面



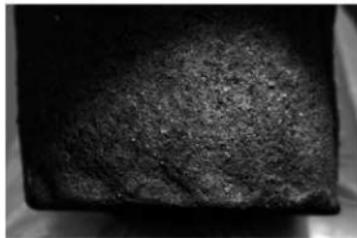
1 外面下端の回転ケズリ（三倉堂遺跡）



2 外面下端の回転ケズリ（新沢千塚 166 号墳）



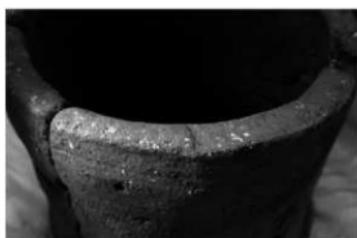
3 外面下端のユビオサエータテハケー回転ケズリ
(高所寺池古墳群)



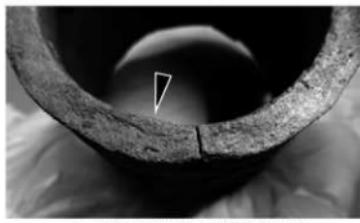
4 外面下端のユビオサエ（新沢千塚 166 号墳）



5 ナデ調整を示唆する平滑な底面（三倉堂遺跡）



6 ケズリ調整を示唆する底面（新沢千塚 166 号墳）



7 輪台技法を示唆する底面の接合痕
(新沢千塚 166 号墳)



8 輪台技法を示唆する底面の接合痕
(新沢千塚 166 号墳)

Fig. 17 B類底部に残る製作痕跡

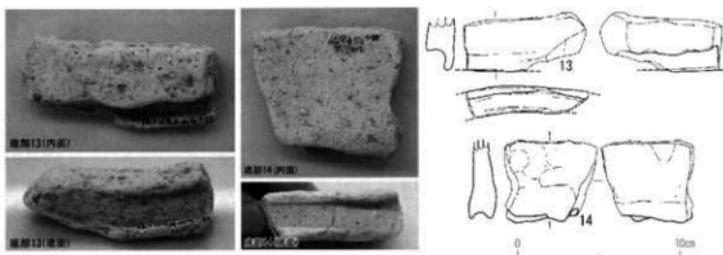


Fig. 18 長浜市横山城遺跡出土カマド形土器の輪台痕跡（辻川2016図2より転載）

の状態が良好なものにおいて、ユビオサエ→タテハケ→回転ケズリの順で重複関係を把握することができ（Fig. 17-3）、ユビオサエが製作の初期に施されたものであることが判明する。すなわち、外面下端のヘラケズリの目的は、同部分に集中的に施されたユビオサエ痕跡を製作の後半段階において消し去ることにあったとみられる。

こうした外面下端に念入りに施される強いユビオサエの類例として直ちに想起されるのが、輪台法（淡輪技法）の輪台痕跡上部に残るユビオサエ痕跡である。基部の粘土帯を輪台に圧着させるためのユビオサエとみられ、当然のことながら外面一次調整のタテハケやタタキに先行する。一次調整のハケやタタキによって丁寧に消し去られる場合もあるが、淡輪地域や紀ノ川下流域の事例では比較的頻繁に観察される。淡輪技法のように蔓や枝を束ねた明瞭な輪台痕跡は視認できないものの、B類における外面下端への集中的なユビオサエは基部粘土を輪台へ貼付けた際の痕跡である可能性が考えられよう。であるならば、上述した必要以上に平滑な状態を呈するB類の底面は、回転台そのものではなく、輪台圧着時の痕跡である可能性が浮上する。あるいは輪台痕跡としての凹みや段は、底部調整時にあわせて消し去られていることも予想される。すなわち、底面の平滑な状態は段や凹みを取り去るべくケズリやナデが加えられたことに起因する可能性も考えられる（Fig. 17-5・6）。状況証拠ではあるが、内面のハケ調整の起点が底面よりも下方に迫り出す事例の存在は、ケズリ調整によって当初の底面が幾分カットされる場合があったことを示唆する。

さらに注目されるのは、稀にではあるが底面に基部成形のものとは異なる不自然な接合痕が散見される点である。R・L接合ないしはS・Z接合などと呼ばれる基部成形時の粘土帯接合痕は、接合ラインが斜めに底面を横断するが、問題の接合痕は局所的ではあるが底面の縁に平行するように走り、かつ底面本体に覆いかぶさるように圧着する（Fig. 17-7・8）。こうした痕跡は、回転台離脱後の底部調整時に削り取られずに部分的に残存した輪台への圧着痕跡が、埴輪を正位置で再設置した際に押し潰され底面に再び圧着した状況として理解することが可能である。B類では輪台痕跡の段や窪みが典型的な淡輪技法ほど明瞭ではなかったことになるが、この点に関しては辻川哲朗がカマド形土器の底面に見出した輪台痕跡の状況が参考になろう。すなわち辻川が例示した長浜市横山城遺跡出土カマド形土器では、輪台を真上から覆うように基部粘土が置かれた結果、底面は教科書的な輪台技法のように外側が高い段ではなく、浅いU字形の断面形を呈しており、内外縁の突出はごくわずかである（辻川2016）。B類の輪台技法も、

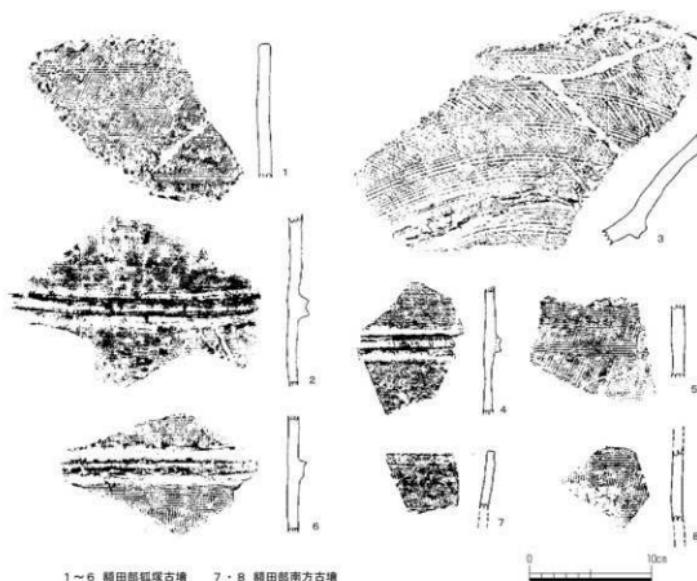


Fig. 19 C類の埴輪 1:4

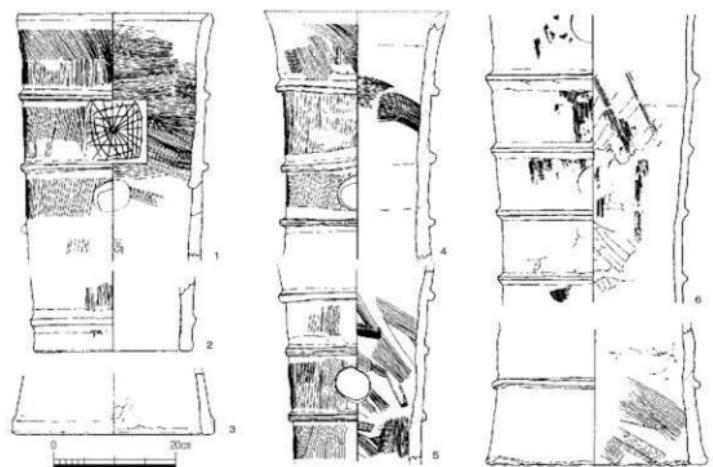


Fig. 20 D類(牧野古墳)の埴輪 1:8

こうした輪台の圧着痕跡が不明瞭となる方法であったとみられ、基本的には輪台取り外し後の底部調整により消し去られる性格のものであったと推測される。

小結 以上、B類（大和南部型）の特徴について、新たな所見も交えて論じてきたが、やや冗長となつたため、ここで総括しておく。まず形態的特徴としては、突帯間隔に対し底部高が著しく高く、底部高＝ $2 \times$ 突帯間隔、突帯間隔を口縁部高を基本的なプロポーションとする。段構成は2条3段、3条4段が多いが、この点については後に詳述する。口縁部形態は、端部を内側に小さく肥厚する例が多いが、単純に収めるものも少量ある。

竜轆轤状の回転台を右回転で使用し、外面は一次調整にタテハケ（下位では主軸が右に傾く）、二次調整に回転ヨコハケを施す。内面はナデないしナデのちタテハケ調整。突帯は総じて突出度が高く、割付に沈線を引く。突帯の成形は、いわゆる断続ナデ技法とは異なるが、ヨコナデ以前に右方向に断続的にユビを動かして粘土をナデ付ける手法が散見される。底部調整は、初期には外面下端に回転ケズリを施すが、やや遅れて外面板オサエ技法が現われ、その後、主流となる。焼成は軟質で、部分的に小規模な黒斑が付着する。

竜轆轤状の回転台を使用し、ヨコハケ、ケズリ調整に回転力を駆使する点、回転台離脱のための輪台技法の使用も示唆されることから、いわゆる須恵器系埴輪との親緣性が高いが、非窯窯焼成でタキ技法が用いられない点において、狭義の須恵器系埴輪とするには難がある。既に指摘があるように奈良盆地南部に定着した渡来系の土器製作集団の関与が濃厚であるが（東影2019）、それとの詳細な関係解明が今後の課題である。

（3）C類

ごく少量ではあるが、奈良盆地内でも轆轤状の回転力を駆使した典型的な須恵器系埴輪が出土している。すなわち、大和郡山市額田部狐塚古墳では、高速の回転ヨコハケを施した還元焰焼成の円筒埴輪や蓋形埴輪が大量に出土している（Fig.19）。特徴的な断面M字形の突帯形状からも、いわゆる尾張系埴輪の範疇に属するものとみてよく、ここではこれをC類としておく。近隣に所在する大和郡山市南方古墳からも通有のV群埴輪に交じて尾張系埴輪が出土しており、額田部地域の一角に尾張系埴輪の生産・消費拠点が存在した可能性が示唆される。

なお、田原本町羽子田6号墳における輪台技法を使用した埴輪も、広義の須恵器系埴輪の範疇に属するが、前述のB類（大和南部型）や尾張系埴輪とは系統を異にする。その系譜や製品流通の実態解明が待たれる。

（4）D類

鳥塚古墳や牧野古墳出土例を典型とするもので、器壁が分厚く重厚なつくりで、突帯の突出も高く、全体形狀も不整形な点で、通有のV群円筒埴輪とは距離を置く一群である（Fig.20）。鐘方分類の大和C類に該当し、いわゆる日置莊西町窯系の範疇で理解される場合が多い。ここまで述べてきたA～C類とは特徴が異なるものの、形態・技術系譜上の位置づけは不鮮明であり、日置莊西町窯との具体的な関係も未解明である。鳥塚古墳や牧野古墳の築造年代がTK43～209型式期とされることからも、奈良盆地

における主だった系統の生産終焉後に断片的に生産・供給された埴輪であることは間違いない。

2 奈良盆地における各系統の分布状況

以上にみた各系統の分布状況については、それぞれの解説において適宜、触れた部分もあるが、ここではあらためて、古墳の立地や群構造にも留意しながら、奈良盆地内における各系統の展開について確認していく。その際、古墳の立地や群構成を考慮し、(1) 小規模墳からなる古墳群、(2) 有力首長墳からなる古墳群、(3) 単独で立地する古墳、の三者に区分して様相をみていくことにする。

(1) 小規模墳からなる古墳群の事例

① 楠原市四条古墳群

中期末から造営を開始する古墳群で、中小の円・方墳（造出付を含む）からなる。これまでのところ14基が検出されているが、調査がおよんでいるのは全体のごく一部で、墓域は少なくとも直径600m以上の範囲に広がる。隣接する四条シナノ古墳群とあわせて、大規模な群集墳を形成しているものと推測される。四条古墳群からは、前述した各種系統がそれぞれ出土しており、当該期の埴輪の流通・消費状況を把握する上で極めて重要な事例といえる。以下、時系列に沿ってその内容を確認する。

V期新相 これまでのところ7号墳出土埴輪が最も古く位置づけられる。前述したように円筒埴輪はV群出現の直前段階に位置づけられるもので、底部調整を採用するものの、突帯は断続ナデ技法を用いないI群である。B種ヨコハケの施効率が高く9割を超える。

V期古相 2・8・10号墳が該当し、成立期のA類（V群円筒埴輪）がともなう。未だB種ヨコハケを高い頻度でとどめるが、突帯はII群（断続ナデ→板オサエ→ヨコナデ）で、底部調整も施工頻度が高まる。注目すべきは、2・8号墳ではB類（大和南部型）が共伴している点である。いずれも外面下端に回転ケズリを加える初期の特徴を備えており、器面調整は明瞭なハケメを残さず板ナデ状である点で共通する。

V期中相 9号墳が該当する。A類は1点出土しているのみで、B種ヨコハケは省略されているものの、底部調整はない。2・8号墳と同様にB類が共伴するが、器面調整は通常のハケ調整である。底部調整も回転ケズリではなく板オサエであり、この点から2・8号墳よりもわずかに後出する可能性を指摘できる。

V期新相 6号墳では、B類の共伴はみられないものの、V群円筒埴輪においてAa類とAc類の2系統がともなって出土している。典型的なII群無調整突帯（断続ナデ技法B新）の存在から、6号墳のV群円筒埴輪の多くがAa類に属すこと、さらにはその時期がV期新相に下ることが判明する。これに対して、Ac類は、全形の判明するFig. 21-25によってその存在を確認できる。2~4段目に連段直交で円形透孔を配置し、突帯は突出度が高く、底部調整はない。口縁部はユビオサエの凹凸を明瞭に残すかたちで粘土帶を貼り付ける典型的な貼付押圧口縁である。胎土も白色基調であり、盆地北部からの搬入品の可能性が高い。同様の胎土は、突帯の突出度が高い一部の円筒埴輪片や蓋・馬・家形埴輪にも認められる。馬形埴輪は前述した音乗谷古墳やヤイ古墳と同様に、頭部側面の粘土板が顎部分で下方へ拡張する特徴が認められる。

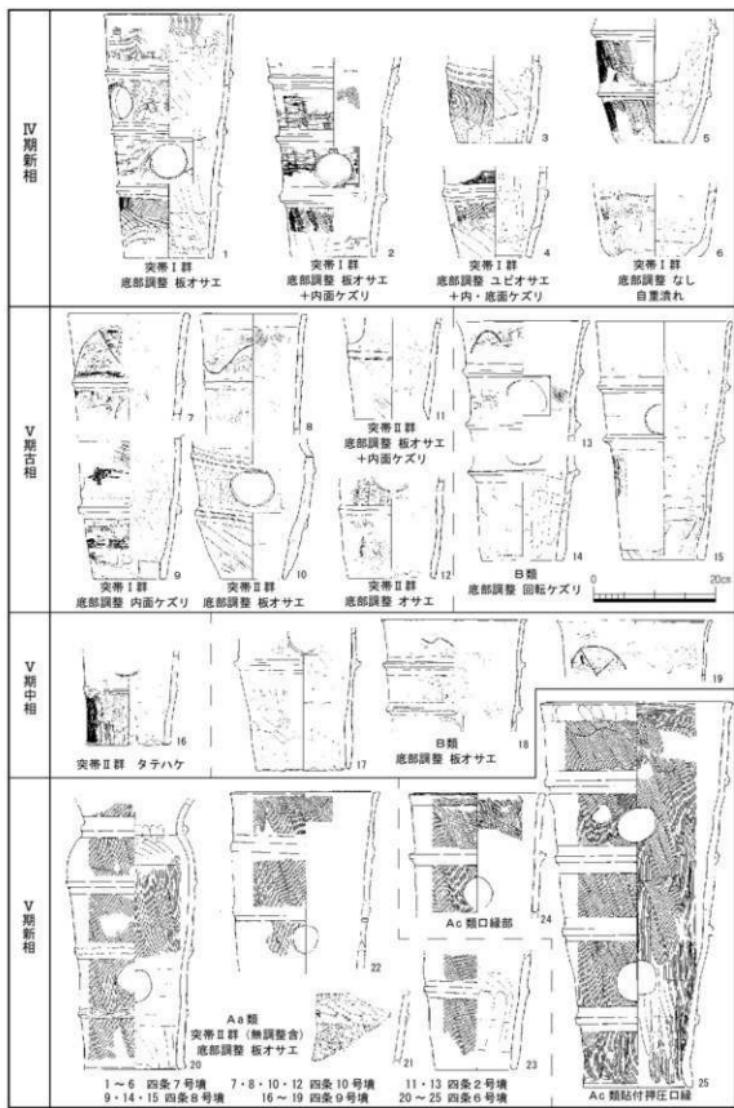


Fig. 21 四条古墳群における埴輪の変遷 1:8

小結 四条古墳群では、各時期を通じてA類が出土しているものの、実に様々な系統の埴輪が入り乱れるように流入しており、古墳群で核となる系統の埴輪を見出し難い状況にある。むしろこの点は、四条古墳群のような古式群集墳では、古墳群独自の埴輪生産は展開しておらず、一方的に外部から製品供給を受ける体制にあったことを物語っているといえよう。

② 檵原市新沢千塚古墳群

古式群集墳として学史的にも著名であるが、埴輪の詳細については未公表のものが多い。埴輪の全容が判明するもとしては、166号墳や175号墳がある。

166号墳では、B類を主体としつつ、A類も一定量出土しており、四条古墳群と同様に系統の混在状況を確認できる。B類は、前述のように外面下端にユビオサエを集中的に施すものが多いが、底部調整の回転ケズリでこれを消すものも一定量含まれる。共伴するA類の突帯は、板オサエ整形のちヨコナデ調整を加えるⅡ群であり、割付に凹線を引くものもある。底部調整は板オサエで、底面を変形させるものの、さほど粗雑化してはいない。B種ヨコハケを省略せず高頻度で施すこと、および共伴須恵器の型式からも、V期古相に位置づけられる。

175号墳では公表されている36点すべてがB類で構成される。底部調整は、回転ケズリに加えて板オサエが含まれることから166号墳よりも新しく、共伴須恵器の型式からも、V期中相に位置づけられよう。

小結 新沢千塚古墳群では、B類が高い比率で出土するものの、166号墳におけるA類の共伴に加えて、115号墳や158号墳でもA類が出土していることから、やはり古墳群として特定の系統の埴輪を集中的に生産していた状況を見出すことができない。四条古墳群と同様に外部から一方的に製品供給を受けていたとみられる。

③ 檵原市高所寺池古墳群

藤原宮下層では埴輪を伴う埋没古墳が各所で検出されているが、宮東南隅の高所寺池の周辺では、直径20m前後の円墳が近接して3基検出されている（飛鳥藤原第131次調査）。うち2基は埴輪とともになっており、SD9850からB類が、SD9870からはA・B類が共伴して出土している。SD9850出土のB類は、底部調整は不鮮明で、外面下端に回転台装着時のユビオサエを残す。SD9850に重複する擾乱坑から出土した底部片には、前述のようにユビオサエ→タテハケ→回転ケズリの手順が確認できるものがある（Fig. 17-3）。SD9870出土のA類は、外面にB種ヨコハケを残し、底部調整は内面下端をヘラケズリする。TK23型式の有蓋高杯が伴うことからも、V期古相に位置づけられる。

高所寺池遺跡検出の小円墳は、いずれも周溝が全周せず削平が著しいことに加え、高所寺池北辺部（第118次調査）の包含層からも同時期の埴輪が出土していることから、周囲には同様の小規模墳が存在したことが確実視される。高所寺池北方の第188-7次調査区でも同時期の小古墳の周溝の一部が検出され、西方の第201-3次調査区では遺構は不明確ながらV期古相段階のA類とB類の破片がまとまって出土していることからも、高所寺池一帯は四条古墳群や新沢千塚古墳群と同様、古式群集墳的様相を呈していたとみられる。埴輪も両古墳群と同じくA・B類の双方が出土しており、両者の生産地から供給を受けていたとみられる。

④ 大和高田市池田古墳群

中・小型の方墳・円墳で構成される古墳群。1～3・6号墳では黒斑を有するⅢ期の埴輪が出土しており、造墓の開始は中期前葉にまでさかのばる。古墳群に隣接する墳丘長約75mの前方後円墳・狐井塚古墳が中期後葉（Ⅳ期新相）の築造であるものの、中期中・後葉の中小古墳は未検出で、後期以降に再び造墓が活発化して古式群集墳的な様相を呈するに至る。

後期古墳としては、4・5・8号墳がV期古相、9号墳がやや遅れてV期中相に位置付けられる。各古墳の埴輪は、8号墳で2条3段のB類1個体が出土していることを除くといずれもA類である。突帯はⅡ群で、断続ナデによる貼り付け後に板オサエ整形を介在しているとみられる。9号墳からは少量ながら板オサエ整形を施す無調整突帯（断続ナデ技法B古）が出土しており（Fig.1-6）、Aa類に属することが判明する。8号墳出土のB類は、口縁端部に肥厚がみられず、底部調整に回転ケズリを施す古相のものである。A類のヨコハケの残存率から、V期古相でも4・8号墳が5号墳にやや先行するとみられる。

いずれにしても、後期の池田古墳群ではA類が主体的に供給され、B類は存在するものの極めて客体的である点に特色がある。四条古墳群や新沢千塚古墳群でも同様にA・B類が共伴するが、B類の比率が著しく高い点で様相を異にする。この点はB類の流通を考える上で示唆的である。なお、池田古墳群のA類で主体となる胎土は、素地が白～灰白色基調で風化白色礫や褐色くさり礫に加えて、微量ながら金雲母を含む点に特徴があり、四条古墳群や新沢千塚古墳群で主体となるA類とは胎土を異にするとみられる。

⑤ 大和高田市三倉堂遺跡

古墳時代後期の木棺6基が出土したことで著名であるが、木棺は1～3号棺がそれぞれ単独で、4～6号棺が別地点において一括で出土しており、少なくとも4基の古墳が存在したことが知られる。土器棺が検出されていることからも、小規模な古墳がまとまって墓域を形成していた可能性が高い。

埴輪は4～6号棺検出地点の20m程北で限定的に5個体が出土している。いずれもB類で、うち2本は朝鮮形埴輪で、肩部に波形のヘラ記号を2カ所描く。口縁部まで遺存する円筒埴輪2個体にも波形のヘラ記号が各1カ所残る。5個体は、内外面調整のあり方、突帯下面に右上がりの断続的なナデ付け痕跡を残す点、透孔は右回りの穿孔で、時計でいうところの11時の位置に工具を抜いた痕跡を明瞭に残す点が共通する。同工品、ないしは同一グループの製品とみて間違いない。ほかに埴輪を樹立する古墳が存在しないなかで、B類が生産時の単位を崩さずに限定的に搬入された状況が読み取れる。

⑥ 桜井市赤尾崩谷古墳群

鳥見山北麓の尾根上に築かれた古墳群。尾根に沿って5基が列状に検出されており、1・3～4号墳が方墳で、2号墳が円墳（直径12m）である。埴輪を有するのはその2号墳のみで、B類が限定的に供給されている。口縁部にX字状のヘラ記号を描き、底部調整に板オサエを加える。板オサエ痕跡には、単位内に棒状の隆起痕を残すものがある。共伴須恵器からV期新相には下らず、中相の所産とみられる。三倉堂古墳群と同様、古墳群として埴輪を生産した形跡ではなく、2号墳にのみB類が限定的に供給された状況がみてとれる。

（2）有力首長墳からなる古墳群の事例

後期の奈良盆地において大型の前方後円墳が集中するエリアは、盆地東部の天理市布留遺跡の周辺に



Fig. 22 別所鐘子塚古墳出土埴輪の三次元モデル画像 1:6

限定される。大型古墳は布留遺跡を挟んで北方、南方に分かれて展開している。

① 別所古墳群

北方の一群は、全体を「石上・豊田古墳群」あるいは「石上古墳群」と呼称されることもあるが、ここでは古墳の分布が東西に偏在する状況を重視し、東半を狭義の「石上・豊田古墳群」、西半を「別所古墳群」と呼び分けた石田大輔の区分案（石田2018・2020）に従う。石上・豊田古墳群中の石上大塚古墳、ウワナリ古墳の2基の前方後円墳は、墳丘長110m前後を測り、群中の盟主墳であることが明らかであるが、両古墳は後期後葉の築造とみられ、埴輪の様相は有無も含めて判然としない。これに対して西半の別所古墳群では、別所鐘子塚古墳、袋塚古墳において埴輪の様相が判明している。

別所鐘子塚古墳 墳丘長57mの前方後円墳。墳丘本体に対する本格的な調査はなされていないが、後円部南側の隣接地で同古墳所用とみられる全形の判明する円筒埴輪が3個体出土している。口縁部まで残存するのは1点（Fig. 22）であるが、いずれも5条6段構成とみられ、2～5段目に連段直交で円形透孔を配置する。外面調整は一次ナナメハケで、底部調整はみられない。突帯はV群としては突出度が高いが、貼付は大きく波打ち、剥離面にも割付痕跡はみられない。口縁部は貼付押圧口縁で、ユビオサエ痕跡を明瞭にとどめる。典型的なAc類であり、胎土もAc類に特有の白色基調のものであることから、搬入品の可能性が高い。一般的にAc類は、貼付口縁の有無を問わず、4条5段の製品が多いが、本例を通じて5条6段以上の大型品も存在することが判明する。

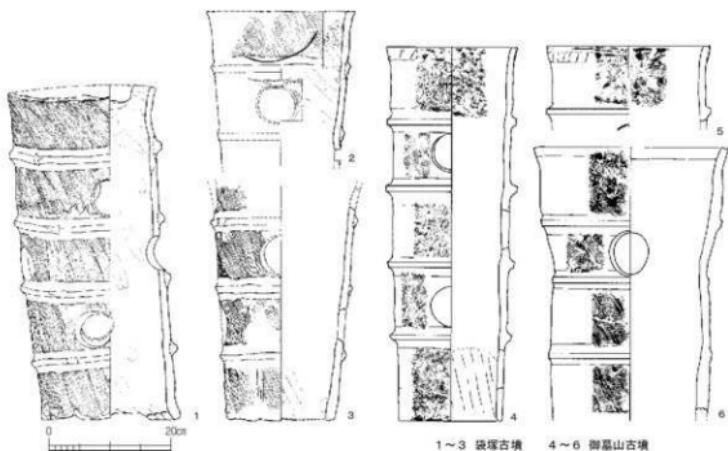


Fig. 23 袋塚古墳と御墓山古墳の埴輪 1-8

袋塚古墳 別所鍾子塚古墳の南に対峙するように築かれた前方後円墳で、前方部端は未確認ながら墳丘長は55~65mと推測されている。円筒埴輪は全形の判明するものが1個体あり、4条5段構成で連段穿孔である。そのほかの個体でも2~4段目に連段穿孔するものが散見できる(Fig. 23-1~3)。総じて突帯の突出度が高い。底部は未調整のものが多く、板オサエを施す場合でも底面が変形しない程度の調整にとどまる。共伴する形象埴輪も、入母屋造の家形埴輪が平面隅丸方形ないしは梢円形を呈する点や、石見型埴輪形象部上辺の粘土帶や大刀形埴輪のものとみられる底部の下端突帯にユビオサエ痕跡を残す(Fig. 13-1・2)など、Ac類の特徴が明瞭である。

御墓山古墳 別所鍾子塚古墳、袋塚古墳からさらに西へ2kmほど離れた平地部に単独で立地するが、墳丘長74mを測る大型前方後円墳であり、布留遺跡周辺の首長墳とも無関係ではないと考えられるため、比較も兼ねて出土埴輪を検討しておく。

円筒埴輪は、貼付口縁にユビオサエ痕跡を残すAc類が出土している。Fig. 23-4は4条5段構成で、1~4段目に連段直交で円形透孔を配置する。底面には切断痕跡があり、現状の最下段に透孔を穿つてことからも、当初は6段構成以上で製作されたのち、何らかの理由で現底面部分以下を切断されたものとみられる。現最下段外面には切断後に底部調整風にユビナデを加えているが、底面の変形はほとんど生じていない。このほかにも、貼付口縁でない通有の口縁部をもつ4条5段構成のAc類がある。やはり突帯の突出度が高く、底部調整は施さない。一方、これらとは別に突帯が低平でヨコナデの上下に断続ナデの爪痕を明瞭に残す個体も散見される(Fig. 23-6)。破片資料中にはII群無調整突帯が存在している(Fig. 1-8)ことからも、Aa類の共伴が確実視される。II群無調整突帯は、板オサエ整形を省略する典型的な断続ナデ技法Bであり、V期新相に位置づけられる。

なお、形象埴輪は破片も踏めて存在が不明瞭である一方で、鳥、大刀、笠、翳、石見型、などの木製

III 奈良盆地における後期の埴輪生産と系統

品が大量に出土しており、木製品で形象埴輪を補完していた可能性がある。

小結 このほかに後期の大型古墳において、埴輪の詳しい様相が判明するものがないため、古墳群全体の埴輪の展開を踏付けることは困難であるが、布留遺跡北方の大型古墳では総じてAc類の埴輪の受容が目立つ点を指摘できる。ただしこの点をもって布留遺跡周辺でのAc類の主体的生産を論じるのは、別所鎧子塚古墳における白色基調の胎土の存在からも早計であろう。立地がやや西に寄るもの御墓山古墳では、Ac類に加えて、特徴が相反するAa類が共伴しておらず、双方の生産地から製品供給を受けている。Ac類の展開に関する私見は、盆地全体の様相を踏まえて後述することにする。

② 榆之内古墳群

布留遺跡南方では、西乘鞍古墳、東乘鞍古墳、小暮古墳の3基の大型前方後円墳が後期に連続して築かれており、前期や終末期の古墳も含めて全体が榆之内古墳群として把握されている。西乘鞍古墳、東乘鞍古墳、小暮古墳の3基については一連の首長系譜と目されるが、各古墳の築造順序には諸説あり、定見が得られていない。現段階において埴輪の様相が詳しく判明しているのは、西乘鞍古墳と小暮古墳の二者である。

西乘鞍古墳 墳丘長118mを測る大型前方後円墳で、墳丘外周部の調査により、埴輪、須恵器が出土している(Fig. 24-1~8)。

円筒埴輪は、全形の判明する6条7段構成の大型品があり、透孔は3・4・6段目に円形透孔を穿つ。3・4段目が連段穿孔となるが、3段目に透孔を配置することを原則とする大型品では局的に連段穿孔となる場合がしばしばある。4・6段目間が隔段直交配置となることからも、全体としては隔段穿孔として理解できる。底部径は約23cmであるが、表探資料にもほぼ同じ底部径で3段目に透孔を穿つものがあり、これらを通じて当古墳の標準的な段構成および規格を知ることができる。

突帯は総じて突出度が高い。破片資料の中には、典型的な突帯Ⅱ群(断続ナデ技法A)も少量確認できるが、大半は断続ナデを用いないI群的な突帯である。ただしそれらも、突帯の貼付けが水平でないことに加え、底部高や突帯間隔が不均等であることから、割付技法を用いていない可能性が高い。底部調整の施工率も低く、一見するとIV群的な古い様相が目に付くが、この点は当古墳の埴輪の大部分が大型品で構成されるためであろう。蓋形埴輪の笠部、立筋には線刻が残るが、外側調整にB種ヨコハケはみられないこと、TK47~MT15型式に比定できる須恵器が出土していることからも、V期中相の所産と考えられる。

系統の比定は困難であるが、透孔が隔段穿孔であることから、大部分はAc類を除くA類のいずれかの系統に属すとみられる。ただし、口縁部片の中には、ユビオサエ痕を残す貼付口縁が出土しており、Ac類が一定量共伴している可能性は残る。

小暮古墳 墳丘長約85mの前方後円墳で、墳丘外周の調査により、大量の円筒・形象埴輪と木製品が出土している。形象埴輪には、円柱を伴う高床式の家形埴輪をはじめ、蓋、叔、鶴、水鳥、人物、盾持人などが出土しており、木製品も笠、盾、石見型、署、大刀、鉾など、多種多彩なものが出土している。円筒埴輪は、5条6段構成を基本としつつ、一部に貼付口縁を有する7段以上の大型品がともなう(Fig. 24-9・10)。突帯は総じて扁平でヨコナデの上下に断続ナデによる貼付痕跡を残すものが多い。II群無調整突帯(断続ナデ技法B新)の存在が確認できることから、V期新相に比定できる。底部調整は高



Fig. 24 榆之内古墳群の埴輪 1~8

い頻度で板オサエが施される。ヘラ記号は15種以上あり、供給元の製作単位の豊富さを裏付ける。貼付口縁はAc類特有のユビオサエ痕は見られず、いずれも平滑に仕上げるが、通常よりも幅太のもの（幅5cm前後）が目立ち、仕上げもナデが全面におよばずタテハケを残すものや、ヨコハケ（A・B種）で仕上げるものがあるなど特徴的である。II群無調整突帯や底部調整板オサエの存在から大部分はAa類に属することが確実であるが、そのほかの系統が共伴している可能性は否定できない。とりわけ、笠部や軸受端部の突端にユビオサエ痕を残す蓋形埴輪については、前述のようにAc類との関係が考慮される。

小結 以上、後期の榆之内古墳群の埴輪の様相に関しては、東乘鞍古墳の埴輪の様相が不明な点で課題を残すが、V期中相に比定できる西乘鞍古墳と新相の小墓古墳では、さほど大きな時間差は見込めないにもかかわらず、その内容は大きく変化している。北方の別所、石上・豊田古墳群も含めて、布留遺跡を取り巻くように展開するこれら後期の一大古墳群については、一般的に物部氏の奥津城とする見方が有力であるが、そうした特定の氏族・部族の結合を反映するような古墳群においても、埴輪の系統は單一ではなく、錯綜する状況にあることが確認できる。別所、榆之内といった各古墳群単位においても生産体制が維持・管理された形跡を見出すことはできず、製品供給ないしは技術支援を外部へ依存していた様子がうかがえる。

(3) 単独で立地する古墳の事例

市尾墓山古墳 初期の畿内型横穴式石室を内包する墳丘長約66mの前方後円墳で、盆地南縁に位置し、紀伊へとつながる巨勢谷の入口部に立地する。南西200mには墳丘長52mの市尾宮塚古墳が所在するが埴輪は有しておらず、墓山古墳は埴輪樹立古墳としては単独での立地といえる。円筒埴輪は6条5段と5条6段の2者の存在が確認でき、3・5段目に隔段直交で円形透孔を配置するものが多い（Fig. 25-39）。

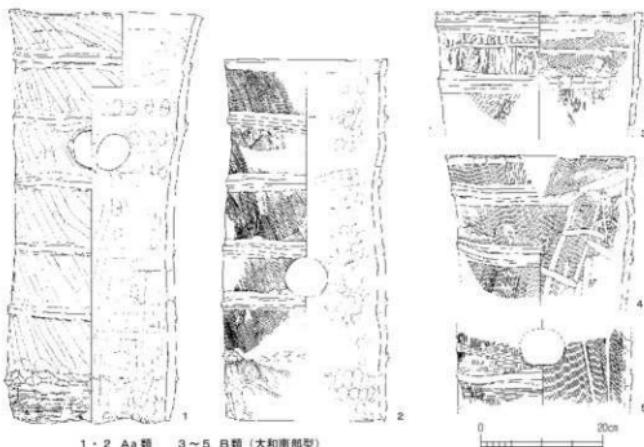


Fig. 25 市尾墓山古墳のAa類とB類 1:8

1・2)。突帯はⅡ群で、最下段が無調整（断続ナデ技法B新）の個体が多い。大部分がAa類に属し、V期新相に位置づけられる。

一方で外面に回転ヨコハケを有し、口縁端部を肥厚するB類の特徴をもつ埴輪も一定量出土している（Fig. 25-3～5）。この一般的なV群とは異なる異系統の埴輪の存在を見出した辻川哲朗は、これを「紀伊・大和南部型」として積極的に評価するが（辻川2010b、2012）、「大和南部型」とするに消極的な意見もある（内藤2018）。おそらく慎重論の多くは、B類が通常、2条3段や3条4段の小型品として製作され、主として群集墳に供給されることを重視し、市尾墓山例がB類としては現状、奈良盆地では例をみない大型品であることを問題視しているものと推測される。しかしながら、後述のように、埴輪の段構成を決定づける論理は生産体制に起因する系統とは直接的な関係がないと考える。現状では、V期新相段階で外面に回転ヨコハケを施す系統としては、B類を置いてほかにはない。口縁端部が内側に肥厚する点、タテハケの起点が右上がりとなる特徴からも、この一群の埴輪はB類、すなわち「大和南部型」とみて間違いない。

このように、Aa類に少量のB類が共存する市尾墓山古墳の埴輪の構成は、単独で立地する首長墳においても埴輪の構成は必ずしも單一とはならないことを示す好例として評価できる。さらに埴輪以外にも、鳥形、笠形、石見型などの木製品が加わることを踏まえると、市尾墓山古墳のために新たに単独で生産体制が整備されたのでなく、既存の生産拠点から必要に応じて各種埴輪類の供給を受けていたのが実態と考えられる。

水晶塚古墳　盆地中央部に位置する墳丘長50mの帆立貝形古墳。約1km東に位置する星塚1・2号墳とともに、菅原東窯製品の消費古墳のひとつとして知られてきた（坂編2006）。同古墳の埴輪は、ヘラ記号および器種構成から2群に大別される（田中2013）。

田中分類のA類は、普通円筒埴輪のみからなり、横倒しにしたS字に左下がりの斜線を組み合わせた特徴的なヘラ記号を描く。3条4段と4条5段のものがあり、後者では透孔が2・4段目に隔段直交で配置される。突帯はⅡ群で無調整突帯はみられない。底部調整は板オサエで、底面は完全に潰れて波打ち、断面尖底となるものが多い。

田中分類のB類は、貼付口縁をもつ円筒埴輪と朝顔形埴輪からなり、ヘラ記号は横倒しにしたS字形でA類のような斜線は引かない。貼付口縁はユビオサエ痕跡を残す。突帯は断続ナデによる貼付痕跡が散見されるが、総じて突出度が高い。全形が判明するものが少ないため、底部調整の様相は不明である。透孔は一部例外があるが大部分が連段穿孔となる。

以上の大別2群を本書の系統分類に位置づけると、田中A類はAb類、B類がAc類に該当する。異なる系統の埴輪が共存することになるが、実際のところヘラ記号の一致や同ハケ関係が確認される確実な昔原東窯産埴輪は（本書付論Ⅰ参照）は田中A類（Ab類）のみである。田中は両者が器種構成を補完する関係にある点に着目し、昔原東窯に一致するヘラ記号が見られないAc類についても昔原東窯産の可能性を考えたが、当古墳のAc類もやはり白色基調の胎土のものが多くを占めており、平城山周辺の異なる窯から供給された製品の可能性が高い。全体的な特徴が類似し、ヘラ記号も一致する製品が前述の四条6号墳から出土し（Fig. 12-3～5）、かつそこではAa類が共存している点（Fig. 21-20～25）は、Ac類がAa類やAb類とは別系統として各古墳に供給されていた状況を裏付けていよう。

なお、田中が着目した機種構成の補完関係についても、それが異なる生産地間であっても受注に関する情報共有がなされれば実現可能であったと考える。Ac類は朝顔形埴輪を除くと、貼付押圧口縁の製品に集中するが、この点は蓋形埴輪などを載せる器種として同製品を集中的に特定の窯に発注した可能性を示唆する。実際に水晶塚古墳出土の蓋形埴輪は、Ac類との関連が推定される軸受端部の粘土帯にユビオサエ痕を残すタイプであることからも、蓋形埴輪とAc類がセットで供給された可能性が十分考えられる。ただし立築は、ナデ調整され、頂部に一条の線刻を刻む特徴を有しており、昔原東窯出土例との共通性が指摘されている（田中2013、木村2018）。各系統間の異同を見据えた形象埴輪の体系的な特徴の整理が今後の課題となろう。

水晶塚古墳では、このほかにも少量ながら、底部調整が内面ケズリでAd類となる可能性があるものや、外面B種ヨコハケ調整で突帯の突出度が高く、最上段に連弧状の線刻を描くもの、口縁部内面に×形のヘラ記号で描くものなどがある。また、鳥形、笠形、石見型などの木製品も出土している。盆地中央部の中小古墳では、核となる拠点的生産地に加えて、さらに複数の生産地からも補足的、多元的に製品供給を受けていた可能性が示唆される。

3 奈良盆地における後期の埴輪生産体制とその背景

（1）奈良盆地における後期の生産・供給体制

前節では古墳の立地状況を、（1）小規模墳からなる古墳群、（2）有力首長墳からなる古墳群、（3）単独で立地する古墳、の3者に区分した上で、それぞれのパターンの代表的な事例を通じて各系統の分

III 奈良盆地における後期の埴輪と系統

Tab. I 奈良盆地の後期古墳における円筒埴輪の諸系統

No.	古墳名	所在地	墳形	規模(m)	段数	系統
1	香葉谷古墳	木津川市香葉台	帆立貝形	22	5	Ae類
2	奈良少年院古墳	奈良市葛木町	—	—	5?	Ae類
3	ヤイ古墳	奈良市大蓮町	前方後円墳	24	—	Ab類・Ac類
4	車川古墳	奈良市大守町	—	—	5+	Ab類?
5	平城515次SD10416	奈良市二条大屋南	—	—	—	Ab類
6	園古墳	大和郡山市本庄町・天井町	—	—	5	Ad類
7	鶴田郡孤塚古墳	大和郡山市鶴田郡北町	前方後円墳	50	—	C類
8	鶴田郡南方古墳	大和郡山市鶴田郡北町	円	20	—	A類・C類
9	水品塚古墳	大和郡山市八条町	帆立貝形	50	5+4	Ab類・Ac類
10	星塚1号墳	天理市二上堂上・庄町	帆立貝形	37	5?	Ab類
11	星塚2号墳	天理市二上堂上・庄町	帆立貝形	36	5?	Ab類
12	岩室池古墳	天理市岩室町	前方後円墳	55?	6+5	Ac類
13	佐々木塚古墳	川西町船崎	前方後円墳	45	5	Ad類
14	三宅慨墓山古墳	三宅町羽空堂	前方後円墳	40	5	A類
15	石見道跡	三宅町石見	帆立貝形	35*	5+4	Ac類
16	黒田大塚古墳	田原本町黒田	前方後円墳	70	6+	A類
17	菅錦山1号墳	田原本町八尾	前方後円墳	50*	6	Ac類
18	菅錦山2号墳	田原本町八尾	円	22	4	Ac類
19	小坂里中古墳	田原本町小坂	円	22	4+3	Ad類
20	羽子田1号墳	田原本町東羽子田	前方後円墳	—	6+	A類
21	別所縄子塚古墳	天理市別所町	前方後円墳	57	6	Ac類
22	御塚古墳	天理市御塚町	前方後円墳	55	5	Ac類
23	御船山古墳	天理市上総町	前方後円墳	74	6+ (5)	Ac類・Ac類
24	小島古墳	天理市御船之内町	前方後円墳	85	7+6	Ac類
25	西垂柳古墳	天理市御船之内町	前方後円墳	118	7	A類
26	鷺山東古墳	板井市鷺山	方?	21*	4?	Ad類
27	礪石山塚古墳	板井市太田	円	16.5	4	A類
28	泥沙門山古墳	板井市茅原	前方後円墳	45	—	Ac類
29	赤尾崩谷2号墳	板井市赤尾	円	12	3	B類
30	八重ケ谷1号墳	板井市赤尾	円	10	—	B類
31	酒船石造跡	明日香村開原	—	—	—	Ac類・B類
32	興善寺古墳	福原市御所外町	円	13	—	B類
33	高所寺池SD9850	福原市御所町	円	20	—	B類
34	高所寺池SD9870	福原市御所町	円	20	—	A類・B類
35	西条2号墳	福原市西条	円	28	4?	A類・B類
36	西条6号墳	福原市西条	円	18	4+ (5)	Ac類・Ac類
37	西条7号墳	福原市西条	円?	45?	4	A類
38	西条8号墳	福原市西条	円	13.5	3	A類・B類
39	西条9号墳	福原市西条	円	26	4?	A類・B類
40	西条10号墳	福原市西条	方?	12	—	A類
41	内膳4号墳	福原市御所町	方?	20*	4	Ac類・B類
42	新光千塚166号墳	福原市御所町	円	18	4+3	Ac類・B類
43	新光千塚175号墳	福原市御所西町	円	16.5	4+3	B類
44	新光千塚225号墳	福原市御所西町	円	12	—	B類
45	鳥屋尾山古墳	福原市御所町	前方後円墳	130	—	Ac類
46	龍變寺鳥居峰1号墳	高取町鸟居峰	円	19	4	B類
47	市尾墓山古墳	高取町市尾	前方後円墳	66	7+6	Ac類・B類
48	イワク5号墳	高取町鸟居峰	円	16	—	B類
49	イワク6号墳	高取町鸟居峰	円	16	—	B類
50	イワク12号墳	高取町鸟居峰	円	20	—	B類
51	谷田深谷1号墳	高取町谷田	円	15	3	B類
52	支志山古墳	広陵町支瀬	帆立貝形	30*	5?	Ac類
53	牧野古墳	広陵町支吉	円	45	6+	D類
54	三食堂造跡	大和高田市西三食堂	—	—	3	B類
55	池田4号墳	大和高田市池田	前方後円墳	—	—	A類
56	池田5号墳	大和高田市池田	円	—	4	A類
57	池田8号墳	大和高田市池田	方	—	4+3	A類・B類
58	池田9号墳	大和高田市池田	方	—	—	Ac類
59	下田東1号墳	香芝市下田東	方	21	4	Ac類
60	瓢井城山古墳	香芝市瓢井	前方後円墳	140	—	Ac類
61	北花内大塚古墳	葛城市北花内	前方後円墳	90	—	Ac類
62	石光山17号墳	葛城市石光	帆立貝形	25	4	A類
63	石光山20号墳	葛城市石光	円	14	4	B類
64	寺口忍海D27号墳	葛城市寺口	帆立貝形	20	5	A類
65	寺口忍海H19号墳	葛城市寺口	円	13	—	B類
66	巨勢山460号墳	御所市室	円	15	3+	B類

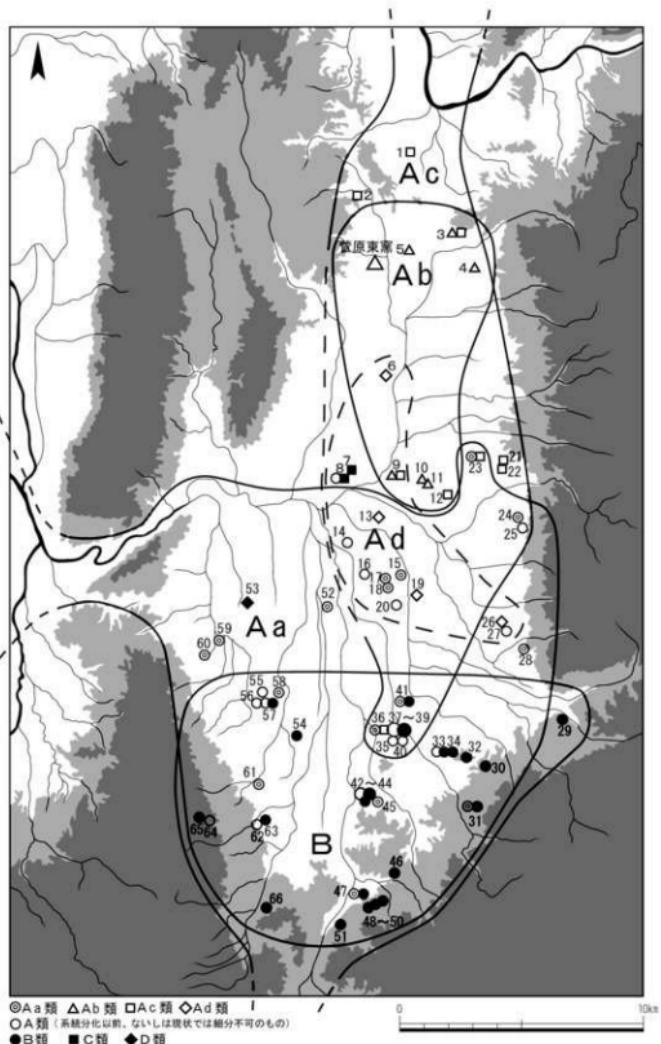


Fig. 26 奈良盆地における後期円筒埴輪の系統別分布状況

III 奈良盆地における後期の埴輪生産と系統

布・展開状況を詳しくみてきた。

その結果、意外にも古墳群全体あるいは個別古墳においても、特定の系統が限定的に受容されている状況を見出すことは困難で、むしろ複数の系統の製品を必要に応じて相互補完的に受給していた様子が浮き彫りになった。無論、現状で明確になっている生産地は奈良市菅原東窯のみであり、また胎土の科学分析も十分実施されていない状況のもとでは、推測の域を出ない部分もあるが、以上のような状況証拠の積み重ねからは、後期の奈良盆地では既に個別消費単位ごと、あるいは古墳群単位で埴輪生産体制を構えるような状況を脱しており、菅原東窯のような拠点的生産地が計画的に配置されて盆地内の消費地に埴輪を安定供給するような体制に移行しているものと推測される。

それを象徴するのが、盆地南部に集中的に築かれたいわゆる古式群集墳である。前節では、埴輪の系統関係に即して、古式群集墳ないしはそれに準する小規模墳からなる墓域での埴輪の受容状況を確認したが、とりあげたいずれの事例においても、古墳群としての自立的・主体的な生産状況を見出すことはできず、外部に製品供給を依存していた状況が明らかとなった。

ただし、奈良盆地南部のA類の生産地が一ヵ所であったかというと、必ずしもそうでなさそうである。四条古墳群や新沢千塚古墳群のA類において主体となる胎土は、鮮明な橙色ないしは乳白色の素地で、やや大粒の石英・長石に加えて褐色くさり礫を一定量含む。これに対して、前述のように池田古墳群のA類では、素地が白～灰白色基調で、風化白色礫や褐色くさり礫に加えて、微量ながら金雲母を含む胎土が主流となる。四条古墳群で主体となるA類の胎土は、高所寺池古墳群のA類、および桜井市櫛向石塚東1号墳の資料と類似していることからも、櫛原市東部から桜井市にかけてのエリアを主な供給範囲とする拠点的生産地の存在を推測することができよう。胎土の違いが直ちに生産地の差に対応するとは限らないが、池田古墳群のA類で主体となる製品は、それとは別の拠点的な生産地から供給されたものである可能性を見込むことができる。

ただしその場合でも、四条古墳群の一部や櫛原市内膳4号墳におけるAa類においても、池田古墳群で主体となると白～灰白色基調の胎土が使用されており、逆に池田古墳群でも少量ながら橙色基調の胎土が確認できることから、両者は排他的な関係にあるのではなく、双方で盆地南部の製品供給を補完し合うような関係にあったものと推測される。白～灰白色基調の胎土を用いる池田9号墳・内膳4号墳では、ともに突帝II群の無調整突帝（断続ナデ技法B）を含む点でも共通しており、同胎土を用いる生産地は櫛原市西部から大和高田市にかけてのエリアを主たる供給範囲としていた可能性が考えられる。

さらに西方の香芝市・葛城市エリアでは、狐城山古墳（本書付論II）や北花内大塚古墳などの王陵クラスの前方後円墳が存在しており、それらの消費を賄うための大規模生産地の存在が見込まれる。高橋克壽が指摘したように、香芝市下田東1号墳と田原本町笠鉢山2号墳の馬形埴輪と馬曳のセットは同工品レベルの共通性を備えており（高橋2007, 2012）、盆地西南部から中央部を含むような広範囲の流通圏の存在が見込まれる。このように、盆地南部のA類については、技法や形態上からは明確に細分できないものの、生産地としてはいくつかの単位に分かれる蓋然性が高い。

これに対して、B類（大和南部型）については、古墳や小地域を超えて技法・形態上の特徴が一致しており、さほど大規模ではない工人集団によって集約的に生産されたものと推測される。ただし、以前に指摘したように、ヘラ記号は紀伊のように波形一種ではなく（廣瀬2011）、少なくとも9種類以上のバリ

エーションが認められる。やはりB類は奈良盆地南部が発祥地であり、前述したようにこの地に定着した渡来系の土器製作集団の関与のもとに創出され、この地を拠点として紀伊や野洲川流域などへ伝播したものと考える。段数の多いものが紀伊で目立つことを根拠に紀伊を中心地とみる理解もあるが（高橋2012、河内2019）、この点に関する批判は後述する。

またその生産体制も、かつて「紀伊型」の展開で想定されたような工人集団が消費地に移動して埴輪を製作する「移動型」のモデル（河内1988）ではなく、製品が流通していたものと考える。A類との共伴例が頻繁に生じていることが明らかになった以上、B類のみを工人移動で説明することは困難といわざるを得ない。B類の生産と流通を考えるには、内藤元太による分布状況の整理が参考になろう。すなわち内藤は、盆地南部でもより南方のエリアでB類単独での出土事例が多いことから、同地がB類の分布の中心でかつ誕生地とみた（内藤2018）。的確な指摘であり、生産地も同じく盆地南端に位置する可能性が高いが、製品流通を仮定した場合、他系統との共伴事例も含めて、絶対量からの視点も重要となろう。やや北寄りの新沢千塚古墳群や四条古墳群では、A類と共にB類の古める割合は高い。一方で、分布の北限に位置する池田古墳群では、8号墳から現状1個体が出土しているのみであり、三倉堂古墳群でも墓域の一角に5個体が限定的に搬入されているに過ぎない。また分布の東限にあたる赤尾崩谷古墳群でも、5基中の1基のみに限定的にB類が搬入されているだけなく、その樹立本数もかなり制限を受けている。同様に西限付近に位置する石光山20号墳では、B類の分布域中央に位置する新沢千塚古墳群と比べて埴輪の樹立間隔が広くなっているが、やはり供給量に一定の制約が生じていた様子がうかがえる。このように地理的勾配にそって出土量が減少する状況は、B類が分布域の中央で生産拠点を構え、一定期間、生産を継続し、需要に応じて製品供給を行っていた状況を裏付けている。

他方、盆地北・中央部では、菅原東窯が広く供給圏を形成する。ただし、現状でも中央部における確実な消費地は大和郡市星塚1・2号墳や水晶塚古墳のみであり、それらが菅原東窯の供給範囲の南端となる。直線距離で約10kmを測るが、その付近がちょうど秋篠川が注ぎこむ佐保川の末端にあたる。從前から指摘があるように（鍛方1992）、菅原東窯の開窯は、秋篠川の水運を利用した盆地中央部への供給を念頭に置く計画的な設置であったことが推測される。

菅原東窯の近郊では、奈良市平城京左京三条一坊二坪（平城第515次調査）検出の古墳周溝SD10416出土埴輪において新たに同ハケ関係が認められ、同窯が遠隔地のみならず近郊の奈良市域にも製品供給を行っていた様子が明らかになりつつある（本書付論1）。古墳周溝SD10416は、中期の埴輪窯である平城宮東院下層窯の目と鼻の先にある。そこに菅原東窯の埴輪が供給されている事実は、まさに古墳時代後期を境にして佐紀東群の巨大古墳周辺から菅原東窯へと埴輪の生産拠点が移転した様子を裏付ける。

ただし平城山周辺では、前述のように白色基調の特徴的な胎土の使用から、菅原東窯のほかにもAc類に対応する生産地が存在する可能性がある。Ac類は、平城山周辺の消費地以外にも、中央部の水晶塚古墳や天理市岩室池古墳、東部の別所古墳群周辺にまで分布圏を広げ、局的には南部の四条古墳群にまで製品供給をおこなっているとみられる。消費地のひとつである奈良少年院古墳が菅原と対比される秋篠の地に所在する点は、未知の窯の所在を推測する上で興味深い。

このほか盆地中央・東部では、南部から連なるAa類の分布圏が広がる。田原本町並鉢山1号墳からはII群無調整突帯を含むAa類の大型品が出土しているが、隣接する2号墳出土の馬形埴輪と馬曳は前

III 奈良盆地における後期の埴輪生産と系統

Tab. 2 奈良盆地の後期古墳における円筒埴輪による階層表象 (廣瀬2019表2に加筆)

古墳名	墳形	規模(m)	段数	系統	階層
(今城塚古墳)	前方後円墳	190	8		王陵
西乘鞍古墳	前方後円墳	118	7	A類	
小墓古墳	前方後円墳	85	7・6	Aa類	
御墓山古墳	前方後円墳	74	6・(5)	Ab類・Ac類	A 前方後円墳
黒田大塚古墳	前方後円墳	70	6+		墳丘長65m以上
市尾墓山古墳	前方後円墳	66	7・6	Aa類・B類	7・6段
別所羅子塚古墳	前方後円墳	57	6	Ac類	
羽子田1号墳	前方後円墳	?	6+		B 前方後円墳
桜鉢山1号墳	前方後円墳	50+	6	Aa類	墳丘長50m以上65m未満
岩室池古墳	前方後円墳	552	6・5	Ac類	6・5段
袋塚古墳	前方後円墳	55	5	Ac類	
珠城山3号墳	前方後円墳	47.5	5		
佐々木塚古墳	前方後円墳	45	5	Ad類	
三宅瓢箪山古墳	前方後円墳	40	5	A類	
水晶塚古墳	帆立貝形	50	5・4	Ab類・Ac類	
石見遺跡	帆立貝形	35+	5・4	Aa類	
星塚1号墳	帆立貝形	37	5?	Ab類	C 前方後円墳・帆立貝形古墳
星塚2号墳	帆立貝形	36	5?	Ab類	墳丘長20m以上50m以下
まるこ山古墳	帆立貝形	30+	5?	Aa類	5・4段
荒巻古墳	帆立貝形	30	5・(7)		
音乗谷古墳	帆立貝形	22	5	Ac類	
寺口忍海D27号墳	帆立貝形	20	5	A類	
石光山17号墳	帆立貝形	25	4	Ab類	
四条9号墳	円	26	4?	A類・B類	
桜鉢山2号墳	円	22	4	Aa類	
小坂里中古墳	円	22	4・3	Ad類	
勝山東古墳	方?	21+	4?	Ad類	
下田東1号墳	方	21	4	Aa類	
内膳4号墳	方	20+	4	Aa類・B類	
観覺寺鳥ヶ峰1号墳	円	19	4	B類	D 円(方) 墳
四条6号墳	円	18	4・(5)	Aa類・Ac類	直径25m前後以下
新沢千塚166号墳	円	18	4・3	A類・B類	4・3段
郷石塚東古墳	円	16.5	4	A類	
新沢千塚175号墳	円	16.5	4・3	B類	
五合瀬古墳	円	15	4		
池田5号墳	円	—	4	A類	
池田8号墳	方	—	4・3	A類・B類	
石光山20号墳	円	14	4	B類	
谷田深谷1号墳	円	15	3	B類	
四条8号墳	円	13.5	3	A類・B類	
赤尾崩谷2号墳	円	12	3	B類	
三倉堂遺跡	—	—	3	B類	

A類は現状、
細分不可のもの

述のように香芝市下田東1号墳と酷似しており、南部から直接の製品供給によってAa類の分布圏が形成された可能性を示唆する。また天理市御墓山古墳では、北部の系統のAc類と南部の系統のAa類が共存しており、両者の流通が盆地中央部で重なり合う状況がみてとれる。

一方で、中央部では、前述のように現状では点的ではあるがAd類の分布が明らかとなりつつあり、中央部域独自の生産地とその供給圏の存在が推測できるようになってきた。さらに、大和郡山市額田部

狐塚古墳や南方古墳における尾張系埴輪の存在、田原本町羽子田6号墳の輪台技法（淡輪技法）を用いた埴輪、三宅町三宅瓢箪山古墳における現状では系統不明のA類の存在は、さらに小規模な生産地が中央部に存在する可能性を示唆している。

なお、D類とした島土塚古墳や牧野古墳に代表される一群の埴輪については、典型的なV群円筒埴輪ではないという以上に特徴が見出せず、また分布も散在する状況であるため、実際のところ系統としてのまとまりを有するかどうかが定かではない。主要な系統の埴輪生産が終焉する時期の所産であることからも、現状では詳しい言及を控えることにする。

(2) 墳丘にみる階層秩序と円筒埴輪の段構成

以上のように、後期の奈良盆地では、各所に拠点的な生産地を設置した上で、消費地の需要に応じて埴輪を多元的に供給する体制が確立する。そうした長距離輸送を含む一元的な生産・流通体制の出現についてには、菅原東窯の発見直後から指摘されてきたことではあるが、本研究ではさらに系統識別やそれにもとづく製品流通の様相を掘り下げる結果、複数の拠点のあるいは局所的な生産地の存在が推測できるようになり、盆地内の生産がより多元的に展開していた様子が鮮明になってきた。従来、こうした後期の生産体制の出現をめぐっては、「断続ナデ技法」によるV群円筒埴輪や石見型埴輪に象徴される通有の「畿内型埴輪」に評価が集中し、そこに「政権の内部組織に属する造墓集団＝土師氏」との関連が見いだされる一方で、それ以外の埴輪については土師氏による再編成の対象外にあった製作集団、すなわち「豪族私有の生産組織」の手によるものとの見方が提示されてきた（難方1992、2003）。あるいは、「恒常に埴輪を供給する集団の固定化、集約化」と表裏で、「埴輪生産集団」の「首長から（の）相対的な自立」を読みとる見解もあり（高橋1994）、とりわけ通有のV群円筒埴輪とは製作技術を越えるB類（大和南部型）については、紀氏影響下の渡来系集団の関与を推定し、「被葬者の出自や系譜を反映した」例外的な供給事例としての評価が付与されてきた（高橋2012）。

しかしながら、そうした一部のV群円筒埴輪（本書分類のAa、Ab類）のみに限定して王権との関係を論じたり、B類に関して過度な自立的展開を論じる見解は、必ずしも当該期の奈良盆地の埴輪生産の本質をいい当てていないと考える。そもそもB類は、消費地でA類と共に多くのB類の展開をそれ単独で評価するのは適切ではない。B類の主たる供給地である古式群集墳では、埴輪の主体的生産の形跡が見いだせず、製品供給を外部に依存していたことは前述した通りである。

そこで視点を変えて、墳丘による階層秩序と円筒埴輪の段構成の関係に着目してみよう。Tab.2は、奈良盆地の後期古墳において、墳丘の形状・規模と円筒埴輪の段構成の双方が判明する事例を整理したものである。一見してわかるように、後期の奈良盆地では、5段以上の円筒埴輪は帆立貝形を含む前方後円墳でなければ認められておらず、また前方後円墳であれば墳丘長に応じて基本となる段構成が階梯式に序列化されている。全体では、墳形・規模と一体で5ないし6段階程度のきめ細かな序列化の存在を見出すことができる（廣瀬2019）。従来から指摘があるように、B類は群集墳中の小型墳への供給事例が多く、大部分が3・4段の小型品であり、またAc類も5段となる事例が多いが、それはあくまでも傾向に過ぎない。市尾墓山古墳では、全形は不明ながら共伴するAa類に対応してB類が大型品として製作されており、また60m級の前方後円墳である別所鍬子塚古墳や岩室池古墳ではAc類が5条6

段で製作されている点は、系統差を超えて一律の基準で円筒埴輪の段構成が序列化されていたことを裏付ける事実として重要である。

(3) 後期における生産体制とその背景

以上のような墳丘の形状・規模と一体の円筒埴輪の段構成による階層表象の存在を踏まえると、一見すると分散化のようにみえる後期の奈良盆地における埴輪生産体制は、盆地内の需要を満たすための生産地の拠点化とその計画的配置の結果にはかならず、決して埴輪生産集団の自立化を意味するものではなかったことが理解できる。盆地各所における拠点的生産地の設置とその運営を通じて、一律に階層的序列化が進行することを踏まえると、むしろ王権はそこに積極的に関与していたものと考えざるを得ない。

翻ってそうした埴輪の生産体制の変化の背景となる古墳の築造動態に目を転じると、古墳時代後期の開始は、佐紀古墳群や馬見古墳群のような特定の巨大な墓域に限定して階層構成型古墳群を造営する中期的な古墳秩序の解体と表裏の関係にある。それと同時に本来的な地縁的結合にもとづいて墓域が個々の本貫地に分散回帰し、さらには古式群集墳の造営が一齊に開始されることが指摘できる。こうした造墓原理の変化は、一見、規制からの解放のようにも映るが、実際には小地域単位での古墳秩序の形成、換言すれば王権によるより緻密な地域、集団支配の浸透を意味していたものと考えられる。埴輪生産拠点が盆地内の各所に計画的に配置されていく動きもこうした王権による新たな政治秩序の形成と不可分であったのである。

後期の埴輪生産体制にみる政治的評価に関しては、本書でいうA類、すなわちV群円筒埴輪の展開を通じてこれまで論じられてきており、また、そこには絶えず王権内の造墓や葬送を取り仕切る土師氏の姿が投影してきた。かかる立場からは、B類のようなV群の製作技術をもたないローカル色の強い埴輪にまで王権の関与を見出す理解には違和感があるのも確かである。実際にその生産集団自体は、鍾方や高橋がいうように、王権直轄ではなく奈良盆地南部の豪族層が私有する組織であった蓋然性が高い。しかしながら、そうした豪族層も王権の構成員として古墳の政治的秩序に組み込まれた存在であったことも確かである。そして、鍾方も指摘するようにA・B類の共伴事例の存在は、B類の生産集団もまた王権直属の造墓組織である「土師氏」と連携して埴輪生産を分担・補完する立場にあったことを如実に示している。

埴輪生産にみる部民制内部の構造的理解についても、これまでは文献史学による「土師氏」研究のイメージが過度に意識されるあまり、「土師連ー土師部」のような直接的な組織編成や技術的指導のみが注目されてきた。そこから外れるローカルな埴輪を直ちに豪族層の私的関係に置き換える図式は、V群の埴輪を公的に評価し過ぎた反動ともいえる。むしろB類の展開からは、必ずしも直接的な組織編成や技術的指導をともなわない王権への労働奉仕のあり方が存在した可能性が示唆される。さらには、奈良盆地におけるB類の展開が、工人の巡回ではなく製品供給を基本とするという本書の検討成果を重視するならば、それは厳密には労働奉仕よりも貢納という側面から評価されるべきかもしれない。いずれにしても、B類の展開過程に関する評価は、従来の埴輪生産における部民制の理解を相対化し、新たな視座を導き出す上で重要な鍵を握る。この点については、次章以降であらためて触ることにする。

IV 王権・地域間における後期埴輪の展開と系統

ここまで後期の奈良盆地における埴輪の系統関係、生産・流通体制について、現状で可能な限り詳しく述べてきました。本章では、それが隣接地域や遠隔地の埴輪の展開といかなる関係を有するのかについて、簡単に検討しておきたい。

1 A類の展開と古市古墳群

通有のV群円筒埴輪にあたる本書A類は、中期のIV群円筒埴輪の技術系譜上に位置するもので、かつIV群からV群の変化は極めて連続的であることは前述した通りである。IV期末からV期古相段階において、王陵の造営が継続する古市古墳群と奈良盆地では、奈良盆地において底部調整の内面ケズギがやや目立つ点を除くと、埴輪の特徴に大きな相違はなく、中期以来の両地域間における様式構造の一体性が維持されているといえる。

その後、V期中相頃から奈良盆地内ではA類の系統分化が進行するが、II群無調整突窓（断続ナデ技法B）は古市古墳群やその周辺の河内地域にも分布が集中しており、從来から同技法の発信源のひとつとして理解されてきた。奈良盆地南部および中央部に展開するAa類の分布圏は奈良盆地内で完結するのではなく、古市古墳群周辺と一体のものである点は間違いない。Aa類の一体性は奈良盆地でA類が系統分化し始める以前からのものであり、その関係は埴輪生産の終焉まで維持されたとみられる。

さらに長期的にみれば、大和川の流れを介した両地域間の親密性は、古墳出現期の庄内形窓の分布や展開、前期中葉段階における纏向遺跡や西山古墳、古市古墳群中の赤子塚古墳下層におけるI群極狭口縁の共存、前期後葉段階では上ノ山古墳と萱振1号墳におけるII群円筒埴輪の類似などとも響きあう。後期に系統分化をとげた後のAa類の分布が盆地南部を中心とする点は、この地域の勢力こそが古市古墳群周辺と本質的に一体性を有する集団であった可能性を示唆しているよう。

2 B類（大和南部型）の隣接地域への展開

既に指摘があるように、B類（大和南部型）は紀伊・紀ノ川下流や近江・野洲川流域においても一定の分布圏を形成しており、南山城や播磨の一角にも類似資料が点在する。なかでも紀ノ川下流域は、B類が分布する奈良盆地南部と地理的に直接連なる地域であり、從来からその創出・生産主体をめぐって論争が続いている。

前述のように、本書では盆地南部に濃密な分布圏が存在することに加え、少なくとも9種類以上におよぶヘラ記号の存在からも一定規模の生産集団の存在が見込まれ、拠点的生産地を構えての生産・供給関係が復元できること、さらにはB類を創出し得る技術系譜上の背景として回転ヨコハケを多用する渡来系土器製作集団の足跡が辿れる（中野2010）ことから、B類は奈良盆地南部で創出され、この地を中心とした生産地として機能していた可能性が示唆される。

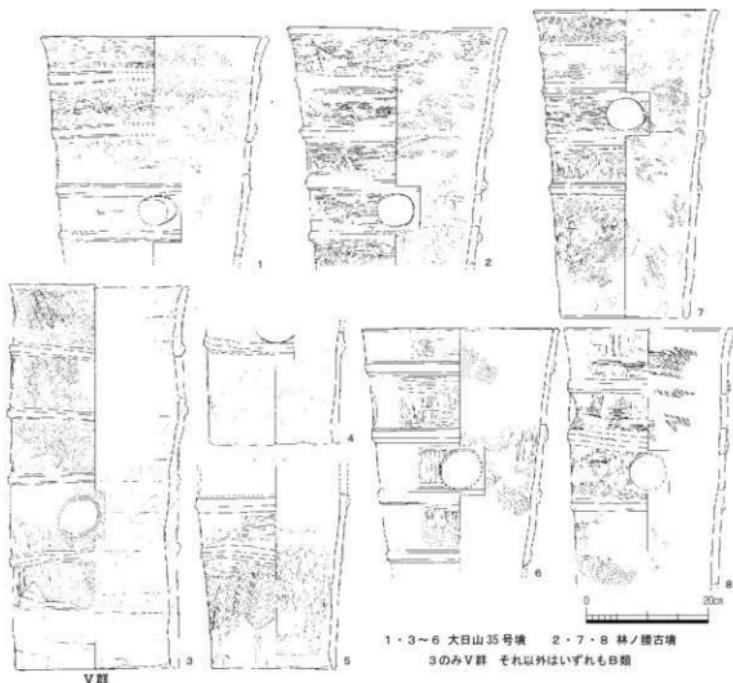


Fig. 27 大日山35号墳と林ノ腰古墳の埴輪 1-8

心として生産され、各地へ波及したと考える。

紀伊中心説の拠り所である段構成の多寡については、前述したように系統とは別の論理からなるもので、主たる根拠とはならない。むしろ、紀伊地域の大日山35号墳や大谷山22号墳で4条5段とみられるB類が出土している点は、両古墳に供給されたV群円筒埴輪に段構成を一致させたものとして捉えることができる(Fig. 27)。同様の現象は奈良盆地内の市尾墓山古墳においても生じている。加えて注意を要するのは、奈良盆地の基準に照らし合わせるならば、大日山35号墳の86m、大谷山22号墳の68mの埴丘長に対しては、7ないし6段構成の埴輪が供給されて然りであるが、実際にはそれよりも1・2段低い評価となっている点である。埴丘長90mの前方後円墳である野洲市林ノ腰古墳における4条5段のB類の樹立も(Fig. 27-7)、紀伊と同様の現象としてして理解できる。この点からも、B類の展開における地域側の主体性を過度に強調することはできないと考える。

では、B類が奈良盆地南部を拠点にこうした隣接地域に波及する背景はどのように理解したらよいだろうか。前述のように鐘方は、B類の生産集団を奈良盆地南部の豪族による私有組織とみた上で、その豪族層を建内宿攝後裔氏族(波多・巨勢・麻我・平群・紀・葛城)に比定し、その配下の埴輪工人の一部が

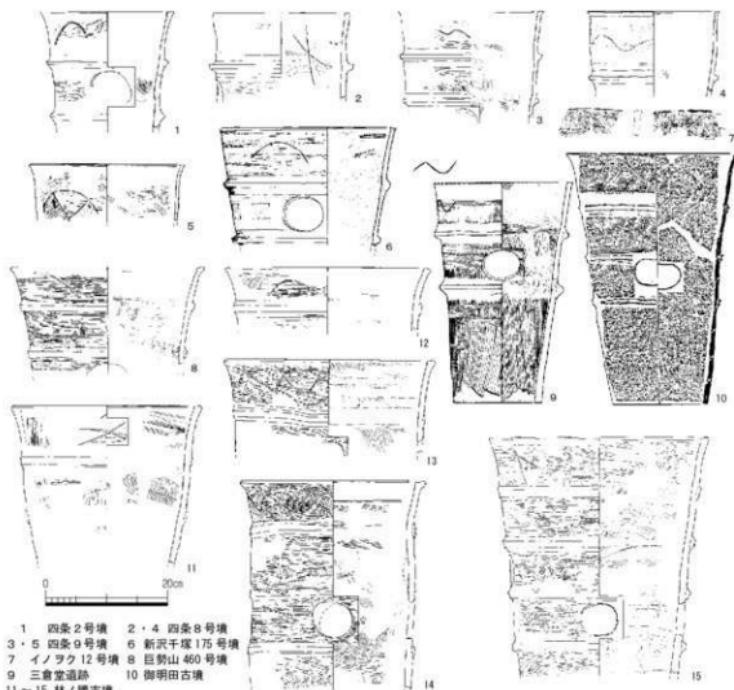


Fig. 28 B類（大和南部型）のヘラ記号：1-8

同祖同族関係を有する各地へ移住することで同系統の埴輪が拡散することになったと理解する（辻方2003）。辻川哲朗も鐘方の指摘を支持しつつ、市尾墓山古墳の被葬者は巨勢男人、林ノ腰古墳の被葬者を近江毛野臣とみて、林ノ腰古墳におけるB類の採用に「縦代期の政権中枢を担った有力豪族間のネットワーク」の存在を見出す（辻川2010a・b）。

鐘方や辻川の指摘は、文献史学の成果との整合性がみられる点で魅力的な解釈といえるが、両者とも盆地南部から紀伊あるいは野洲川流域への工人移動を想定する。これに対して筆者は逆に、同祖同族的な結合関係を有する周辺地域から奈良盆地南部へ製作者が上番し、一定期間製作に従事した後に帰郷した可能性を考える。製作者の移動の方向性を実証的に見極めることは難しいが、前述のようにB類は、多数のヘラ記号の存在からも奈良盆地南部において生産拠点を構え、一定規模の生産組織のもとで恒常的に製品供給をおこなっていた可能性が高い。製作者の他地域へ一方的な流出は、そうした恒常的な生産体制の存続を困難にする。むしろ、同族的結合関係にある地域から労働力を動員することで生産体制を維持していたものと推測される。

なお、紀ノ川下流域では、これまでのところヘラ記号は波形の一種しか確認されていないが、この点は奈良盆地南部における波形のヘラ記号を描く生産単位へ限定的に上番・出仕した結果を反映したものと考えられる。一方、野洲川流域の林ノ腰古墳では、4種のヘラ記号が確認できるが、奈良盆地で未確認のものは1種で、残りの3種はいずれも奈良盆地に同じものが存在しており(Fig. 28)、おそらく未確認の1種も将来的には奈良盆地で発見される公算が高い。林ノ腰古墳で多くのヘラ記号が存在するのは、V群系埴輪を補完する紀ノ川下流域のあり方とは異なり、埴丘長90mの林ノ腰古墳のみならず、御明田古墳をはじめとする周辺古墳のB類を体系的に生産しているためであろう。いずれにしても、こうしたヘラ記号の一一致は、上番・出仕時に帰属した奈良盆地南部での各生産単位との具体的な結合のあり方を如実に物語っている。

また、紀ノ川下流域と野洲川流域のB類では、4条5段の大型品として製作される場合に、透孔は2～4段目の各段に穿つではなく、2・3段、ないしは3・4段のいずれかに2孔を直交して配置する原則が認められる。つまり3段分を連続穿孔できるだけのスペースが存在するにもかかわらず、なぜか2段目か4段目を無孔とするルールが遠く離れた両地域で共有されていることになる(Fig. 27)。その意味は理解しかねるが、やはりその情報の発信源は奈良盆地南部の拠点的生産地にあったとみて間違いない。

さらに、B類の焼成は軟質で局所的な黒斑を有することから、野焼き焼成による蓋然性が高いことは前述した通りであるが、この点も奈良盆地南部・紀ノ川下流域・野洲川流域の三者とも同様である。その上で、和歌山市平井埴輪窯では1号窯において通有のV群円筒埴輪に混じってB類が共伴することが確認されている点が注目される。本来、窯窯焼成技術を保持していなかったB類の製作者が、紀ノ川下流域に帰郷後、一時的にV群系埴輪の生産集団に自らの製品の焼成を依存していた状況をうかがうことができ、興味深い。

以上のように、奈良盆地のB類の生産体制は、同族的結合を通じて他地域から労働力の提供を受けることで維持されていたとみられる。先に奈良盆地におけるB類の展開について、工人の巡回ではなく製品供給が基本とみられることがから、王権への労働奉仕よりも貢納という側面からの評価の可能性を指摘したが、その貢納体制を支える労働力の一部を他地域の勢力にも負担させていたものと推測される。結果的にそこで製作技術を体得した工人が本貫地に帰還し、そこで埴輪生産に従事することで奈良盆地以外の地域でも局所的にB類の埴輪が出現することになったと考えられる。B類の場合、後に「土師氏」と称される王権直属の生産集団とは直接的な関係をもたずに、奈良盆地南部の豪族層のもとで埴輪生産に従事していたとみられるが、その製品が特定豪族の支配範囲を超えて奈良盆地内の需要の一部を分担していることを踏まえると、その埴輪生産体制は単なる豪族層の私的関係に帰るものとは考え難く、間接的には王権への奉仕体制の一環をなすものであったと捉えるべきであろう。すなわち、B類にみる埴輪生産体制も、部民制の構造のもとでの王権への奉仕の一実態を反映しているものと理解される。

3 Ac類の隣接地域への展開

本書の奈良盆地における後期円筒埴輪の系統識別では、従来、菅原東窯を中心に単一的に捉えられてきた奈良盆地北部の系統において、あらたにAc類の存在を見出せた点を特筆できる。前述のようにこのAc類は、奈良盆地中央・東部、局的には南部の四条古墳群にまで分布がおよぶが、一方で、隣接地域の南山城地域や乙訓地域でも、このAc類が濃密に分布する。具体的には、平城山丘陵の北端に位置する木津川市音乗谷古墳のほかにも、城陽市冴山1号墳、宇治市坊主山1号墳、長岡京市塚本古墳、同舞塚1号墳、同井ノ内車塚古墳、京都市芝古墳、向日市中ノ段古墳などでAc類が受容されている。この地域では、宇治市旦椋遺跡のB類、京田辺市堀切7号墳や宇治市五ヶ庄二子塚古墳などの尾張系埴輪など、異なる系統の埴輪もモザイク状に流入するが、V群円筒埴輪の大部分はAc類であり、物集女車塚古墳にみるAa類の流入は極めて特殊な事例といえる。

従来から南山城地域のV群円筒埴輪については、断続ナデ技法Bを採用しない点に加えて、石見型埴輪や陶棺などの共通性から、奈良盆地北部との親縁性が指摘され、その影響元となる生産拠点として菅原東窯が位置づけられてきた（鍾方かほ1995、鍾方2003・2017）。近年、村瀬隆もこの見方をさらに発展させ、菅原東遺跡を基軸とする石見型埴輪の変遷をもとに、その地域性がおよぶ「大和北部～山城南部地域」の範囲を「菅原東系石見型埴輪共有圏」とよぶ（村瀬2018b、2019）。

しかしながら、本書分類のAc類は、前述のように透孔配置や細部の技法的特徴において菅原東窯を中心とするAb類とは明確に区別されると考える。菅原東窯出土の貼付口縁は、貼付押圧口縁とは異なり、ユビオサエ痕跡が不明瞭で総じて平滑に仕上げられている点もその一例である。さらには、音乗谷古墳や冴山1号墳、塚本古墳などのAc類に伴う石見型埴輪は、形象部上辺を粘土帶で加飾し、また形象部下辺の隅を頻繁に切り欠く特徴があるが、これまでのところ菅原東窯ではそうした特徴をもつ事例は知られていない。底部突帯も、底部下端にユビオサエ痕跡を残して粘土帶を貼る鍾方b類はみられず、底面よりやや上位に通有の突帯を貼る鍾方a類の破片が多数出土しており、やはりAc類とは特徴を異なる。菅原東遺跡の石見型埴輪は、むしろAa類に共伴する石見型埴輪との親縁性を有しており、おそらくA類が系統分化する以前の特徴を維持・継承しているものと推測される。

このようみてくると、南山城や乙訓地域に対して直接影響を与えたのは菅原東窯ではなく、平城山丘陵周辺にあった別の生産地であったと推測される。前述のように平城山北端に位置する音乗谷古墳を含む奈良盆地の資料では、白色基調の独特の胎土の使用がしばしば確認できるが、南山城や乙訓地域のAc類の胎土は古墳ごとに相違が認められることから、一元的な製品供給ではなく、工人の移動により分布圏が形成されているものと推測される。おそらく各所から製作者が平城山周辺の未知の窯に勤員され、埴輪生産に従事することで製作技術を身に付け、その後、帰還して各古墳の埴輪生産に従事したものと考えられる。

こうしたAc類の北方への展開は、盆地南部におけるB類が盆地内へ製品供給を展開させつつ、西方の紀伊にも分布圏を形成していく動きと対比的に捉えることができよう。盆地北部と南山城の親縁性の背景についても、既に鍾方が同地域と和爾氏の勢力基盤が重なる点を指摘している（鍾方2003）。擬制的同族集團としてのワニ氏の勢力圏は、奈良盆地東北部や近江にも広がりをみせるが（加藤謙2013）、Ac類

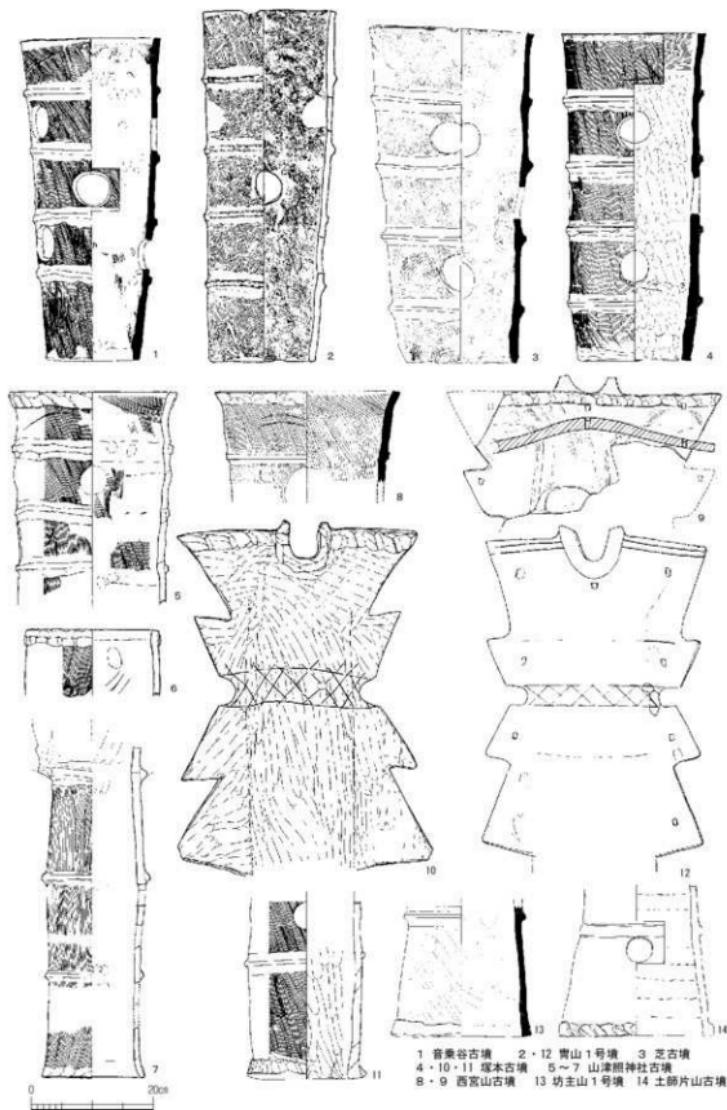


Fig. 29 他地域におけるAc類の事例 1~8

が天理市北部において一定のまとまりをみせる点や、近江板田の塚の越古墳や山津照神社古墳にAc類が伝播している状況はあながち偶然とはいい切れないところがある。さらに高島市鴨籠荷山古墳の埴輪は、全体像は不明ながら、底部調整の板オサエは底面を完全には潰すには至らず、突端もAc類的な高い突出をもつ。高島から日本海へ抜けるルート上に位置する若狭・下船塚古墳と日笠松塚古墳の埴輪がAc類の特徴を備えることから、鴨籠荷古墳の埴輪もAc類に属す蓋然性が高いだろう。このようにAc類は、南山城や乙訓にとどまらず、近江各所にも分布がおよんできたり、奈良盆地北部から広範囲に達なる擬制的同族関係とそれを介した製作者の勤員体制がその背景にあるものと推測される。

このほかにもAc類は、たつの市西宮山古墳、姫路市土師片山古墳、松山市播磨塚天神山古墳、松山市土塙原V遺跡など、西日本各地へ点的に伝播している。これらは地域内で分布域を形成しないことからも、奈良盆地北部の生産拠点への上番を通じて、それぞれ個別に伝播したものと考えられる。Ac類は、V群円筒埴輪の諸系統のなかでも特徴の把握が容易で、その分、他の系統よりも伝播の実態を把握しやすいのが実情であり、実際にはそのほかの系統のV群埴輪も、Ac類と同様の構造を通じて各地へ伝播しているものと考えられる。それら諸系統の展開を詳細に紐解いていくのが今後の課題といえる。

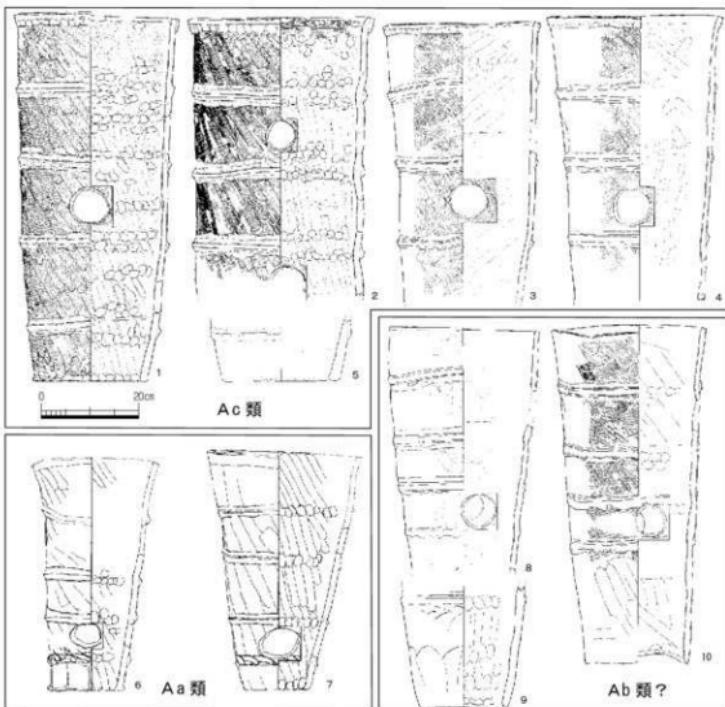
V 結語

本研究では、古墳時代後期の王権中枢部の埴輪生産・供給体制を今日的な研究水準にもとづいて復元すること主たる目標とし、突帯製作技法と底部調整技法の再検討を主軸とする後期（V群）の円筒埴輪の成立過程とその変遷、奈良盆地における系統識別とその展開、王権・地域間における諸系統の展開とその背景等を再検討してきた。結果的に、本研究課題のタイトルにかけた「6世紀の埴輪生産からみた部民制の実証的研究」とは、ほど遠い内容となってしまったが、埴輪生産から部民制の実像に迫る上で重要となる考古学的な所見や着眼点について、これまでにない精度で提示することができたと考える。とりわけ、6世紀代の奈良盆地における埴輪の系統分化の実態や、その背景となる生産体制の計画的配置と製品流通に対する本書の認識については、今後、埴輪生産から部民制の研究を遂行する上での基本的枠組みとなるものと自負する。

とりわけ、埴輪生産を通じた王権・地域間の工人移動が上番・帰郷型を基本形態としていたとする本研究の見解は、中央の「伴造」氏族が地方から出仕してくる集団を「部」として編成することで王権への奉仕が実施されたとする文献史学における部民制の理解とも整合する。実際には、工人・製作者の移動を介する埴輪の直接的な伝播は確認できても、そのベクトルの方向を見極めるのは容易ではないが、この点は王権中枢部外の各地域への埴輪伝播のあり方が状況証拠として重要な役割を果す。摂津・猪名川流域（和田2005）や播磨・明石川流域（廣瀬2017）など王権の周縁部では、古墳時代後期に王権中枢部との関係で新たな埴輪製作の情報を受容するが、その場合でも地域内に拠点的生産地が形成されず、埴輪の特徴が古墳ごとに個性を帯びるケースが多く、先にAc類の事例として取り上げた播磨塚天神山古墳の所在する伊予・松山平野でも同様の現象が見出せるのである。

松山平野では播磨塚天神山古墳や土壇原V道にみるAc類のほかに、三島神社古墳ではⅡ群無調整突帯（断続ナデ技法B新）を採用するAa類、砥部遺跡では底部調整にタタキを施す特徴的なV群系埴輪の存在が知られ、さらに播磨塚天神山古墳ではAc類以外にも透孔が段階直交配置となる別系統のV群系埴輪が共存する（Fig.30）。こうした地域内において各系統がモザイク状に錯綜する状況は、地域内の諸集団が王権中枢部の異なる生産拠点とそれぞれ個別に結びつき、埴輪製作に関する情報を入手した結果と考えられるが、その一方でこの時期、列島各地で急増するV群系埴輪を樹立する各古墳に王権から個別に指導工人が派遣される状況は想定しがたいところである。以前から注目されているように、高槻市新池廬から出土した関東系の土器の存在は、上番型の工人移動を間接的に裏付けている。

そうした上番・帰郷型の工人移動は、部民制の成立時期とされる6世紀に突如としてはじまつたかというと、そうではないと考える。むしろ、古墳時代開始当初から、王権・地域間の人的移動は上番を基本としていたものと考える。前・中期の王権中枢部の巨大古墳群の周辺において出土する外来系土器の存在は、巨大な前方後円墳の造営に列島各地から多くの人々が動員されたこと示唆する。また、製作技術に関する情報が忠実に伝播している一方で、同一古墳群内でも古墳ごとに形態や技法細部の特徴が異なる前期古墳の埴輪も伝播の基本構造は上述の後期の場合と同様であったとみられる。



1・2 土塙原V遺跡埴輪柱 3～5・8～10 摂磨塚天神山古墳 6・7 三島神社古墳

Fig. 30 松山平野における各種系統の混在状況 1-10

この点に関しては、文献史学において部民制研究をリードしてきた鎌田元一の指摘が思い出される。すなわち鎌田は、部民制の歴史的前提を「トモ制」と理解した上で、「トモ制」とは、原初的には個々のアジア的共同体内部における首長への奉仕役に由来し、それがヤマトの王を首長とする政治的統一体（大和政権）の職務分掌組織に発展したものと考えられる。したがってその始源は古く、おそらく王権の発生と同時にまでさかのばるものであるが、実際またはそれは「トモ」集団の王権に対する人格的な隸属関係を本質とする極めて原始的な統治方式なのであって、けっして五世紀にいたってはじめて成立するような性格のものではない」と述べる（鎌田1984b）。「アジア的共同体」や「隸属関係」といった唯物論的な概念は置くとしても、部民制＝トモ制の淵源を王権の出現期にまでさかのばらせる鎌田の主張は、桜井市纏向遺跡における大量の外来系土器や同市城島遺跡における東海系曲柄平鉢出土の背景を考える上で示唆に富む。

このように古墳時代開始当初から恒常的であった上番・帰郷型の勤員体制が、やがて規模や対象エリ

アを拡大し、制度化されていった姿が部民制の実態であった蓋然性が極めて高い。鎌田は、厳密には部称の成立は6世紀に下るもの、部民制の実質は5世紀後半の雄略朝には形成されていたとみる（鎌田1984b）。埴輪生産を通じて確認できるのは、手工業や労働奉仕全般のあり方ではなく、古墳築造にかかる特殊労働行為の一端である点には注意を要するが、部民制の形成と後期の埴輪生産体制の確立が概ね対応する点があらためて注目される。

ただし、近年の文献史学では、類似した支配体制である「人制」との比較のなかで、従来の部民制の枠組みが相対化され、両者の間に時間的、質的变化の存在が見出されている。すなわち、「人制」とは、王権と関係を結んだ人々が上番奉仕する体制であり、王権が掌握するのは上番者のみとされる。これに対して、部民制は、上番した人物を編成するのではなく、首長層（伴造）を結節点として在地民衆層までを王民として支配対象とするもので、両者は支配の性質が異なるとされる（溝口2015、堀川2017など）。こうした近年の理解に従うならば、本書が復元する埴輪生産体制は「人制」ないしは「プレ部制」とよばれる構造に近いといえるかもしれない。

残念ながら現在の考古学では、そうした文献史学で議論されるような「人制－部民制」の質的差異を見極める段階には至っていない。そもそも、堀川徹が指摘するように、「人制」にしろ、「部民制」にしろ、「記」「紀」から復元される内容は、王権が「人制」や「部民制」の構造をどのように認識していたのかという点が第一義であり（堀川2017）、そこには地域側の実情や構造の全体像が必ずしも反映されていない可能性を十分考慮しておく必要がある。実際に考古学的に認識し得る上番・帰郷型の生産体制では、動員される製作（労働者）は上番時には王権の支配下に帰属するものの、帰還後は再び在地首長下での労働に動員されることになるため、この二重の支配関係を広義の部民制研究にどう反映させていくのかが課題となる。議論を進展させるためには、工人や製作者の動向をさらに詳細に復元する必要があるが、そのためには近年、埴輪研究において飛躍的に深化をとげている同工品・生産組織分析をさらに徹底して実施する必要があろう。王権中枢部と周辺地域間で、同一系統にある類似する埴輪群を対象に分析を実施することで、両者の工人編成の規模や質、構造の差異が明らかとなり、ひいては工人の中央への出仕や地域への帰還、あるいは製品自体の貢納といった、まさに想定される部民制の実態に迫る成果が得られるものと期待できる。

ただし注意を要するのは、過度に部民制を意識して「土師連－土師部」の構造のみに目を奪われることで、実態や本質を見失う危険性についてである。前述のように、従来の埴輪生産の議論では、通有のV群埴輪を「土師氏」の埴輪として公的に捉えるあまり、それ以外の埴輪の生産・流通事例に対しては、王権から距離をおく豪族・氏族間の私的関係の中で評価し過ぎてきたきらいがある。しかしながらそうした文脈では、B類（大和南部型）が豪族層のもとで独自の製作技術と生産体制を確立させながら、一方で奈良盆地南部の製品供給を分担していた事実やその背景を適切に評価することはできない。通有のV群の製品流通を補完するB類のあり方には、間接的にではあれ、王権への奉仕の一環という側面を見出さざるを得ないのである。

もとより文献史学による部民制の議論では、従前より、大伴氏や蘇我氏のような王権下の有力豪族による部民の「私有」も「彼らが王権の臣・連であることにおいて可能」だったことがと論じられており（狩野1970）、王権と有力豪族による部の重層的な支配にこそ王権の性格や部民制の特質が見出されてき

た。鎌田も同様に「部とは王権への従属・奉仕の体制、朝廷の職務分掌の体制なのであり、単に狹義の伴造のみならず、蘇我氏や大伴氏が蘇我部や大伴部を所有しうるのも、彼らが倭政權の臣・連として朝廷組織の中にその位置を占めているからに他ならない」と述べる（鎌田1984a）。こうした部民制の重層的構造は、大局的には後に「土師氏」と称されるようになる集団が主導した埴輪生産においても例外ではなかったと考えられる。

繰り返すように埴輪生産は、古墳時代の手工業一般の姿ではなく、あくまでも古墳造営事業における特殊労働であるが、翻って様々な職種・労働奉仕からなる部民制全般に目を転じれば、古墳時代後期（5世紀後葉）に奈良盆地南部で一斉に出現てくる古式群集墳こそが、王権による部民制支配の発生と密接な関係にあることが推測される。古式群集墳については、王権を支えた有力氏族の共同墓地、あるいは渡来系集団の掌握に関わるものとする理解がある一方で、武具・農工具・鉄滓・鍛冶具など特徴的な品目の副葬行為にもとづいて、特殊技術や職掌を通じて掌握された被葬者集団の存在を見出す見解もある。もとよりそうした新來の技術や知識の確保が渡来系集団の掌握の目的のひとつであったならば、古式群集墳の被葬者には伴造や部として編成された集団が含まれていた可能性は十分にあろう。仮にこうした古式群集墳の発生が部民制の成立とも密接な関係にあるのであれば、そこへの製品供給を念頭において編成された後期の埴輪生産集団は、部民制支配を視覚化する古墳群造営にかかる労働奉仕を通じて、結果的に自らも部民制の枠組みに組み込まれていったことになる。ここでもまた、別の角度から部民制の重層的関係が見出されることになるが、部民制とはまさに、こうした王権と有力豪族層、各種労働奉仕に基づく組織編成との関係が複雑に絡み合う重層的な支配構造であったことが了解されよう。

以上、やや蛇足が過ぎたが、本書の結語として、本研究課題の成果と文献史学における部民制に関する議論との整合化の可能性について論じてきた。本書が長らく停滞してきた部民制に関する議論を考古学・古代史の双方において再び活性化させる契機となり、今後の埴輪生産に関する研究の指針をある程度示すことができたとすれば、本研究の方針の目的は達成できたものと考える。

付論 I 三次元計測による埴輪の生産・流通状況の検証

—菅原東窯産埴輪の流通をめぐって—

1990・91年の奈良市菅原東窯の発見と調査は、古墳時代後期における王権膝下の埴輪の生産・流通状況に対する理解を飛躍的に深めた（奈良市1992a・b）。調査後の検討では、同窯の円筒・形象埴輪の基礎的情報が提示されるとともに、奈良盆地内における当該期の埴輪の集成と系統識別、および胎土分析が実施され、その成果にもとづいて同窯の供給範囲の推定がなされた。その結果、盆地中央部の天理市星塚1・2号墳が供給先の有力な候補の一つとして浮上した。これにより、菅原東窯が少なくとも10km離れた遠隔地をも供給対象とするような拠点的な生産地であったことが推定できるようになり、遺跡名が示すようにその地が「土師氏」ゆかりの場所であったことも相まって、「単なる地方窯ではなく、政権の内部組織に属する造営集団と密接に関連した存在」としての同窯の性格が見出されるに至った（鍛方1992）。

その後、星塚1・2号墳に程近い大和郡山市水晶塚古墳からも、菅原東窯に酷似する埴輪が出土し、蓋然性の高い菅原東窯の消費地として注目を集めに至った（坂編2006）。しかしながら、菅原東窯とこれらの消費地をつなぐ根拠は、形態や製作技法上の視覚的な類似性によるところが大きく、それを補強するものとしての胎土分析の成果も、菅原東窯以外の窯が未発見の現状においては必ずしも絶対的とはいえず、奈良盆地内の埴輪の生産・流通状況の解明には課題も多く残されてきたといえる。事実、その後の奈良県内では、長距離供給をおこなう菅原東窯の性格が過大に評価されることにより、盆地南部域の埴輪に対しても菅原東窯からの一元的な供給の可能性を想定する声も聞かれてきた。

こうしたなかで、生産地と消費地をつなぐ確実性の高い考古学的根拠を提示したのが田中智子である。田中は、菅原東窯から出土した円筒埴輪に対してヘラ記号を手がかりに分析し、ヘラ記号を共有する製品が生産時の一定のまとまりある単位であったことを確認した上で、特定のヘラ記号を記す製品が水晶塚古墳に集中的にもたらされている事実にもとづいて、拠点的生産地における恒常的な生産下では、生産時の単位が乱されることなく搬出され、そのまま中小古墳の消費単位となっている状況を的確に指摘した。また、主だった製品が供給された後の廃棄品のみが出土する生産地の資料的限界に対して、逆に消費地である水晶塚古墳において同品分析を実施することによって、同一のヘラ記号を記す製品群の中にも少なくとも11以上の製作グループの存在が見出せること指摘し、当該期におけるヘラ記号が組織編成上の理由だけでなく、むしろ製品管理上の単位に対応して記された可能性を説いた。こうした生産地と消費地の間に横たわる諸関係を詳細に紐解いた上で、菅原東窯－水晶塚古墳－星塚2号墳の間で共有される同一のハケメバターンを見出した。ここに、両古墳の製品が菅原東窯産である決定的な証拠が示されたことになる（田中2013）。

ただし、水晶塚古墳において田中が証明した菅原東窯産の確実な埴輪は、田中分類のA類に限定される。もう一方のB類について田中は、同一古墳の一括資料という脈絡を重視して同じく菅原東窯産と理解したが、本書の系統識別では田中B類はAc類となる。すなわち田中B類は、Ab類である菅原東窯の製品とは系統を異にするというのが本書の立場であり、当然、生産地も異なると理解する。田中の分析に

おいて、AとB類、および菅原東窯とB類の間でヘラ記号やハケメバターンの共有が全く確認されていない点は、田中B類（=Ac類）が菅原東窯産ではないことを傍証する成果として再評価することができよう。

さて、田中は上記分析成果を開陳する際、実測図やハケメバターンの提示に拓本を駆使した。線画による実測図では実測者の描き癖の方が際立つため、同工品識別の結果の提示にはあまり有効ではない。これに対して、拓本は埴輪表面の痕跡を客観的に写し取るため、工人の作り癖を提示するのに適している。また、実測図への掲載を念頭においていた拓本採取は、同時に広範囲のハケメバターンを迅速に手中に収めることにもなるため、同一個体内のハケメ工具の変化（正逆反転を含む）の可能性にも留意した分析が可能となる。一方で、ハケメバターン細部の凹凸や立体感を提示する上で、拓本では限界があるのも事実である。

そこで注目するのが、今日ではもはや一般化した感が強い三次元計測である。とりわけ、デジタルカメラの画像を用いて三次元モデルを作成するSFM-MVSの普及は、三次元計測を身近なものとし、考古学各方面において幅広く活用され始めている。本研究でも、埴輪の特徴を客観的に提示でき、かつ一度作成したモデルのあらゆる部位からハケメバターンの立体的画像を抽出できる利点を重視し、とりわけ上記の菅原東窯埴輪であることが確実視される生産地・消費地資料に対して、重点的に計測作業を実施することで、三次元モデルから製品間の関係を検証することとした。田中が提示した菅原東窯、水晶塚古墳、星塚2号墳の同ハケ資料に加え、実見の結果、菅原東窯産の可能性が見込まれた平城京左京三条一坊二坪（平城第515次調査）検出の古墳周溝SD10416出土資料に対してもあわせて三次元計測を実施し、モデル作成をおこなった（Fig.31・32）。

Fig.33は、作成した三次元モデルから該当資料のハケメバターンをオルソ画像として抽出したものである。これら一連のハケメバターンは、向かって右側に2mm前後の幅広の条痕が4本連続する点、そのすぐ左の2本がやや幅狭で2本の間の夏材部が細く鋭く器面を抉る点、さらにそこから10本左に極細の条痕がある点を特徴とする。各資料間で基本パターンはよく一致しており、これらは同一材から取り出された年輪パターンを共有する工具の痕跡とみてよからう。しかしながら、各パターンの条痕幅や断面形状には細部で相違もある。したがって、提示した各パターンは必ずしも同一工具の同一部位の擦痕ではなく、多くは同一木材から作出された兄弟工具の関係にあるものと考えられる。

周知のとおり、ハケメ工具は同一工具においても表・裏・先・元の計4面の使用が可能であり、加えて同一木材から複数の工具が作成されている場合、同一のハケメバターンを残す部位はさらに増加する。同一木材から作成された工具であっても、完全な同一部位でなければ、年輪のわずかな間隔差に起因してハケメバターンには微細な齟齬が発生する可能性がある。また、木目の消耗度合いも工具や部位ごとに異なって然りであり、ハケメの断面形状にも微視的な相違が生じる場合が想定される。実際に、Fig.33-6や10では、パターン右寄りの幅広の条痕が続く部分において、本来の蒲鉾形の凸部が失われ、凹部の幅が広くなっている。おそらく、工具は追糞目に木取りされており、使い込みにより年輪間隔が広い右寄りのパターンの春材部分がすり減った結果、夏材部の露出範囲が広がり、それが器面を広く搔き取ることで当該部分の凹部幅が広がったものと推測される。

以上のハケメバターンの状況を踏まえた上で、埴輪そのものの同工品レベルでの共通性や相違につい

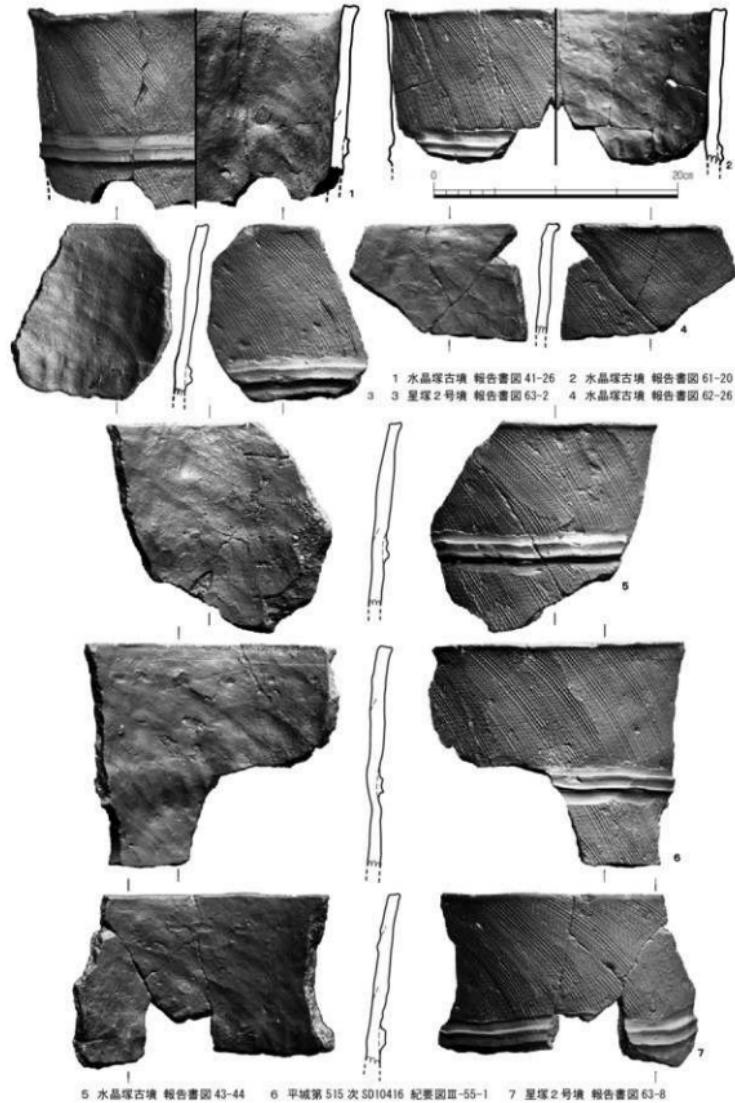


Fig. 31 菅原東窯産埴輪の三次元モデル画像 1 : 4

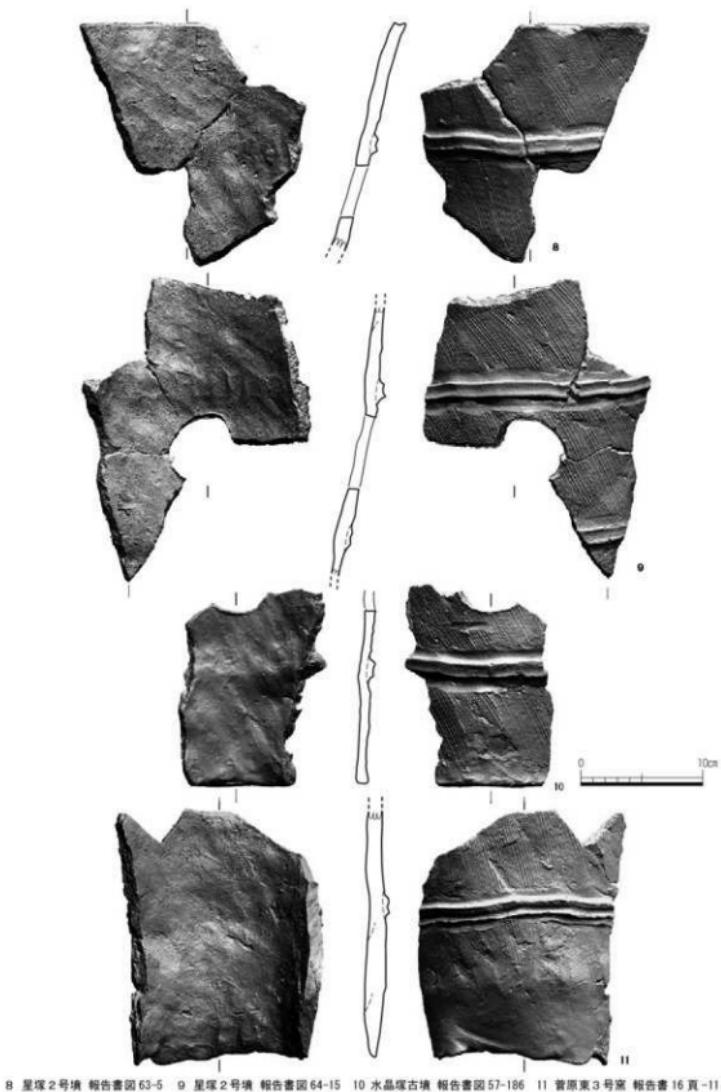


Fig. 32 管原東窯産埴輪の三次元モデル画像2 1:4

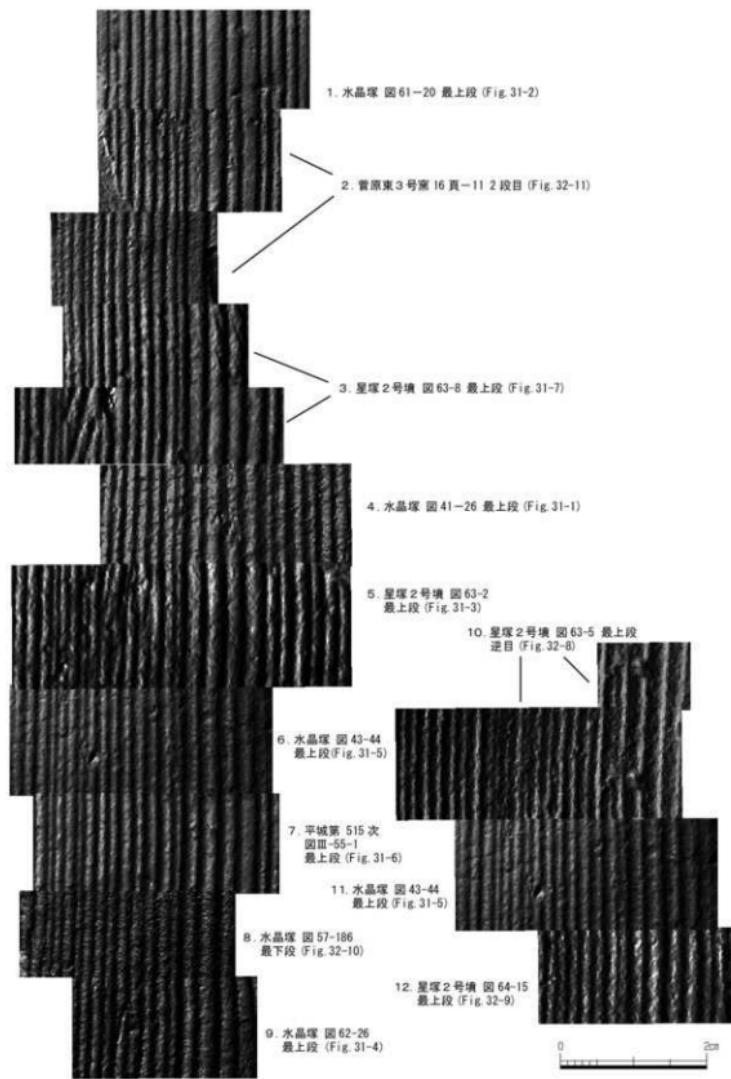


Fig. 33 菅原東窯産埴輪のハケメバターン同定（三次元モデル画像）3:2

て、三次元画像にもとづいて確認しておこう。口縁部資料の1～7はいずれも、外面に主軸を大きく左に傾けるナナメハケを施し、内面も同じく左上がりのユビナデを施す点で共通するが、口縁部の端部形状にはそれぞれ微細な差がある。突帯もヨコナデから断続ナデの擦痕が明瞭にはみ出すものと、そうでないものとがあり、工人ごとの作り癖を反映したものと理解できる。口縁部の特徴だけでは断定は難しいが、1と6、2と5はそれぞれ同工品の可能性があるものの、それ以外の3・4・7については別工人の製品と推測される。また、器形が大きく傾く口縁部片8と胴部片9は内外面の調整や突帯の形状・製作痕跡も酷似しており、同工品ないしは同一個体で、かつ1～7とは異なる別工人の製品とみてよからう。さらに、口縁部資料との対応は不明ながら、底部片である10と11は、突帯形状や底部調整の有無において完全に作り癖を異にしており、それぞれ別工人の製品と判断できる。

以上のように、菅原東窯を起点に確認される同一ハケメバターンの広がりは、同一木材から作出された兄弟工具を複数の工人が共有した結果と理解できる。すなわち、ここで取り上げた一群の資料は、菅原東窯において近い関係にあった特定の製作グループの製品に対応するとみられる。実際に各資料は、細部において工人差を内包するものの、内外面調整や突帯製作に関する基本的な特徴はよくまとまっており、工人相互が製作時に近い関係にあった様子を示唆する。

こうした兄弟工具を含むハケメバターンの共有と製作グループとの対応関係については、すでに田中が水晶塚古墳の全体像を分析する中で論じている通りである。ここでは三次元モデルを活用することで、異なる古墳・遺跡間の資料においても同様の現象を客観的に示すことができたと考える。ここに提示した資料は、そのすべてが同工品ではないものの、菅原東窯におけるまとまりある生産単位の一部を捉えたものであることは確かであり、さらにはその製品が一元的供給により複数の消費地へと搬出された状況を裏付けるものといえる。今後、これと同様の分析をさらに展開することで、埴輪の生産・供給関係の実態解明が進むことが期待される。

付論II 三次元計測による香芝市狐井城山古墳出土埴輪の再検討

香芝市狐井城山古墳は、墳丘長約140mを測る古墳時代後期の大型前方後円墳として著名である。顯宗陵や武烈陵に比定する意見があるように（塚口1995・1998・2020、白石1999・2011）、後期の前方後円墳としては王陵級の規模を誇る古墳として注目されてきている。

墳丘は城山古墳の名の通り、後世に城郭に改変されており変形が著しい。墳丘部では発掘調査がおよんでおらず、正確な規模や形状については明らかになっていない。発掘調査が実施されているのは西側の外堤のみであるが、外堤上にも後世の客土が厚くおよんでおり、埴輪列や葺石等の外表施設は未検出である。今回、報告するものは香芝町教育委員会（当時）が実施した西外堤における第4・5次調査出土、および表面採集による埴輪片である。Fig. 34は、香芝市教育委員会所蔵資料のうち、系統や年代の位置づけにおいて重要なものを抽出し、三次元計測により図化したもので、いずれも円筒埴輪片である。

1・2は胴部片で、外面には二次調整のB種ヨコハケが施されるが、2のヨコハケ工具は、ハケメの隆起が不明瞭で板ナデ状を呈する。ヨコハケの下に斜め方向のユビナデが散見できるが、タテハケは観察できず、ユビナデ後に直接、ヨコハケを施しているものとみられる。内面調整はナデで、ハケメの施工は確認できない。1の突帯は、断面台形で突出度があり、中期的な突帯I群である。

3～7も胴部片であるが、外面はいずれも一次調整のタテ・ナナメハケ、内面はユビナデ調整である。3・4・6には各一カ所、円形透孔の一部が残存する。突帯はいずれも、断続ナデによって貼付ける突帯II群とみられ、4や7ではヨコナデからはみ出したナデ付け時の擦痕が確認できる。5～7は破片中に2条分の突帯が遺存しており、突帯間隔は5が10.0cm、6・7が9.5cmを測る。5の内面下端付近には積上げの休止位置を示す明瞭な粘土紐接合痕が残るが、積上げ再開位置には、粘土紐接合強化のためのヘラ刻みを施している。

8～12は、底部および底部付近の破片である。8はわずかに底面が遺存しており、底部高は9.0cmを測る。突帯はいずれもヨコナデ調整を省略するいわゆる無調整突帯であり、底面が残存しない9～12も一条目突帯付近の破片であることが判明する。8～10では突带上に板オサエ痕が明瞭に確認できるが、貼付時のユビの単位はヨコ方向への動きが確認できることから、断続ナデによって貼付けられた突帯II群と判断できる。ただし、後述する11・12と比べてナデ付け痕跡が視認しづらいことから、あるいは簡易なヨコナデ調整が加えられている可能性もある。また9では、突帯に対応する位置の内面に板状工具の圧痕が集中しており、突帯の板押圧に対応した支持具の圧痕の可能性がある。

一方、11・12は一見すると、典型的な断続ナデ技法Bのようにもみえるが、上下のユビで粘土紐を摘まんだ際の後が遺存せず平坦面が形成されていることから、8～10と同様に断続ナデによる貼付後に板押圧が施されているものと判断できる。9～11には突帶上辺に、8では底部外面下端にL字形工具の擦痕が残っており、突帯割付技法（凹線技法）が用いられたことが判明する。

以上のように、狐井城山古墳の埴輪は典型的なV群円筒埴輪で構成され、かつその系統もII群の無調整突帯を含むことから、Aa類に属するものと判断できる。ただし、微量ながらB種ヨコハケや突帯の割付技法が残存する点、無調整突帯も典型的な断続ナデ技法Bではなく、板オサエによる整形技法が省略さ

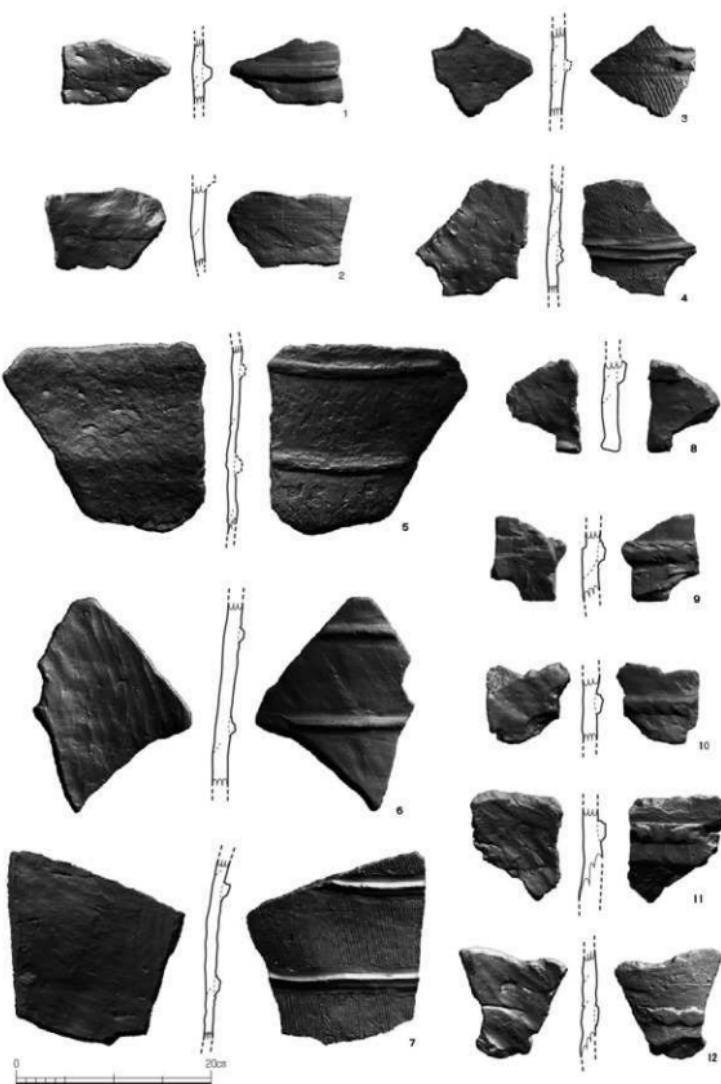


Fig. 34 狐井城山古墳出土埴輪の三次元モデル画像 1:5

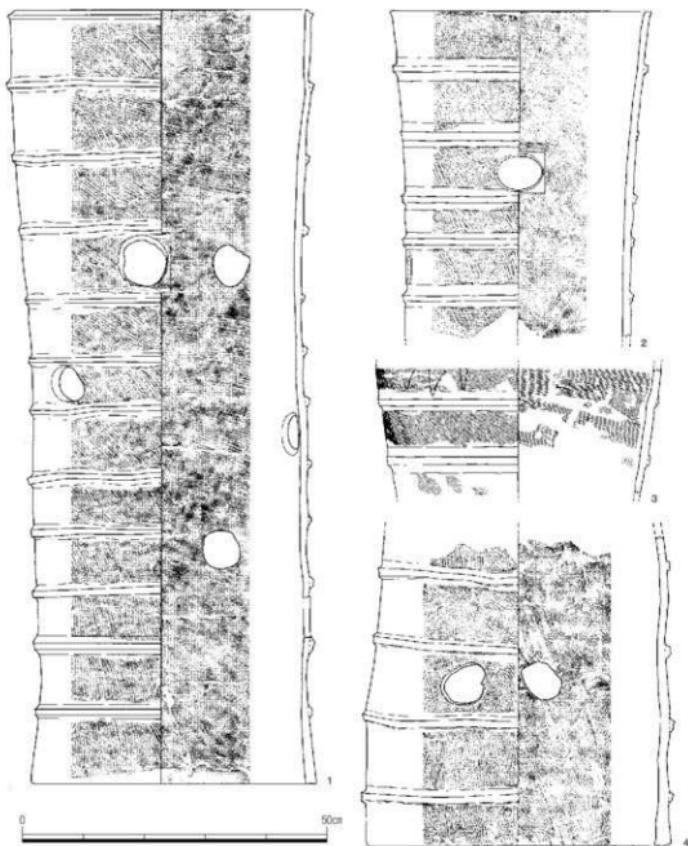


Fig. 35 下田東遺跡井戸SE74転用の大型円筒埴輪 1-8

れずに施されることからも、V期新相には下らず、V期中相に位置づけるのが妥当と考えられる。ただし、5・7の復元胴部径は30cm前後に達すること、さらには孤井城山古墳が大型の前方後円墳であることを踏まえると、これらの資料はいずれも多段構成の大型品である蓋然性が高い。古い技法が残存する状況は、大型品の保守的な製作状況を反映したものである可能性もある。

なお、5の外面には斜格子状の線刻が残る。波文ではあるが同様に胴部に線刻を施す例は、下田東遺跡K地区井戸SE74井戸枠転用埴輪にも散見される。下田東遺跡井戸枠転用埴輪は底部・胴部径が40cmを超えるものを含む大型品のみで構成され、全形が11条12段となることが判明するものがある。外面調整はV群特有のナナメハケを主体とし、突帯は突出度の高いI群と断続ナデで貼付けるII群とがあ

る。狐井城山古墳から約800m北という遺跡の立地状況からも、狐井城山古墳のために用意された埴輪が転用された蓋然性が高い。

狐井城山古墳については、これまで埴輪にもとづいて古墳時代後期という漠然とした年代観が与えられてきたが、今回の埴輪の再検討により、その年代はV期中相（TK47-MT15型式期）に絞り込むことが可能となった。また、埴輪の系統も盆地南部における主系統であり、古市古墳群とも親縁性のあるAa類に属すこと、加えて王陵級の古墳にふさわしい大型品の供給を受けている可能性も指摘することができた。おなじく、王陵の可能性が推測される北花内大塚古墳では、狐井城山古墳と同様に外面調整にB種ヨコハケ（板ナデ風のものを含む）が少量残存し、断続ナデによる貼付後に板オサエ整形を施すII群無調整突帯の存在（Fig 1-5）が確認できる。この点は、両者の埴輪の年代や生産集団の親近性を示唆するものとして注目されるが、詳細な比較のためには狐井城山古墳におけるより良好な資料の獲得が待たれる。今後の調査の進展に期待したい。

引用・参考文献

- 浅田博造2004「円筒埴輪の製作技法」『味美二子山古墳』春日市教育委員会
- 赤塚次郎1991「尾張型埴輪について」『池下古墳』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第24集
- 赤塚次郎1997「須恵器系埴輪の弔散」『古文化論叢』伊達先生古稀記念論集
- 天野末喜・松村隆文1992「近畿」『古墳時代の研究』第9巻 雄山閣
- 石田大輔2018「物部氏の奥津城－袖之内古墳群と石上・豊田古墳群」「ここまでわかった物部氏」天理市観光協会
- 石田大輔2020「布留遺跡周辺の古墳群」（池田保信ほか「大和布留遺跡における歴史的景観の復元」）『研究紀要』第24集 公益財團法人 由良大和古代文化研究協会
- 石母田正1955「古墳時代の社会組織」『日本考古学講座』河出書房
- 犬木 努1995「下絶型埴輪基礎考」『埴輪研究会誌』第1号
- 犬木 努1996「埴輪製作における個体内・工程別分業と種別分業」『埴輪研究会誌』第2号
- 犬木 努2005「下絶型埴輪再論」『埴輪研究会誌』第9号
- 今西康宏編2013「今城塚古墳の大円筒埴輪展」高槻市立今城塚古代歴史館
- 上田 瞳1997「出土埴輪からみた古市古墳群の構成」『堅田直先生古稀記念論文集』
- 大谷晃二2003「円筒埴輪基底部再調整の技法復元」『宮山古墳群の研究』鳥根県古代文化センター調査研究報告書16
- 加藤一郎2008「大山古墳の円筒埴輪」「近畿地方における大型古墳群の基礎的研究」平成17年度～19年度科学研究費補助金（基盤研究（A））研究成果報告書 六一書房
- 加藤一郎2010「出土遺物」（『百舌鳥陵墓参考地埴輪据護岸その他整備工事に伴う事前調査』）『書陵部紀要』第61号 宮内庁書陵部
- 加藤一郎2011a「円筒埴輪について」「百舌鳥古墳群の調査5 御廟山古墳（GBY-6）発掘調査報告書」堺市教育委員会
- 加藤一郎2011b「出土遺物」（『小奈辺陵墓参考地埴輪据護岸その他整備工事に伴う事前調査』）『書陵部紀要』第62号 宮内庁書陵部
- 加藤一郎2013「古墳時代中期の埴輪生産に関する予察」「技術と交流の考古学」同成社
- 加藤謙吉2013「ワニ氏の研究」雄山閣
- 鍾方正樹1992「石見型埴輪の検討」「大和における円筒埴輪の地域性」「菅原東遺跡埴輪窯跡群の歴史的意義」奈良市教育委員会1992所収
- 鍾方正樹1997「中期古墳の埴輪」「史跡大安寺旧境内1」奈良市教育委員会
- 鍾方正樹1999「2条突縫の円筒埴輪」『埴輪論叢』第1号 墓輪検討会
- 鍾方正樹2003「円筒埴輪の地域性と工人の動向」「埴輪」第52回埋蔵文化財研究集会発表要旨集
- 鍾方正樹2017「近畿地方の土師質亀甲形陶棺と埴輪」『埴輪論叢』第7号
- 鍾方正樹・中島和彦・根上直子1995「奈良市秋篠町奈良少年院出土の埴輪の研究（上）（下）」「古代文化」第47巻第5・6号
- 狩野 久1970「郡民制－名代・子代を中心として－」『講座日本史』東京大学出版会
- 鎌田元一1984a「『郡』についての基本的考察」『日本政治社会史研究』上 墓書房

- 鎌田元一1984b「王権と部民制」『講座日本歴史1』東京大学出版会
- 河内一浩1988「古墳時代後期における紀伊の埴輪生産について」『巽三郎先生古稀記念論集 求真能道』
- 河内一浩2003「古墳時代後期における円筒形埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第4号
- 河内一浩2004「紀伊型円筒形埴輪再考」「地域と古文化」同刊行会
- 河内一浩2013「和歌山県の埴輪の地域色－古墳時代後期における紀氏の埴輪生産－」『埴輪研究会誌』第17号
- 河内一浩2019「紀伊型円筒形埴輪の扩散」『和の考古学』藤田和尊さん追悼論文集
- 川西安幸1977「淡輪の首長と埴輪生産」『大阪文化誌』第2巻第4号
- 川西安幸1978「円筒埴輪紹論」『考古学雑誌』第64巻第2号
- 木立雅朗2003「「刷毛目」調整と工具の基礎的研究 I」『立命館大学考古学論集』Ⅲ
- 木村 理2017「小古墳出土埴輪からみた古市古墳群の埴輪生産」『埴輪論叢』第7号
- 木村 理2018「大和における蓋形埴輪の生産体制－古墳時代後期を中心に－」『埴輪論叢』第8号
- 車崎正彦1988「埴輪の作者」『早大所沢文化財調査室月報』No.34
- 車崎正彦2004「埴輪生産体制論雑感」『市原市山倉古墳群』（財）市原市文化財センター
- 城倉正祥2009「埴輪生産と地域社会」学生社
- 白石太一郎1999「古墳からみた古代豪族」『考古資料と歴史学』吉川弘文館
- 白石太一郎2011「葛城の二つの大王墓－顯宗陵と武烈陵の問題－」『大阪府立近つ飛鳥博物館報』14号
- 十河良と2003「日置荘西町窯系円筒埴輪の検討」『埴輪』第52回埋蔵文化財研究集会発表要旨集
- 関川尚功1985「大和における大型古墳の変遷」『考古学論叢』第11冊
- 高橋克壽1992「器財埴輪」「古墳時代の研究」第9巻 雄山閣
- 高橋克壽1994「埴輪生産の展開」『考古学研究』第41巻第2号
- 高橋克壽1995「山津照神社古墳の埴輪と6世紀の畿内の埴輪」「琵琶湖周辺の6世紀を探る」平成6年度科学研究費補助金一般研究B調査成果報告書 京都大学文学部考古学研究室
- 高橋克壽2007「畿内の埴輪生産からみた渡来系集団の存在形態」「金工技術から見た倭王権と古代東アジア」平成16～18年度科学研究費補助金（基盤研究（C））成果報告
- 高橋克壽2012「埴輪」「講座 日本の考古学 古墳時代」（下）青木書店
- 田中智子2005「「絶持寺古墳群をめぐる埴輪生産と供給」「絶持寺遺跡」大阪府教育委員会
- 田中智子2013「古墳時代後期の埴輪生産・供給体制の実像をめぐって」『立命館大学考古学論集』Ⅵ
- 坂口義信1995「香芝－古代史の謎を探る①みんなで考えよう郷土の歴史を」「香芝進学」4号 香芝市役所
- 坂口義信1998「天皇陵の伝承と大王墓と土師氏」「網干善教先生古稀記念考古学論集」下 同論文集刊行会
- 坂口義信2020「『新展開』顯宗・武烈天皇の奥津城をめぐって」「古代史論叢」岩田書院
- 辻川哲朗1998「円筒埴輪突帯間隔設定技法の復元－埴輪受容形態検討の基礎作業として－」『埴輪論叢』第1号 塬輪検討会
- 辻川哲朗2003「突帯－突帯間隔設定技法を中心として－」『埴輪』第52回埋蔵文化財研究集会発表要旨集
- 辻川哲朗2007「埴輪生産からみた須恵器工人」『考古学研究』第54巻第3号
- 辻川哲朗2010a「近江・林ノ腰古墳の再検討」「同志社大学考古学研究会50周年記念論集」同論集編集委員会
- 辻川哲朗2010b「市尾墓山古墳出土埴輪の再検討」「同志社大学考古学シリーズX 考古学は何を語れるか」同志社大学

考古学シリーズ刊行会

辻川哲朗2012「須体朝期の近江の古墳」「湖をみつめた王－須体大王と琵琶湖－」平成24年春季特別展 滋賀県立安土城考古博物館

辻川哲朗2016「古代における土器製作技術の一侧面」「紀要」第29号 公益財團法人滋賀県文化財保護協会

内藤元太2018「大和南部地域を主眼とする後期円筒埴輪の系統」「埴輪論叢」第8号

内藤元太2020「大和南部型埴輪の展開とその背景」「古代学研究」第225号

中島和彦1992「「断続ナデ技法」の再評価」奈良市教育委員会1992所収

中野 咲2010「回転性を有するヨコハケを施した煮炊具－奈良盆地の事例について－」「韓式系土器研究」第2号

奈良市教育委員会1992「菅原東窯をめぐる諸問題」「奈良市埋蔵文化財センター紀要1991」

坂 純1994「奈良県の円筒埴輪」「橿原考古学研究所論集」第11号

坂 純2007「大和の円筒埴輪」「古代学研究」第180号

東影 悠2010「形象埴輪の製作技術－形象基部倒立技法の研究－」「待兼山考古学論集Ⅱ」大阪大学考古学研究室

東影 悠2018「古墳時代後期における埴輪生産と埴輪様式の特質」「ヒストリア」第271号 大阪歴史学会

東影 悠2019「大和南部における須恵器系埴輪の製作技術」「埴輪論叢」第9号

廣瀬 覚2011「西日本の円筒埴輪」「古墳時代の考古学」第1巻 同成社

廣瀬 覚2015「古代王権の形成と埴輪生産」同成社

廣瀬 覚2017「明石川流域における埴輪の展開とその背景」「播磨の埴輪」第17回播磨考古学研究集会実行委員会

廣瀬 覚2019「埴輪の生産・流通からみた古墳時代の権力生成」「考古学研究」第66巻第3号

藤井幸司2003「円筒埴輪製作技術の復原的研究」「埴輪」第52回埋蔵文化財研究集会発表要旨集

藤沢 敦2002「東北地方の円筒埴輪－窯窓焼成埴輪の波及と生産－」「埴輪研究会誌」第6号

藤沢 敦2003「東北地方の円筒埴輪－技法・系譜・伝播－」「埴輪」第52回埋蔵文化財研究集会発表要旨集

藤森勝則2006「古墳時代後期における円筒形埴輪の一様相－いわゆる紀伊型（環畿内南部型）埴輪について－」「紀伊考古学研究」第9号

藤森勝則2019「晒山10号墳（背見山古墳）出土の円筒形埴輪－紀ノ川下流域における基底部調整の事例紹介－」「埴輪論叢」第9号

堀川 徹2017「人制から部民制へ」「国造制・部民制の研究」八木書店

溝口優樹2015「人制・部制と地域社会」「日本古代の地域と社会統合」吉川弘文館

村瀬 陸2018a「大和北部地域を主眼とする後期円筒埴輪の系統」「埴輪論叢」第8号

村瀬 陸2018b「粘土付加からみた石見型埴輪の地域性」「埴輪論叢」第8号

村瀬 陸2019「菅原東遺跡出土石見型埴輪の検討」「奈良市埋蔵文化財調査年報 平成28（2016）年度」奈良市埋蔵文化財調査センター

山内英樹2001「愛媛県出土埴輪の基礎的研究（2）」「紀要愛媛」第2号（財）愛媛県埋蔵文化財センター研究紀要

山内英樹2003a「埴輪研究の現状と課題－「基底部調整」をめぐる諸問題について－」「宮山古墳群の研究」鳥根県古代文化センター調査研究報告書16

山内英樹2003b「円筒埴輪製作工程における「基底部調整」」「第52回埋蔵文化財研究集会発表要旨集

山内英樹2008「伊予の埴輪編年」「紀要愛媛」第8号（財）愛媛県埋蔵文化財センター研究紀要

- 山内英樹2018「円筒埴輪「基底部調整」再考」『埴輪論叢』第8号
- 横山浩一1978「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」『九州文化史研究所紀要』第22号
- 和田一之輔2005「揖津猪名川流域における古墳時代後期の埴輪供給関係」『待兼山考古学論集－都出比呂志先生退任記念－』大阪大学考古学研究室
- 和田一之輔2006「石見型埴輪の分布と樹立古墳の様相」『考古学研究』第53巻第3号
- 和田一之輔2012「鞍形埴輪の編年と系統」『文化財論叢』IV 奈良文化財研究所創立60周年記念論集
- 和田一之輔2017「近畿地方における鞍形埴輪2類の展開と背景」『古代文化』第68巻第4号

古墳・遺跡参考文献

(音楽谷古墳)

高橋克壽編2005『奈良山発掘調査報告Ⅰ』奈良文化財研究所学報第72巻

(奈良少年院古墳)

鏡方正樹・中島和彦・根上直子1995「奈良市秋篠町奈良少年院出土の埴輪の研究（上）（下）」『古代文化』第47巻第5・6号

(菅原東遺跡)

奈良市教育委員会1992a『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成3年度』

奈良市教育委員会1992b『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1991』

(ヤイ古墳)

村瀬 陰編2018『奈良市の埴輪』奈良市教育委員会文化財課埋蔵文化財調査センター

(率川古墳)

村瀬 陰編2018『奈良市の埴輪』奈良市教育委員会文化財課埋蔵文化財調査センター

(平城第515次SD10416)

川畠 純はか2014「左京三条一坊・二・八坪の調査」『奈良文化財研究所紀要2014』

(開古墳)

十文字健編2019『開古墳』大和郡山市文化財調査報告書第24集

(額田部孤塚古墳・南方古墳)

服部伊佐男編1991『松山古墳1』大和郡山市文化財調査概報21

坂 靖2015『駕体大王とヤマト』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館特別展図録第83冊

(水晶塚古墳)

坂 靖編2006「八条遺跡」奈良県立橿原考古学研究所報告第94冊

(星塚1・2号墳)

泉 武編1990「星塚・小路遺跡の調査」天理市埋蔵文化財調査報告書第4集

(岩室池古墳)

橋元哲夫編1985『岩室池古墳 平等坊・岩室池遺跡』天理市埋蔵文化財調査報告第2集

(佐々木塚古墳)

- 坂 靖編2001『下永東方遺跡』奈良県文化財調査報告書第86集
- 見須俊介編2015『佐々木塚古墳 第3～5次発掘調査報告書』川西町教育委員会
- 影山見智与編2016『佐々木塚古墳 第6次発掘調査報告書』川西町教育委員会
- (三宅瓢箪山古墳)
- 三宅町教育委員会2017『瓢箪山古墳第2次調査現地説明会資料』
- (石見遺跡)
- 千賀 久編1988『大和考古資料目録 石見遺跡資料』第15集 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- (黒田大塚古墳)
- 藤田三郎編1984『唐古・鍵遺跡 黒田大塚古墳』田原本町埋蔵文化財調査概要2
- 藤田三郎編1986『唐古・鍵遺跡 黒田大塚古墳』田原本町埋蔵文化財調査概要3
- (笠鉢山1・2号墳)
- 奥谷知日朗・藤田三郎編2005『笠鉢山古墳群』田原本町埋蔵文化財調査概要19
- (小阪里中古墳)
- 藤田三郎編1987『小阪里中古墳・里中遺跡』田原本町埋蔵文化財調査概要5
- (羽子田古墳群)
- 田原本町教育委員会2007『田原本の埴輪』田原本の遺跡5
- (別所羅子塚古墳)
- 石田大輔編2015『天理市の古墳100』天理市教育委員会
- (袋塚古墳)
- 石田大輔2014『天理市文化財調査年報』平成24（2012）年度 天理市教育委員会
- (御墓山古墳)
- 泉 武編1996『天理市埋蔵文化財調査概報』平成4・5年度（1992・1993年）天理市教育委員会
- (小墓古墳)
- 石田大輔2014『小墓古墳の検討』『袖之内古墳群の研究』袖之内古墳群研究会
- (西乗鞍古墳)
- 石田大輔編2016『袖之内古墳群Ⅰ 西乗鞍古墳』天理市埋蔵文化財調査報告第10集
- (勝山東古墳)
- 橋本輝彦編1995『平成6年度国庫補助による発掘調査報告書2』桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書16集
(鐘向石塚東古墳)
- 橋本輝彦編2001『平成12年度国庫補助による発掘調査報告書2』桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書22集
(毘沙門塚古墳)
- (財) 桜井市文化財協会1994『桜井市内埋蔵文化財1993年度発掘調査報告書』
- (赤尾崩谷2号墳)
- 橋本輝彦・木場佳子2004『赤尾崩谷古墳群』『大和を掘る22』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- (八重ヶ谷1号墳)
- 松宮昌樹編2002『磐余遺跡群発掘調査概報Ⅰ』(財) 桜井市文化財協会

(酒船石遺跡)

相原嘉之編2006『酒船石遺跡発掘調査報告書』明日香村文化財調査報告書第4集

(興善寺古墳)

樋口和弘1992「興善寺跡（第2次）の調査」『櫛原市文化財調査概要9』櫛原市教育委員会

(高所寺池SD9850・9870)

花谷 浩編2006『高所寺池発掘調査報告』奈良文化財研究所

(四条6号墳)

関川尚功編2009『四条遺跡I』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第105冊

(四条2・7・8・9・10号墳)

鈴木裕明編2010『四条遺跡II』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第106冊

(内膳4号墳)

千賀 久・竹田正則・露口真広編『海を越えたはるかな交流』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館特別展図録第66冊

(新沢千塚175号墳)

伊達宗泰編1981『新沢千塚古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第39冊

(新沢千塚166号墳)

橿原市教育委員会1988『史跡新沢千塚古墳群保存整備報告』

(新沢千塚225号墳)

奈良県教育委員会文化財保存課1992『史跡新沢千塚古墳群整備事業報告書』

(鳥屋ミサンザイ古墳)

笠野 稔1977「宣化天皇陵外堤漏水防止工事に伴う事前調査」『書陵部紀要』第29号

笠野 稔1989「身狹桃花鳥坂上陵整備工事箇所の調査」『書陵部紀要』第41号

宮内庁書陵部2006『出土品展示目録 墓輪V』

(觀覚寺鳥ヶ峰1号墳)

内藤元太2018「大和南部を主眼とする後期円筒埴輪の系統」『埴輪論叢』第8号

内藤元太2020「大和南部型埴輪の展開とその背景」『古代学研究』第225号

(市尾墓山古墳)

河上邦彦1984『市尾墓山古墳』高取町文化財調査報告第5冊

木場幸弘・富田真二・西村恵子2007『国指定史跡市尾墓山古墳整備報事業報告』高取町文化財調査報告第36冊

(イノツク5号墳)

松永博明1990「イノツク古墳群第2次発掘調査報告」高取町文化財調査報告第10冊

(イノツク6号墳)

木場幸弘編1991「イノツク古墳群第3次発掘調査報告」高取町文化財調査報告第11冊

(イノツク12号墳)

木場幸弘編1992「イノツク古墳群第4次発掘調査報告」高取町文化財調査報告第12冊

(谷田深谷1号墳)

- 内藤元太2020「大和南部型埴輪の展開とその背景」『古代学研究』第225号
- (まるこ山古墳)
名倉 恵編2007『まるこ山古墳』広陵町文化財調査報告第2集
- (牧野古墳)
河上邦彦編1987『史跡 牧野古墳』広陵町文化財調査報告第1冊
- (三倉堂遺跡)
岸 熊吉1934「木棺出土の三倉堂遺跡と遺物調査報告」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第12冊
- 前澤郁浩編2010『土庫遺跡群』大和高田市埋蔵文化財調査報告第9集
- (池田古墳群)
前澤郁浩編2001『奈良県大和高田市遺跡調査報告ダイジェスト池田遺跡』大和高田市教育委員会
- 内藤元太2020「大和南部型埴輪の展開とその背景」『古代学研究』第225号
- (下田東遺跡・下田東1号墳)
小島靖彦・辰巳陽一編2011『下田東遺跡』香芝市埋蔵文化財発掘調査報告書第12集
- (孤井城山古墳)
長谷川俊之1983「孤井城山古墳外堤試掘調査概報」「奈良県遺跡概報1981年度」奈良県立橿原考古学研究所
佐藤真二編『孤井城山古墳外堤第4次発掘調査概報』香芝町教育委員会
- (北花内大塚古墳)
土生田純之1980「埴口丘陵外堤護岸工事区域の調査」『書陵部紀要』第34号
- 土生田純之1982「埴口丘陵整備工事区域の調査」『書陵部紀要』第34号
- 清喜裕二・加藤一郎2006「飯豊天皇 埴口丘陵整備その他整備工事に伴う事前調査」『書陵部紀要』第58号
- 宮内庁書陵部2006「出土品展示目録 塩輪V」
- 清喜裕二・加藤一郎2007「飯豊天皇 埴口丘陵整備その他整備工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第59号
- (石光山17・20号墳)
白石太一郎ほか1976「葛城・石光山古墳群」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第31冊 奈良県立橿原考古学研究所
(寺口忍海D27号墳・H19号墳)
吉村幾温・千賀 久編『寺口忍海古墳群』新庄町文化財調査報告書第1冊
- (巨勢山460号墳)
本許 守編2007「巨勢山古墳群VI」御所市文化財調査報告書第30集
- (西清水2号墳)
上田 誠2009「土師の里遺跡の調査」『石川流域遺跡群発掘調査報告書』XXIV 藤井寺市文化財報告第29集
- (林10号墳)
山田幸弘・佐々木 理・上田 誠1998「林遺跡の調査」『石川流域遺跡群発掘調査報告書』XIII 藤井寺市文化財報告
第17集
- (林13号墳)
上田 誠2016「藤井寺市発掘調査概報」第34号 藤井寺市教育委員会
- (茶山遺跡)

- 羽曳野市教育委員会2002『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成6年度－』羽曳野市埋蔵文化財発掘調査報告書45
 (峯ヶ塚古墳)
- 羽曳野市教育委員会2008『古市遺跡群』XXIX 羽曳野市埋蔵文化財調査報告書60
- 羽曳野市教育委員会2010『古市遺跡群』XXX 羽曳野市埋蔵文化財調査報告書64
- 羽曳野市教育委員会2012『古市遺跡群』XXXIII 羽曳野市埋蔵文化財調査報告書69
- 羽曳野市教育委員会2016『古市遺跡群』XXXVII 羽曳野市埋蔵文化財調査報告書77
 (平井埴輪窯)
- 土井孝之編2017『平井遺跡、平井Ⅱ遺跡』公益財團法人和歌山県文化財センター
 (大日山35号墳)
- 仲原知之編2013『大日山35号墳発掘調査報告書』和歌山県教育委員会
 (冴山1号墳)
- 高橋美久二1993『城陽市冴山1号墳の埴輪（1）』『山城郷土資料館報』第11号
- 久保哲三1995『城陽市冴山1号墳の埴輪（2）』『山城郷土資料館報』第13号
- 堤圭三郎1999『冴山古墳群』『城陽市史』第3巻
 (坊主山1号墳)
- 豊島直博編2020『坊主山古墳群出土品報告書』奈良大学考古学研究調査報告書第25冊
 (丹條道路)
- 荒川 宏編1995『旦椋遺跡第1次発掘調査概報』宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第28集
 (塚本古墳)
- 近沢豊明・木村泰彦1984『長岡京跡右京第106次調査概要』『長岡京市埋蔵文化財報告書』第1集
- 木村泰彦1985『右京第173次調査概要』『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和59年度
- 竹井治雄・吉田野々1988『長岡京跡右京第266次発掘調査概要』『京都府遺跡概報』第27冊 財團法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 木村泰彦2010『長岡京跡右京第951次調査概要』『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第52集 財團法人長岡京市埋蔵文化財センター
- 小田桐淳編2010『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第53集 財團法人長岡京市埋蔵文化財センター
- 木村泰彦編2010『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第54集 財團法人長岡京市埋蔵文化財センター
 (舞塚1号墳)
- 山口 博・伊辻忠司・肥後弘幸1984『長岡京跡右京第83・105次発掘調査概要』『京都府遺跡概報』第9冊 財團法人
 京都府埋蔵文化財調査研究センター
 (井ノ内車塚古墳)
- 中島浩夫2018『長岡京市井ノ内車塚古墳』『畿内乙訓古墳群を読み解く』季刊考古学・別冊26
 (芝古墳)
- 熊井亮介編2018『芝古墳（芝1号墳）調査総括報告書』京都市文化市民局
 (今城塚古墳)
- 今西康宏編2013『今城塚古墳の大円筒埴輪展』高槻市立今城塚古代歴史館

(山津照神社古墳)

小野山節編1995『琵琶湖周辺の6世紀を探る』平成6年度科学研究費補助金一般研究B調査成果報告書 京都大学文学部考古学研究室

(鴨舎荷山古墳)

小野山節編1995『琵琶湖周辺の6世紀を探る』平成6年度科学研究費補助金一般研究B調査成果報告書 京都大学文学部考古学研究室

(下船塚古墳・日笠松塚古墳)

永江寿夫・網谷克彦・高橋克壽1991『日笠地区圃場整備事業に伴う発掘調査報告』上中町文化財調査報告第7集

(林ノ腰古墳)

福永清治2016『平成27年度野洲市文化財調査概要報告書』滋賀県野洲市教育委員会

(御明田古墳)

前川隆平1987『近江の円筒埴輪』『滋賀史学会誌』第6号

大道和人編『湖を見つめた王 錫体大王と琵琶湖』滋賀県立安土城考古博物館

(西宮山古墳)

八賀一晋編1982『富雄丸山古墳 西宮山古墳出土遺物』京都国立博物館

(土師片山古墳)

松本正信2009『土師片山古墳群』『香寺町史 村の歴史』通史資料編 姫路市

(播磨塚天神山古墳)

吉岡和哉編2001『播磨塚天神山古墳』松山市文化財調査報告書83

(土壤原V遺跡)

山内英樹2008『伊予の埴輪編年』『紀要愛媛』第8号 (財) 愛媛県埋蔵文化財センター研究紀要

(三島神社古墳)

山内英樹2001『愛媛県出土埴輪の基礎的研究(2)』『紀要愛媛』第2号 (財) 愛媛県埋蔵文化財センター研究紀要

挿図出典

Fig. 1 1・7：奈良県立橿原考古学研究所所蔵資料、2：橿原市教育委員会所蔵資料、3・4：香芝市教育委員会所蔵資料、5：宮内庁書陵部所蔵資料、6：大和高田市教育委員会所蔵資料、8：天理市教育委員会所蔵資料、筆者撮影。

Fig. 2 筆者作成。

Fig. 3 1～4：奈良県立橿原考古学研究所所蔵資料、筆者撮影。

Fig. 4 堺市文化財課所蔵資料、筆者撮影。

Fig. 5 1～7：奈良県立橿原考古学研究所所蔵資料、8：藤井寺市教育委員会所蔵資料、筆者撮影。

Fig. 6 1～4：奈良県立橿原考古学研究所所蔵資料、筆者撮影。

Fig. 7 1・2：奈良県立橿原考古学研究所所蔵資料、3・4：羽曳野市教育委員会所蔵資料、筆者撮影。

Fig. 8 1・3：奈良県立橿原考古学研究所所蔵資料、2・4：奈良市教育委員会所蔵資料、筆者撮影。

- Fig.9 1～9：(西清水2号墳) 上田2009、10～20：(林10号墳) 山田ほか1998、21～25：(林13号墳) 上田2016。
- Fig.10 1：(小葛古墳) 石田2014、2～4：(市尾墓山古墳) 木場ほか2007、5：(四条6号墳) 関川編2009。
- Fig.11 1・2：(水晶塚古墳) 坂編2006、3～6：(首原東遺跡) 奈良市教育委員会1992a。
- Fig.12 1：(音乗谷古墳) 高橋編2005、2：(袋塚古墳) 石田2014、3：(四条6号墳) 関川編2009、4・5：(水晶塚古墳) 坂編2006。
- Fig.13 1・2：(袋塚古墳) 石田2014、3・4：(水晶塚古墳) 坂編2006、5～7：(音乗谷古墳) 高橋編2005、8：(岩室池古墳) 榊元編1985。
- Fig.14 1～3：(圓古墳) 十文字編2019、4：(佐々木塚古墳) 坂編2001、5・6：(佐々木塚古墳) 見須編2015。
- Fig.15 1：(四条8号墳) 鈴木編2010、2・3：(三倉堂遺跡) 前澤編2010、4：(新沢千塚166号墳) 横原市教育委員会1988、5：(新沢千塚175号墳) 伊達編1981。
- Fig.16 1・2・4・5：大和高田市教育委員会所蔵資料、3・6～8：奈良県立橿原考古学研究所所蔵資料、筆者撮影。
- Fig.17 1・5：大和高田市教育委員会所蔵資料、2・4・6～8：橿原市教育委員会所蔵資料、3：奈良文化財研究所所蔵資料、筆者撮影。
- Fig.18 沢川2016より転載。
- Fig.19 1～6：(額田部孤塚古墳) 服部編1991、7・8：(額田部南方古墳) 服部編1991。
- Fig.20 1～8：(牧野古墳) 河上邦彦編1987。
- Fig.21 1～19：(四条2・7・8・9・10号墳) 鈴木編2010、20～25：(四条6号墳) 関川編2009。
- Fig.22 天理市教育委員会所蔵資料、筆者計測・作図。
- Fig.23 1～3：(袋塚古墳) 石田2014、4～6：(御墓山古墳) 泉編1996。
- Fig.24 1～8：(西乗鞍古墳) 石田編2016、9・10：(小墓古墳) 石田2014。
- Fig.25 1～5：(市尾墓山古墳) 木場ほか2007を一部改変。
- Tab.1 筆者作成。
- Fig.26 筆者作成。
- Tab.2 廣瀬2019表2に加筆。
- Fig.27 1・3～6：(大日山35号墳) 仲原編2013、2・7・8：(林ノ腰古墳) 福永編2016。
- Fig.28 1～5：(四条2・8・9号墳) 鈴木編2010、6：(新沢千塚175号墳) 伊達編1981、7：(イノワク12号墳) 木場編1992、8：(巨勢山460号墳) 本許編2007、9：(三倉堂遺跡) 前澤編2010、10：(御明田古墳) 前川1987、11～15：(林ノ腰古墳) 福永編2016。
- Fig.29 1：(音乗谷古墳) 高橋編2005、2：(胄山1号墳) 高橋1993、3：(芝古墳) 熊井編2018、4：(塚本古墳) 木村編2010、5～7：(山津照神社古墳) 小野山編1995、8・9：(西宮山古墳) 八賀編1982、10：(塚本古墳) 木村1985、11：(塚本古墳) 近沢・木村1984、12：(胄山1号墳) 堀1999、13：(坊主山1号墳) 畠島編2020、14：(土師片山古墳) 松本2009
- Fig.30 1・2：(土壤原V遺跡) 山内2008、3～5・8～10：(播磨塚天神山古墳) 吉岡編2001、6・7：(三島神社古墳) 山内2001。
- Fig.31 1・2・4・5：奈良県立橿原考古学研究所所蔵資料、3・7：天理市教育委員会所蔵資料、6：奈良文化財研究所所蔵資料、筆者計測・作図。

Fig. 32 8・9：天理市教育委員会所蔵資料、10：奈良県立橿原考古学研究所所蔵資料、11：奈良市教育委員会所蔵資料、筆者計測・作図。

Fig. 33 筆者作成。

Fig. 34 香芝市教育委員会所蔵資料、筆者計測・作図。

Fig. 35 1～4（下田東遺跡）：小島・辰巳編2011。

6世紀の埴輪生産からみた「部民制」の実証的研究

平成28～令和2年度科学研究費助成事業（基盤研究C）

研究成果報告書（課題番号：16K03179）

発行年月 2021年3月

編集執筆 廣瀬 覚

発 行 独立行政法人国立文化財機構

奈良文化財研究所

〒630-8577 奈良市二条町二丁目9番1号 ℡0742-30-6753

印 刷 岡村印刷工業株式会社

〒635-0143 奈良県高市郡高取町車本215 ℡0745-62-2701
